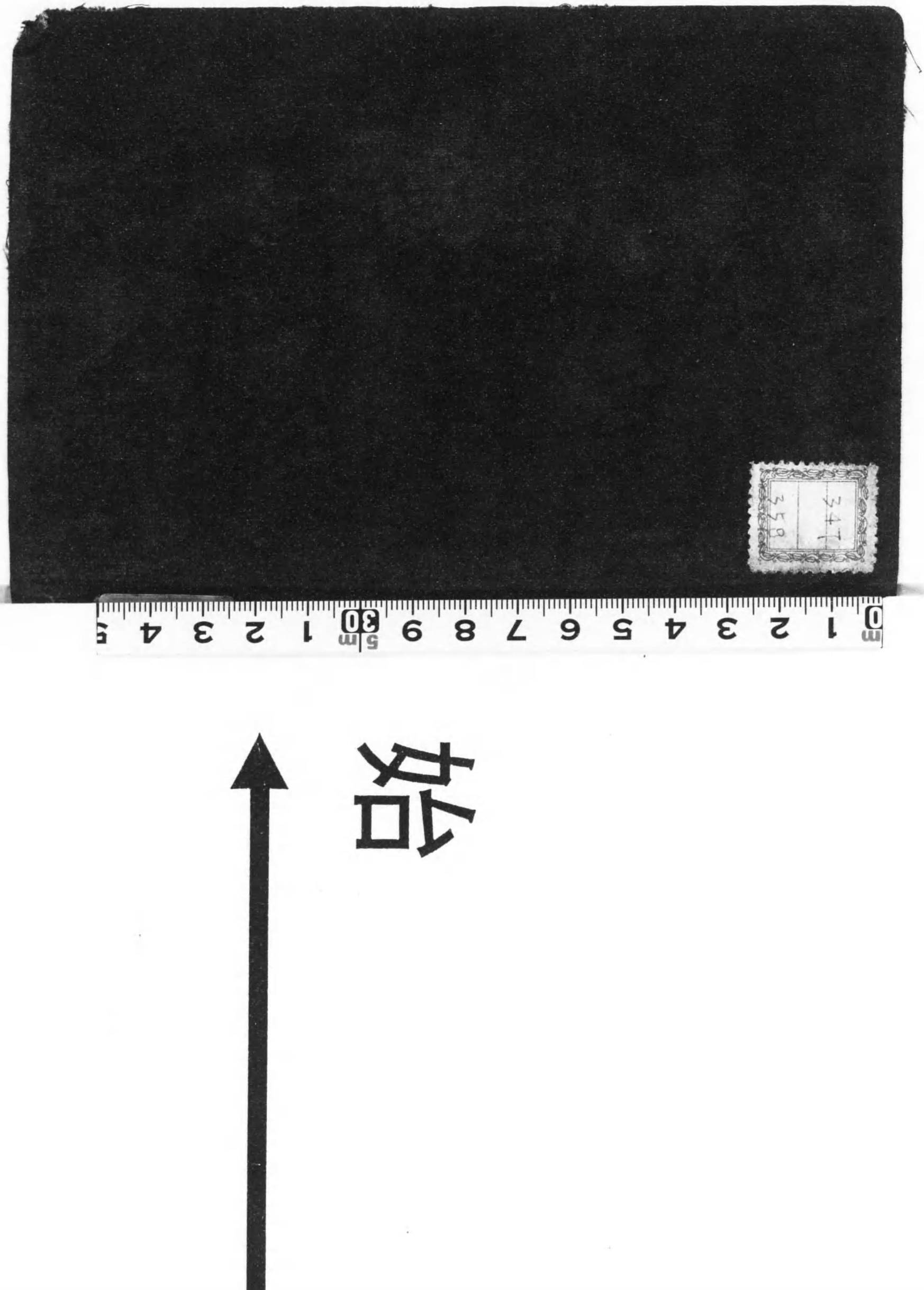

3471
3578

特206
850

KOKYO SEIKASHU

皇聖謳集

光明社

1933

NIHIL OBSTAT.

Sapporo, die 15. Maji 1933.

Didymus JORDAN O. F. M.

Vicarius Del.

IMPRIMATUR.

Sapporo, die 4. Sept. 1933.

✝ *Wenzeslaus KINOLD O. F. M.*

Epps Panemot. et Vic. Apost.

序

靈あるもの誰か歌なかるべき。況んや心琴の處るべきに處り、靈感の呼應、聖心の交響その時に適へるに於てをや。聖使徒は曰へり。

聖靈に滿たされよ
詩詠、讃美の聖歌の中に互に語れ
心々に主に歌うたひ奏でまつれ、と。

聖アウグスチノは其の入信の楔を自ら曰はずや。

妙に調ひし爾の聖會の聲の如何に我が心を打ちしか。その讃美の歌に我が泣きしこと幾許ぞ。耳朶に流れ入るその響。眞理は忽ちにしてわが胸底に滴り落ちて、敬虔の念慮率然として湧き、たぎつ涙、また止まるを知らず。あゝ我は爾の福祉の中に漂ひたりしよ、と。

これや寔に人の心境に一味相貫の自然、超自然交錯の尊き姿にあらずして何ぞや。されば敬虔の徒は聖詩歌の靈城を守るに吝ならず。實に旦には神を稱へ、夕にはシオンを思ひて

われ若し、神を想起せず
其の都をば歡びの極となさずんば
いで我が舌よ、顎に附け
いで我が右手よ、藝術を忘れよかし

と、ヘブレアの歌人の泣きしぞ思ほゆる。

今や藝術の母なる聖會、彌榮えに榮えて、讃美の歌の絶ゆる隙なし。聖敎の移植、我が邦土、日や淺き、人や稀なる、歌草の繁り、尙未だ豊饒を告ぐるに到らずと雖、茲に「聖歌集」一卷をものして聖用に供ふ。

神よ、冀くば心よりなる信證の實のりと受け給へかし。謹みて御名を尊み奉り、聖會のみ惠みに答ふるになむ。

新墾の野にかぎろひの草の花
摘みて結びて手むけるかも

一九三三年　望月　聖母被昇天の日

編纂者識

凡例

一　往年の日本公敎會司敎會議において、全敎區共通用のカトリック聖歌集編纂が議決され、依頼された數名の委員の手によつてその編纂が著手せられたのであるが、半途にして時期尙早との意見に遭遇し、一轉して公式聖歌集出版までの豫備として結成せられたものが本書である。

一　曲譜は邦人の手に成つたものも數種採つたが、多くは各國の異種多樣のものを選集し主として從來日本に於て用ゐられた一切の中から、適當と思はれるものを蒐集した。又歐洲に於て數百年前より使用され來つた恰ど古典的價値を有する曲をそのまゝ採つたのも可成ある。隨つて各歌曲は重厚、輕快、それ〴〵の趣きを有してゐる。それ故に各敎會にては、收められた多數の中から好む所の曲譜を自由に選んで用ゐられたい。

一　歌詞に至つては根本的に訂正、新作せられてゐるが、勿論完璧とは信じてゐない。日本にはカトリック聖歌が用ゐられてから年尙淺く、隨つて歌詞についても未だ深く留意されてゐない。それだけに又歌詞に對する種々な異見もあり得ることであらう。

一　一體聖歌の價値なるものは、その歌曲と歌詞とが藝術的の香りを含むことのみに依るのではなくして、實に敬虔の精神に添ふか否かに依るのである。之は各國の經驗が證明してゐる事實である。

一　カトリツク聖歌の眞義を悟るにはミサ典禮の精神を味得することが肝要である。乃ち典禮が客觀的の性質を有つてゐる如く聖歌も同樣の性質を大分に有してゐるのである。其處に時代、作者を超越したものが認められる。

一　本書に收めた聖歌の作曲者、作歌者等、一々その名を記入しない方針をとつたのもこのカトリツク典禮の客觀性に照應するものがあるからである。この點は世間一般の歌集や詩書と自ら撰を異にする。

一　典禮に於て許される限り日本語聖歌が一層頻繁に用ゐられることを望みたい。又歌隊のみに限られず、信徒一般が敬虔の念もて齊唱する善習慣の擴まらんことをも併せて希望する。その理由に依つて本書に收められたラテン語聖歌の曲譜も、多くの種類の中から殊更に齊唱に適する簡單なものを選んだ。

一　本書は此の聖歌集の發行に至るまでの多くの人々の勞作、第一に曲譜の選集、第二に歌詞の修正と作詩、第三に印刷と其の困難な校正其の他の事務等々に於ける夫々の擔任者の必死の努力に就て、特に第一、第二の點に於ては東京にある公教大神學校に深き感謝を表明し神がその働きに酬い給はんことを祈る。

「附　記」

一　聖歌の唱ひ方に就て、歌を遲緩せぬ樣に注意を乞ひたいと思ふ。總じて流暢輕快がよい

二　「折り返し」が最初に置かれてある歌は、必ず最後にも今一度これを歌つて、歌の結びとすることを忘れぬ樣に願ひたい。

三　殊に日曜日の「讀誦のミサ」の場合には、一番から十七番に至るまでのミサ聖祭の歌のみでなく、聖體の部にあるもの、或は祝日、季節に應じて他の歌をも適當に用ゐ得られる。その聖歌と聖歌との間にはそれ〴〵の部分に相當するミサの祈りを挾んで、齊誦するのは非常に奬むべき事である。然し、又聖體拜領前には共同或は個人的にその準備の祈禱を爲し得る幾許かの時間が殘る樣に、聖歌を加減して用ゐる事が大切である。

四　二〇六番の歌は洗禮の時のみではなく、初聖體拜領や堅振の秘蹟の時、又信徒一般の特別の集會の際に信仰宣言を表明するために用ひ得る。

一〇八番（テ　デウム）の歌は感謝を表す機會に用ゐるに最も適當である。

一九四番より一九九番までの死者と葬禮との歌は、勿論通夜の時などにも用ゐ得られるのである。

五　本書の卷末には歌詞の簡單な解說が附してあるが、委しい解說は別に發表して一般の便宜に具へる豫定である。

目次

序　一頁
凡例　三頁
目次　六頁
初行索引　八頁

ミサ聖祭　一—一七
待降節　一八—二二
御降誕　二三—四一
聖名　四二—四三
三王來朝　四四—四六
悔悛　四七—五〇
御苦難　五一—五六
十字架　五七—五九
悲みの聖母　六〇—六二
枝の主日　六三

御復活　六四—七二
御昇天　七三—七四
聖靈　七五—八一
三位一體　八二
聖體　八三—九四
聖心　九五—一〇七
主に對する讃美　一〇八—一一八
主に對する讃美　一〇八—一一〇
主に求む　一一一
主禱文　一一二—一一三
信望愛　一一四—一一五
攝理　一一六
奉献　一一七—一一八
キリストに對する歌　一一九—一二八
キリストに對する歌　一一九
我が主を愛する歌　一二〇

愛の歌　一二一
熱き願ひ　一二二
御主を慕ふ　一二三
葡萄の樹　一二四
善き牧者　一二五
信頼　一二六
熱心　一二七
王なる基督　一二八

聖母　一二九—一七二
無原罪の聖母　一六〇—一六二
聖母月　一六三—一六六
被昇天　一六七—一六八
聖母の御名　一六九—一七一
聖母（小兒用）　一七二

天使　一七三—一七七
大天使聖ミカエル　一七三
天使　一七四—一七七

聖人　一七八—一九三
聖ヨゼフ　一七八—一八〇
聖ペトロ　一八一—一八二
日本聖殉教者　一八三—一八五
聖フランシスコ・ザベリオ　一八六—一八八
アシジの聖フランシスコ　一八九
聖アロイジオ　一九〇
小さき花の聖テレジア　一九一
諸聖人　一九二—一九三

死者　一九四—一九五
葬禮　一九六—一九九
天國　二〇〇—二〇一
雜　二〇二—二一二
聖家族　二〇三—二〇三
聖會　二〇四

救靈の水　二〇五
奉教の誓ひ　二〇六
邦國のため　二〇七
幼兒の歌　二〇八
夕べの歌　二〇九
善き終りを願ふ　二一〇
勤行を了へて　二一一
聖堂を出づる時　二一二

ラテン語聖歌　二一三—二二八
パンジエ リングア　二一三
オ エスカ　二一四
アドロ テ オ パニス　二一五
オ サルタリス　二一六
アドロ テ デヴオテ　二一七
パニス アンジエリクス　二一八
タントウム エルゴ　二一九—二二四
アドレムス　二二五—二二六
アレルヤ　二二七
歌ミサ　二二八

歌詞小註　二五七頁

—終—

初行索引

あ

ああイエズスマリア　二〇二
ああしゆよ　九四
ああなつかしき　一四二
ああみははマリア　七一
あいのいけにへの　九五
あいのしゆよ　一五
あいのみははよ　一四九
あかつきのほしよ　一四四
あさなゆふなに　一七四
あさにけに　六二
アドレムス　二二五
アドロテオパニス　二一五
アドロテデヴオテ　二一七
あなめでたきかな　一二九
あはれこの　四三
あはれみのかみ　二一
あはれみのみこころ　一〇六
あふぐもかしこし　一〇二
あふぐもたふとし　四二
あふげやあふげや　三六
あまつみはは　一三〇
あめつちをつくり　一二八
あめつちのしゆよ　一六
あめつちのわかれし　一六二
あめなるきさいの　一四七
あめなるきさいよろこび　七二
あめなるみかみに　一一八
あめにはみさかえ　二八
あめにますみちちよ　一一三
あめにますわれらのちち　一一二
あめにみさかえ　二
あめのかどきみはのぼり　一四一
あもりきます　四五
あやにくすしき　一七一
あれきこゆるうた　二七
アンナのみこ　一三三

い

イエズスのみこころ　一〇三
いけにへを　一三
いざいざよろこべ　六六
いざやこよしゆのみもとに　九八
いざゆかな　一七〇
いざよのとも　三五
いざわがのぞみ　七
いたましくもたてる　六〇
いとしもきよき　五
いとたかきみははよ　一三六
いにけるそのたま　一九六
いのちのかてにと　八七
いのりする　一五三
いはへやうたへ　六四
いばらのかむり　五一
いまはのゆふげ　九

う

うけしみめぐみの　一二
うけましし　五三
うつしよにも　一四五
うるはしきよけし　一三一
うるはしくも　一三二
うるはしの　一一九
うるはしみ　一六五
うれしきこのとのに　一五〇
うれひかなしみに　二〇三

お

オエスカヴイアトルム　二一四
ををしくもいさぎよき　一八四
おおせいなる　一八八
おおマリアうましき　一四六
をさなきをめで　二〇八
オサルタリス　二一六
おそれなき　四九
をはりのやすみの　一九七
オリブのやまより　七三

か

かをしたかみ　一五四
かぜもがをりて　一六四
かたくなびとの　一八三
かのをかこえ　一三九
かみこそ　八三
かみにはみさかえ　三〇
かみにませば　一一五
かみのこの　一八二
かみよみやをさりて　二一二

き

きけたへなるしらべ　二四
きませすくひぬし　二二
きませみたまよ　七六
きみならで　四八
きよきをとめとて　一五五
きよくたふとき　四
きよけきしゆのあい　九六
きよけきみからだ　八四
キリエ　エレイソン　二二八

け

けがしきめにこそみえね　一四
けがれもあらなく　一六一
けふしいくちよの　一九二
けふみあるじは　三三

こ

こころもきよけき　一六〇
こよなきめぐみの　五七
こよひも　二〇九

さ

さかえもさちも　二〇〇
ささぐるうたこそ　一三八
さつきのきさいを　一六三
さんみのみかみの　一

し

シオンよながうたを　九〇
しきしまの　一八五
しのはりよいまいづこ　一五九
しゆこそわがほまれよ　一一〇
しゆにたのみまつる　二〇五
しらべもたへに　九七
しらゆりときよく　一九九
しろたへのきぬに　六五

す

すくひのみこはけふ　三二
すくひのみこはくだり　三九

そ

そらのかなた　一四〇

た

たかくたふとく　一三四
たがたてつる　一八一
たふときつとめを　二一一
たふときみやぬち　八五
たふときヨゼフよ　一七九
たのしけく　一六六
タントウメルゴ　二一九

ち

ちちなるみかみよ　八二
ちよろづに　八〇

つ

つみびとなるみを　六

と

とどめたまひける　八九

な

なつかしのははよ　一四三
なべてのたみよ　一〇九
なべてのひとを　二九
なみだのかわくひまなく　一一一
なやみしげきたびなれや　一〇一
なやみつかれまし　五六

は

はしきみこはも　四六
はしらになひつ　五四
パニス アンジエリクス　二一八
はるはうばよ　一〇〇
パンジエ リングア　二一三

ひ

ひいづるくに　二〇七
ひかりもくすしき　四四
ひさかたのあまつみそら　七八
ひさかたのあめにもとよむ　三九
ひさかたのくもゐをはるか　七四
ひさかたのそのみやこさし　七九
ひじりらを　一〇四
ひせきにこもりて　九二
ひせきにこもれる　八八
ひとどとに　一七六
ひのもとに　一八六

ふ

ふけゆくしじまを　二三
ふりさけみれば　一二三

ほ

ほめよたたへよかみの　二〇四
ほめよたたへよちよよろづ　五八

ま

まづしきをもとめて　一八九
まてしばし　二〇一
まなかひに　五〇
まぼろしのかげを　四七

マリアさま　一七二

み

みいつかぎりなき　八
みかみのたまひし　一一四
みかみはみづからの　一八〇
みこころに　一二二
みこそいぶせき　二五
みことそのははの　一七八
みこのじふじかの　六一
みさかえきみにあれや　六三
みすくひのみづに　二〇六
みそらにきこゆる　一二六
みそらゆく　二六
みたまよあもりて　七七
みたまよくだりて　八一
みたまよゆたけき　七五
みつかひあきのみやゐに　一六八
みつかひのパン　九一
みつかひのりたまへば　一五七
みつかひのをさと　一七三
みはくぎうたれつ　五五
みははよながこらは　一四八
みまやのともしび　三七
みめぐみふらせよ　二〇
みもたまも　一一七
みよやゲッセマニのその　一五八

め

めでたきかな　一三七
めでたし　一五六
めにこそ　八六

も

ものみなねむる　三四
もろびとこぞりて　九九
もろびとひれふし　一〇

や

やさしきみははよ　一九五
やすみしし　一〇五
やまとしまねに　一八七
やまとには　一五二
やみぢにさまよひ　一九
やみにすむひと　三一

ゆ

ゆくてはをぐらく　一七七
ゆふづつのかげの　一九一
ゆふやみかげくらく　五二

ゆふやみせまる　四一

よ

よきまきもりの　一二五
よにありしときの　一九四
よにたまはりし　三
よのいくさにかちし　一九三
よろこびたたへよ　七〇
よろこびのいづみ　一八
よろこびのくにの　九三
よろこべけふぞ　六七
よろづのくにたみ　六九
よろづのくにの　一〇七
よをさるともをば　一九八

ら

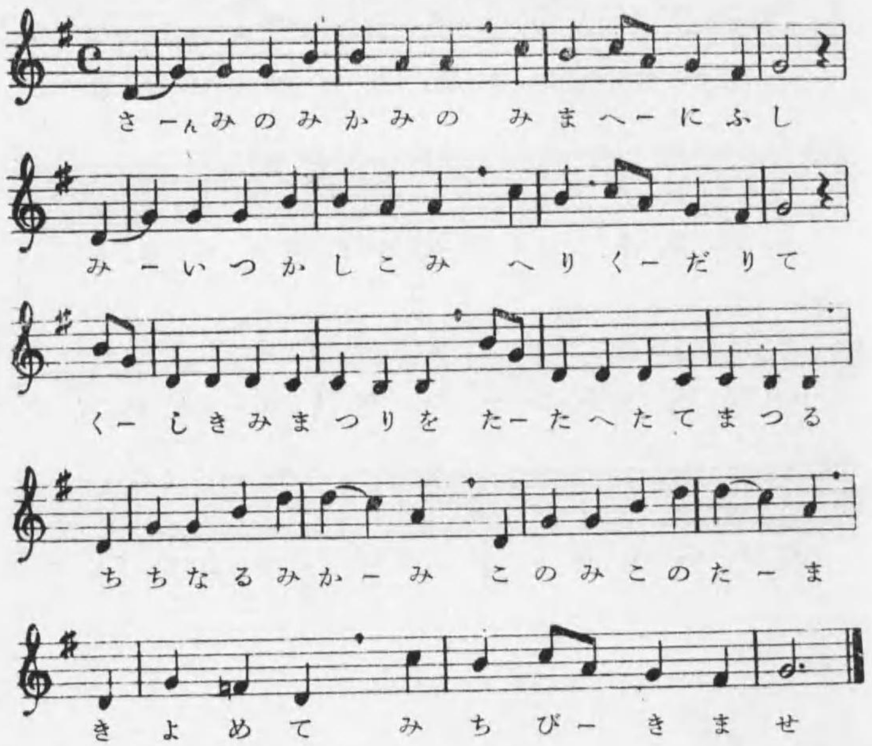
らうたきみこの　四〇

わ

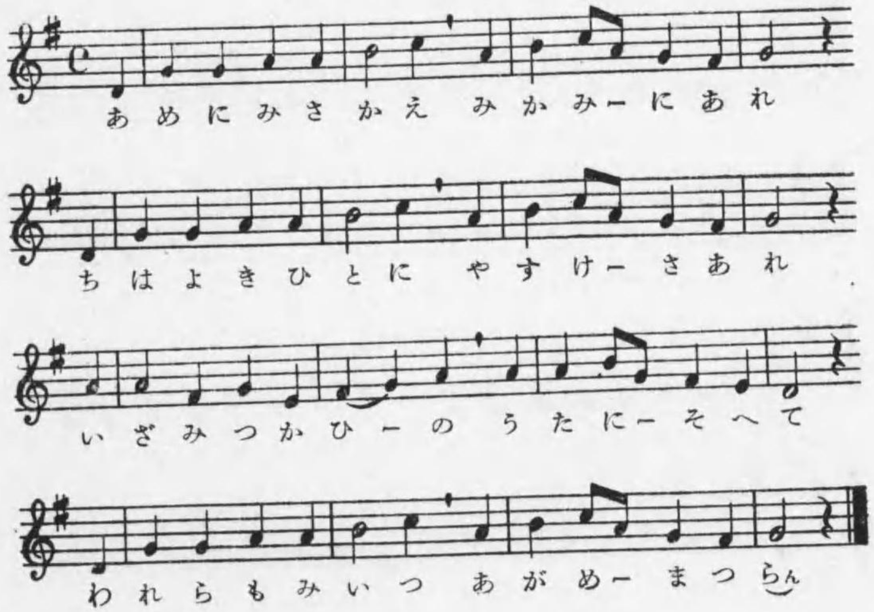
わかきひじり　一九〇
わがきみイエズス　六八
わがしゆの　一六七
わがたまのかて　一一
わがたまのひとりし　一五一
わがたまのみくにに　二一〇
わがためじふじかに　一二〇
わがともよなべて　一一六
わがみのまもりの　一七五
わがみはは　一六九
わがみわがたま　一二七
わたしのむねに　一七
わびしきひのとも　五九
われをあいして　一二一
われこそひときの　一二四
われらかみをほめ　一〇八
われらのははなる　一三五

1　ミサ聖祭（一）

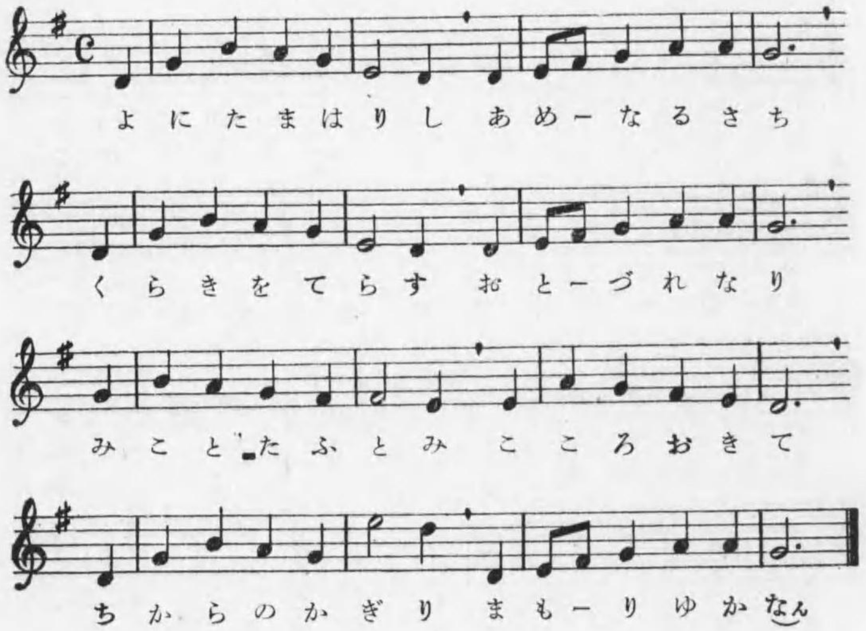
ミサの始まる時



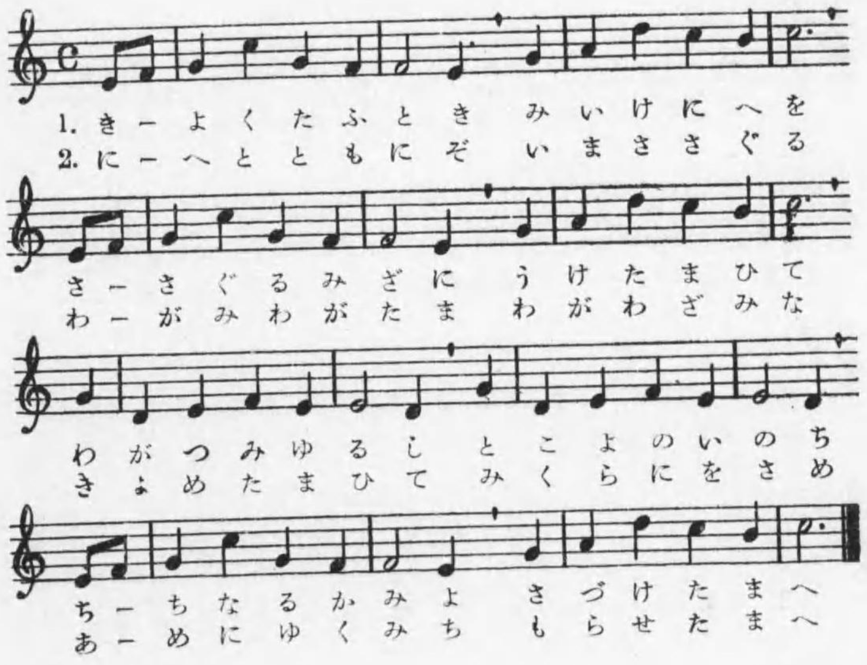
（三）位のみかみの
みまへに伏し
御稜威かしこみ
へりくだりて
奇しき聖奠を
稱へたてまつる
ちちなるみかみ
この身このたま
きよめて
みちびきませ



あめにみさかえ
みかみにあれ
地はよきひとに
やすけさあれ
いざみつかひの
うたに添へて
われらもみいつ
あがめまつらん



世にたまはりし
あめなるさち
くらきを照らす
おとづれなり
御言たふとみ
こころおきて
ちからのかぎり
まもりゆかなん

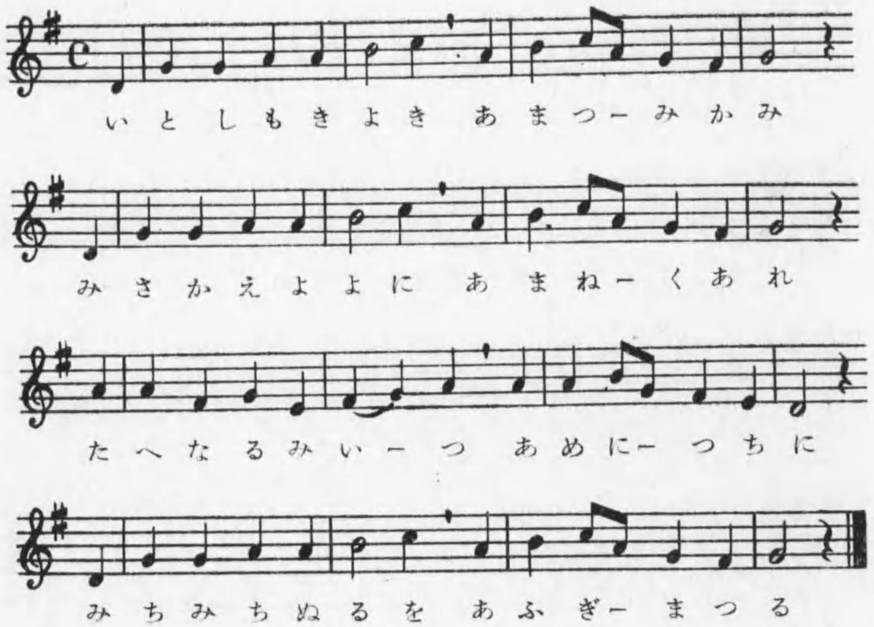


一

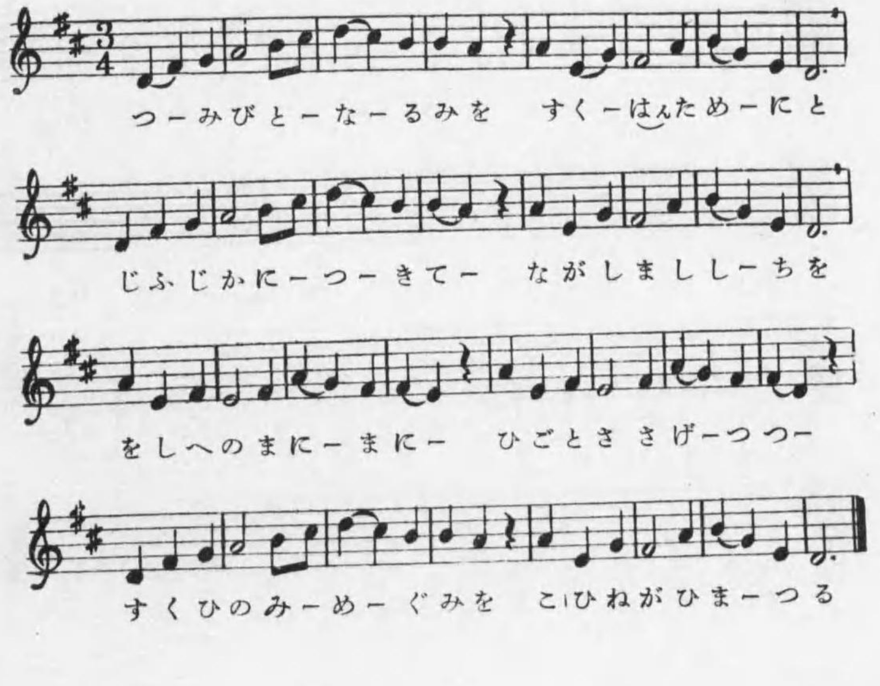
きよくたふとき　みいけにへを
ささぐる御座に　受けたまひて
我がつみゆるし　常世のいのち
ちちなるかみよ　さづけたまへ

二

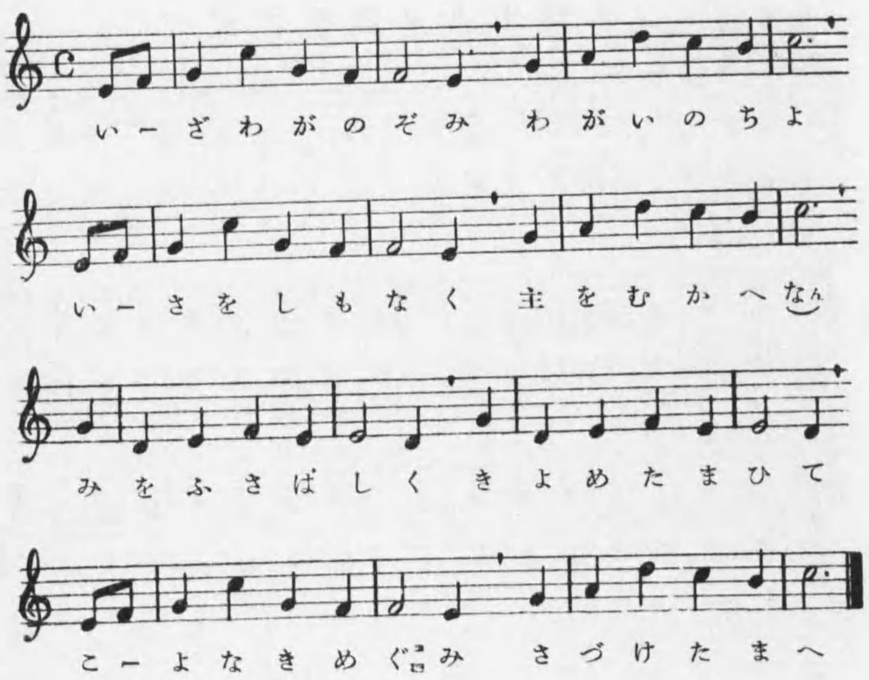
供物とともにぞ　いまささぐる
わが身わがたま　わがわざみな
きよめたまひて　御蔵にをさめ
あめに往くみち　守らせたまへ



いとしもきよき
あまつみかみ
みさかえ代々に
あまねくあれ
たへなる御稜威
あめにつちに
充ち滿ちぬるを
あふぎまつる

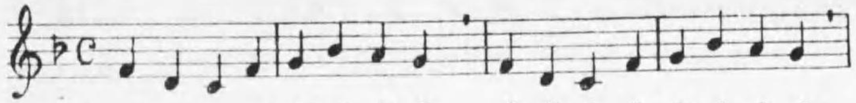


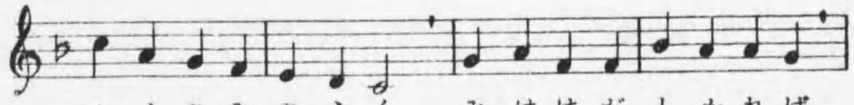
つみびとなる身を
すくはんためにと
十字架につきて
ながしまししし血を
をしへのまにまに
日ごとささげつつ
すくひのみ恵みを
こひねがひまつる

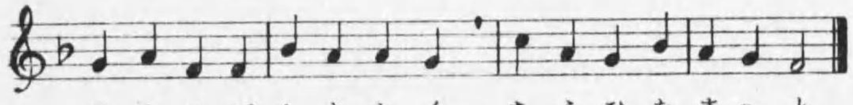


いざ我がのぞみ
わがいのちよ
いさをしもなく
主をむかへなん
身をふさはしく
きよめたまひて
こよなきめぐみ
さづけたまへ

入祭文より福音まで







一

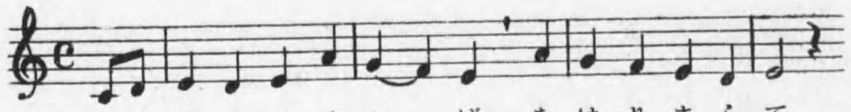
みいつ限りなき　あめなるみ父よ
かしこみ禱らく　身は穢しかれば
雪のごときよく　あらひたまへと

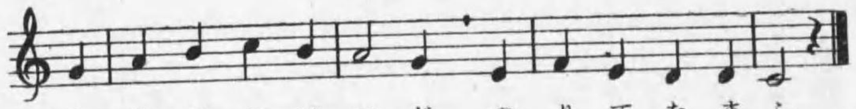
二

奇しき犠牲して　あな尊と御子は
いましめ告らく　これよわが聖體
いで取り喰ひて　いのちを得よと

三

御燈光さゆらぎ　燻もののけぶり
しめし告ぐらく　まことの祈りは
大御座のまへに　ともにのぼると





一

いまはのゆふげ　をはりまして
かみのこひつじ　宣りて賜ふ

二

「こは我がからだ　こはちしほぞ
とこはのかたみ　まもり繼げ」と

三

かみのひとり子　はしら附かせ
いさをなき身を　すくひたまふ

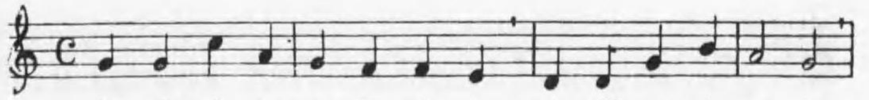
四

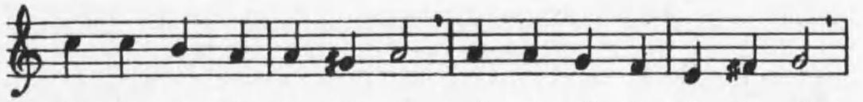
主よ主よゆめな　わすれやする
あいしまつらな　そのみことば

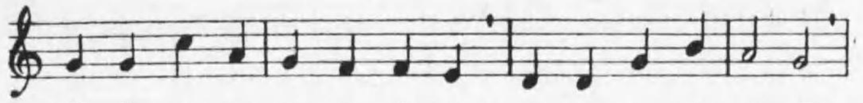
五

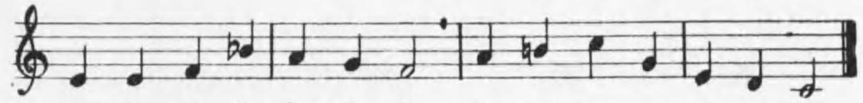
すくひのみかみ　くしき犠牲よ
わが身わがたま　きよめたまへ

聖變化後 10



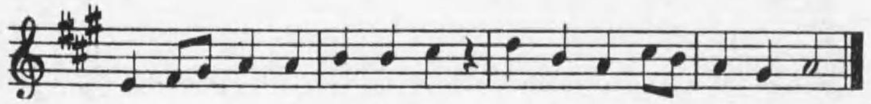




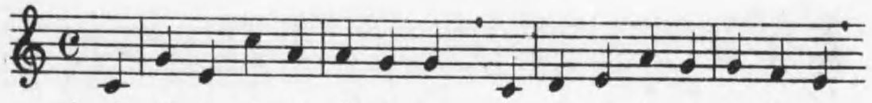


もろ人ひれふし
をがみまつれ
天降り來ませる
すくひぬしなり
救ひといのちを
たまへる主ぞ
いかでかわれら
まつろはでやは

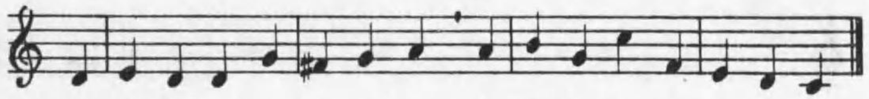
11 聖體拜領前



一 わがたまのかて とこしへの主を
二 こころに受けて いのちを得まし
三 主にあり生くる かよわきわれは
四 その血と肉に ちからを得まし
五 きみ我がために 十字架のうへに
六 いけにへとなり 賜ひし誓詞
主よ わざいざ主よ來ませ そなへはなりぬ
あ く われも身を棄て 新たに生きなん
よ き み よねがはくば 全きこころを
あ か ま あらたにつくり 生かしめたまへ



1. うけしみめぐみの　主のにくとちしほ
2. わがたまめさめて　みたまのみつるぎ

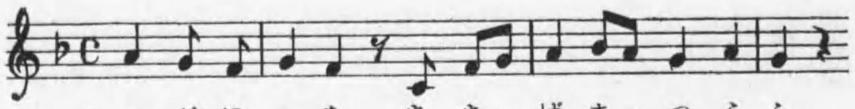


けがしきこのみを　きよめいかしめぬ
かざしたたかはな　きよきみいくさよ

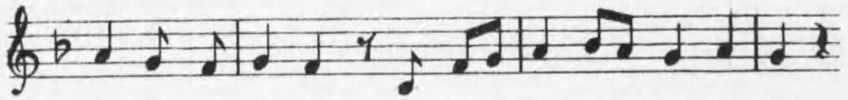
一　受けしみめぐみの　主のにくとちしほ
　　けがしきこの身を　きよめ生かしめぬ

二　わが靈魂めさめて　みたまのみつるぎ
　　かざしたたかはな　きよきみいくさよ

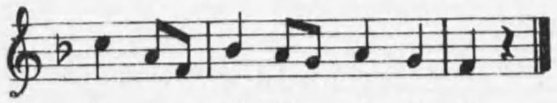
三　わが主わがかみよ　われをばまもりて
　　きみをとこしへに　たたへさせたまへ



1. いけにへを　ささーげまーつらふ
2. わがために　いのーちうーちすて
3. あさごとに　ささーぐるーにへに



みあるじの　みなーはかーをらな
すくひます　めぐーみむーくゆる
わがつみを　ゆるーすみーむねの



ちよーにやーちよに

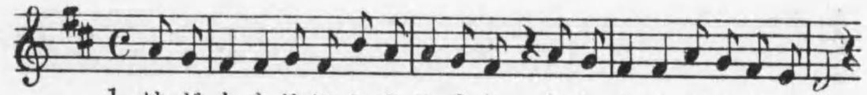
一　いけにへを　献げまつらふ　みあるじの　御名は薫らな　千代に八千代に

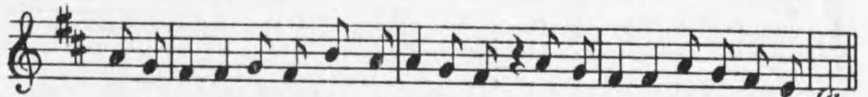
二　わがために　生命うち棄て　すくひます　めぐみ報ゆる　いけにへぞよき

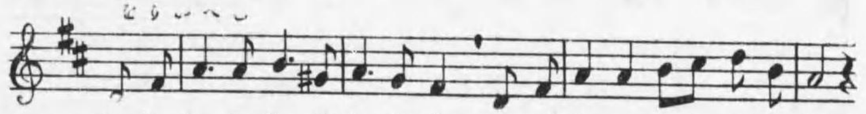
三　あさごとに　献ぐる犧牲に　わがつみを　ゆるす御旨の　あやにたふとき

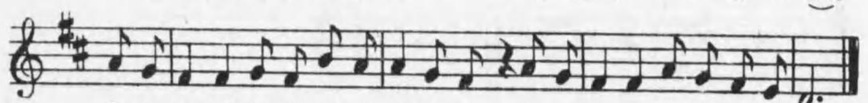
四　十字架の　にへの例しを　世に繼ぎて　絶せぬミサの　うれしきまつり

五　そら燒きの　けぶりの香り　たゆたひて　めぐみ偲ばゆ　かみの家ぬち







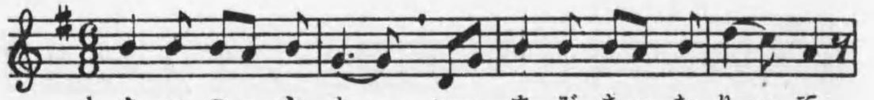


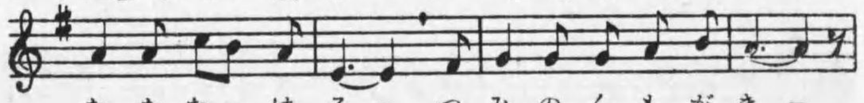
一 汚しき眼にこそ見えね 我等の糧となり
籠りませるイエズスこそ 我らに來ましけれ

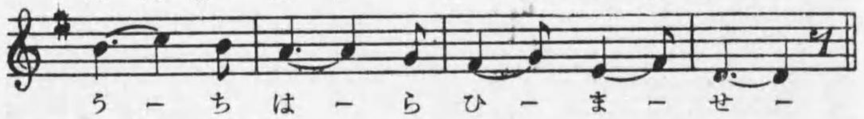
(をりかへし)
かしこし主ぞ來ます いざ迎へまつらん
われをぞわが心をぞ きよけく備へして

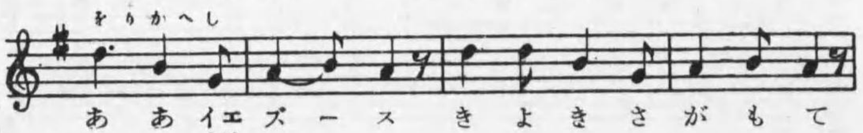
二 水なきあら野のはなよ 萎るるわが心
ひでりに待つ雨のごと 我身に降りませ

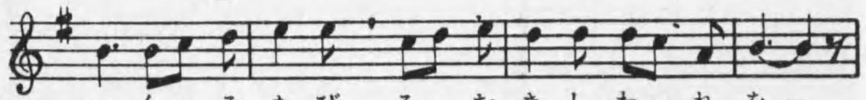
三 ちからのかぎりぞ備へ 愼しみ盡さめど
うたて我が靈いのらな み母よ助けませ

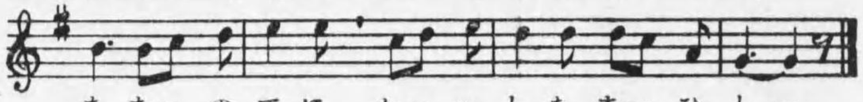










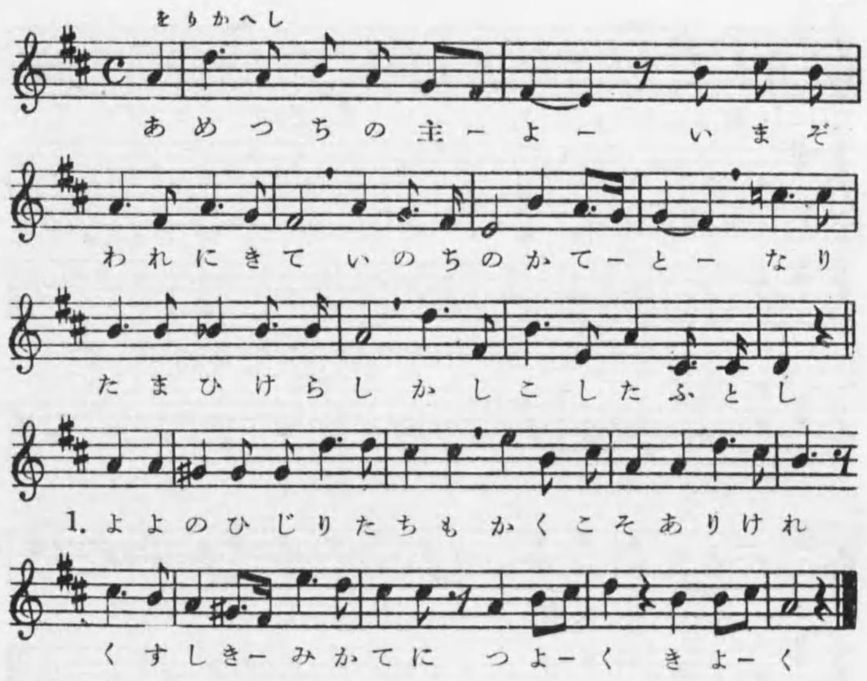


一 あいの主よ
いまぞ來りて たたなはる
罪のくもがき 打ち拂ひませ

(をりかへし)
ああイエズス きよき性もて
いくそたび そむきし我を
ちちの手に かへし給ひし

二 わがかみよ
身の卑しけば まかなひに
見こそ奉らね 信じまつれる

三 しろたへの
ホスチアの色 くちびるに
觸て來ますか 尊とし我が神



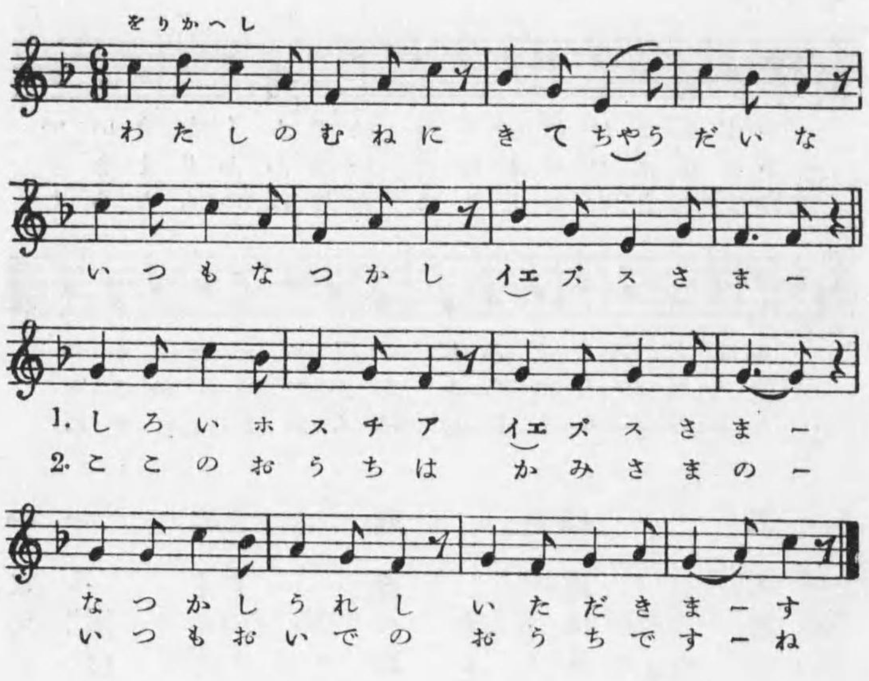
（をりかへし）
あめつちの主よ　今ぞわれに來て
いのちのかてと　なり給ひけらし
かしこし尊とし

一
世々の聖者達も　斯こそありけれ
くすしき御糧に　つよく きよく

二
飢ゑにし我靈も　ちから彌まさり
行く手の仇をば　うちて 勝なん

三
犧牲となりにし　きみと共に死に
きよらなる生命　生なん とはに

四
古き我は去りて　あらたなる我ぞ
君のみこころに　いつき かへる



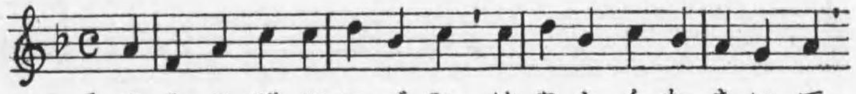
（をりかへし）
わたしのむねに　きて頂戴な
いつもなつかし　イエズスさま

一
しろいホスチア　イエズスさま
なつかしうれし　いただきます

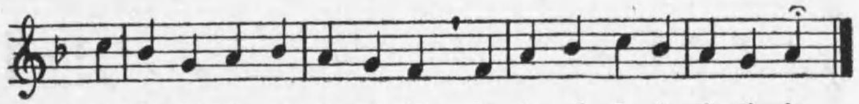
二
ここのおうちは　かみさまの
いつもおいでの　おうちですね

三
わたしのこころ　をりをりに
わるくなります　直して頂戴

四
さみしいときも　はなれずに
わたしのそばに　ゐてちやう戴



1. よろこびのいづみ　はやとくわきいで
2. さきはひのあめよ　いまかふりしきり
3. まことのひじりよ　あけぼのもたらし



かわけるこころに　おとづれたまひね
のろはれしつちを　あがひきよめこそ
とよひかりしめせ　めもあやにさやに

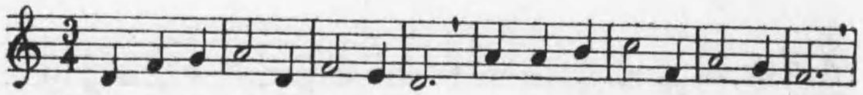
五　よろこびの泉　早とく湧きいで
渇けるこころに　おとづれ給ひね

四　露はみめぐみの　玉しき充たさば
あを人草はも　息づきてあらなん

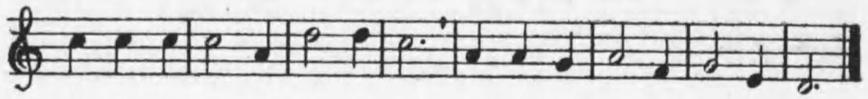
三　まことの日知よ　あけぼの齎らし
とよ光り示せ　眼もあやに明に

二　さきはひの雨よ　今か降りしきり
詛はれしつちを　贖ひきよめこそ

一　天なるひかりよ　いざやとく來ませ
望みいやたかく　我等まつものを



1. やみぢにさまよひ　いためるわれらは
2. なみだのたにをば　あへぎゆくぞうき
3. あめなるみちちよ　かなしむわれらの



すくひのひかりを　かわきまちのぞむ
すくひのきみはも　いづこにかおはす
せちなるいのりに　みかほなそむけそ

一　闇路にさまよひ　傷めるわれらは
すくひの光りを　かわき待ち望む

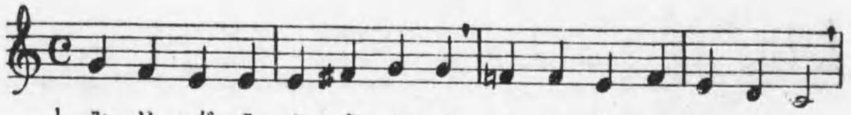
二　なみだの谷をば　喘ぎゆくぞ憂き
救ひのきみはも　いづこにか在す

三　あめなる御父よ　かなしむ我等の
切なるいのりに　み顏なそむけそ

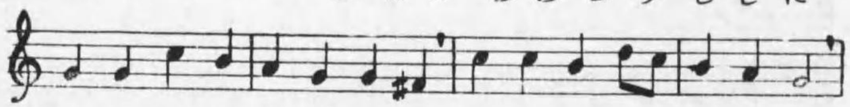
四　かみ我が御神よ　とく降したまへ
絶えざるみ光り　ぬばたまの闇に

五　世はさながらなる　たたかひの巷
平和のほぎうた　響くぞ待たるる

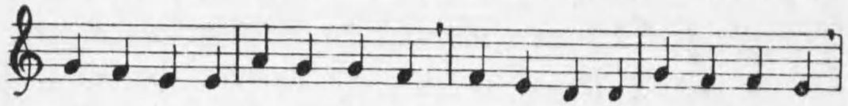
六　われらの望みよ　永久の慰さめよ
天なるすくひを　とく降したまへ



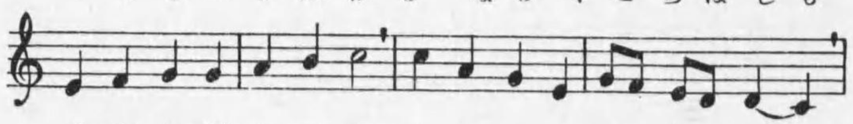
1. みめぐみふらせよ おほぞらのくも
2. ひじりらのいのり あめにひびかひ
3. あいといのちなる あめつゆしじに



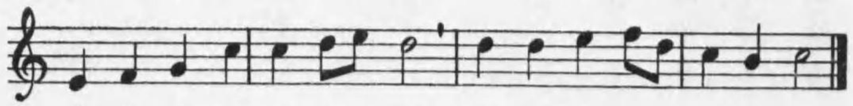
あまといでましてメシアよーきませ
つかひはマリアにおくられーにけり
しんりのまひかりあさひとーてりぬ



けがれにしづめる よをあがひたまふ
みたまのちからや をとめにやどりて
やよしのゆふかげ なげくこらはしも

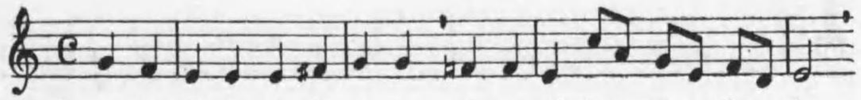


きみをばみまく たみのいのーれーばー
かみのみここそ あもりましーしーかー
きたりいきづけ このにはのーべーにー

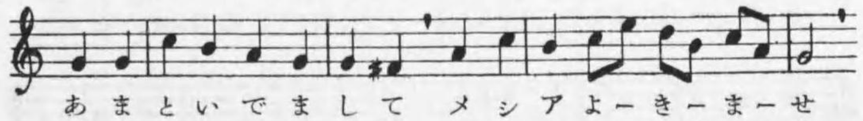


きみ をばみまー!く たみのいーのれば
かみのみここーそ あもりまーししか
きたりいきづーけ このにはーのべに

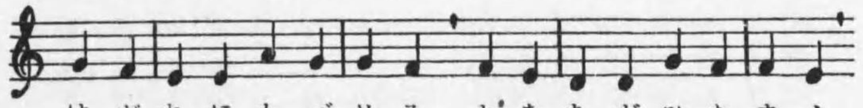
歌詞は前頁と同じ（但し各節の四行目は復唱）



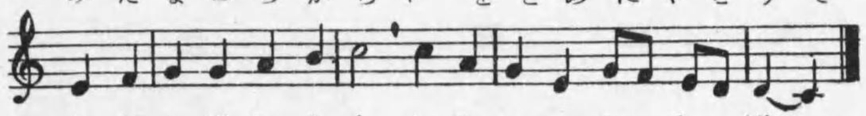
1. みめぐみふらせよ おほぞらーのーくーも
2. ひじりらのいのり あめにひーびーかーひ



あまといでましてメシアよーきーまーせ
つかひはマリアにおくられーにーけーり



けがれにしづめる よをあがひたまふ
みたまのちからや をとめにやどりて



きみをばみまく たみのいのーれーばー
かみのみここそ あもりましーしーかー

一

み恵み降らせよ
天戸いでまして
汚れにしづめる
きみをば見まく

大ぞらのくも
救主よ來ませ
世を贖ひたまふ
たみのいのれば

二

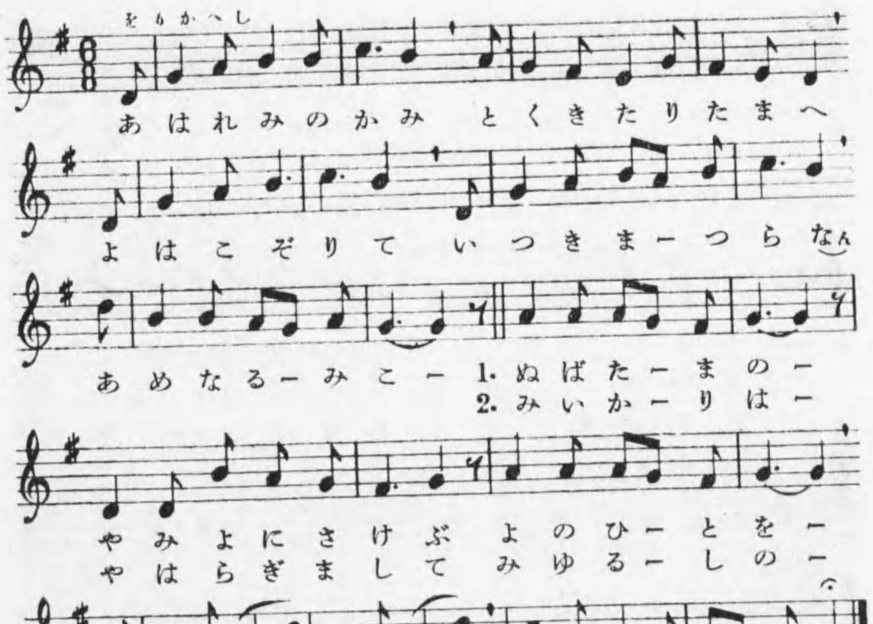
聖者等のいのり
天使はマリアに
聖靈のちからや
かみの御子こそ

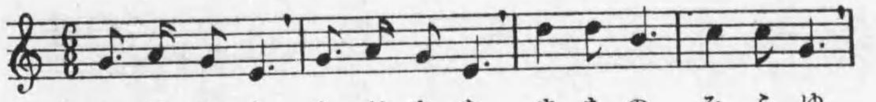
あめに響かひ
おくられにけり
處女にやどりて
天降りましかし

三

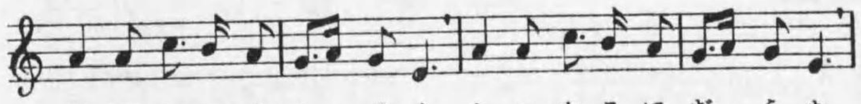
愛といのちなる
眞理のまひかり
やよ死の夕かげ
來たりいきづけ

あめつゆ繁に
あさひと照りぬ
歎く子等はしも
この庭のべに

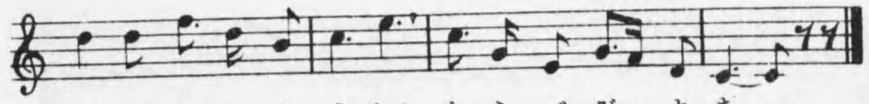

をりかへし
あはれみのかみ とくきたりたまへ
よはこぞりて いつきまーつらなん
あめなるーみこー 1. ぬばたーまのー
2. みいかーりはー
やみよにさけぶ よのひーとをー
やはらぎまして みゆるーしのー
あめにみーちびくーーー



1. ふけゆく しじまを まきの そらゆ
2. かみには みさかえ ちには やすき



はるかにきこーえく たへなるほぎーうた
とこしへなれーとふ うたごゑしるーけみ



みつかひやうたふしらべぞーよきー
はするまきもり主をやしーりしー

一

更ゆく 靜寂を
はるかにきこえく
みつかひやうたふ

まきのそらゆ
妙なる祝ぎ歌
しらべぞよき

二

神には みさかえ
とこしへなれとふ
走するまきもり

地にはやすき
歌ごゑ著けみ
主をや知りし

三

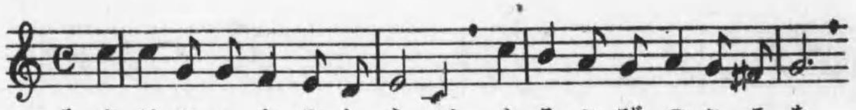
尊とき 御子はも
まぶねに在はして
ゆめなやぶりそ

いまは馬屋の
熟睡ぞ安けき
よるのあらし

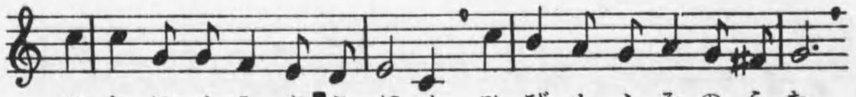
四

いく年 かぞへて
おもひ出うれしみ
うたひや明かす

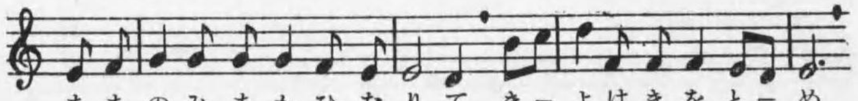
代々のその日
主を偲ぶ我等
直にあふまで



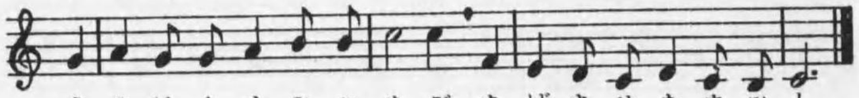
1. きけたへなるしらべ よろこびのこゑを
2. をとめこそはマリア まづしきうまやに



ひなにもみやこにも ひびかふそのうた
たびのやどりさむみ みこはあれましぬ



ちちのみちかひなりて きーよけきをとーめ
あめつちつくりしきみ かーよわきたみーの



うるはしきみこをぞあげさせたまひし
こころにきたりてしみやゐぞかしこき

一

きけ妙なるしらべ
鄙にもみやこにも
父のみ誓ひなりて
麗はしき御子をぞ

よろこびの聲を
響かふそのうた
きよけきをとめ
あげさせ給ひし

二

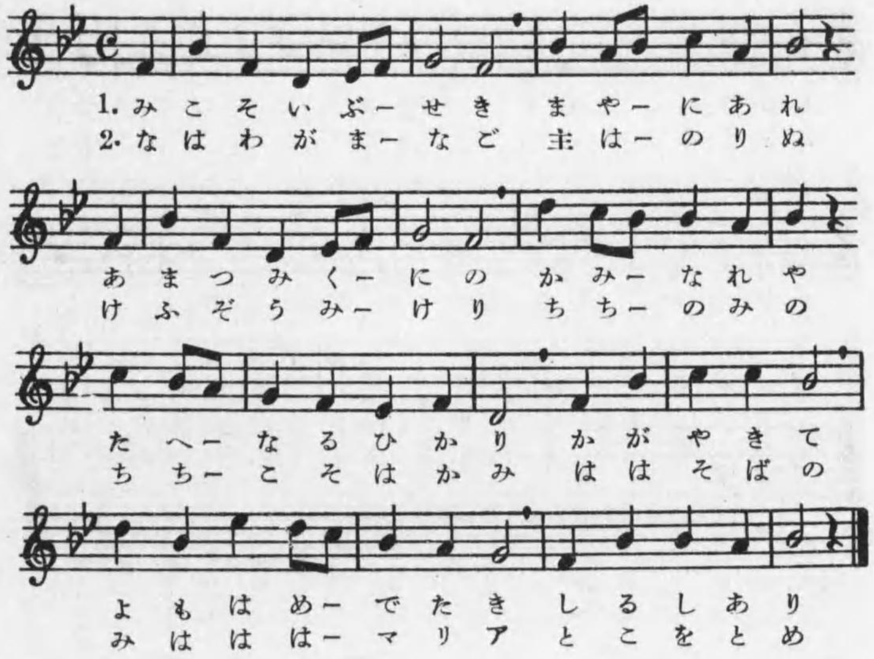
處女こそはマリア
たびのやどり寒み
あめつち造りし君
こころに來りてし

貧しきうまやに
み子は生ましぬ
かよわきたみの
宮居ぞかしこき

三

曙光ほのぼのと
御民のかなしみは
のぞみとあいと信
世は常しなへなる

夜は明はなれて
よろこびに變り
ゆたけくそだち
春をぞことほぐ



一

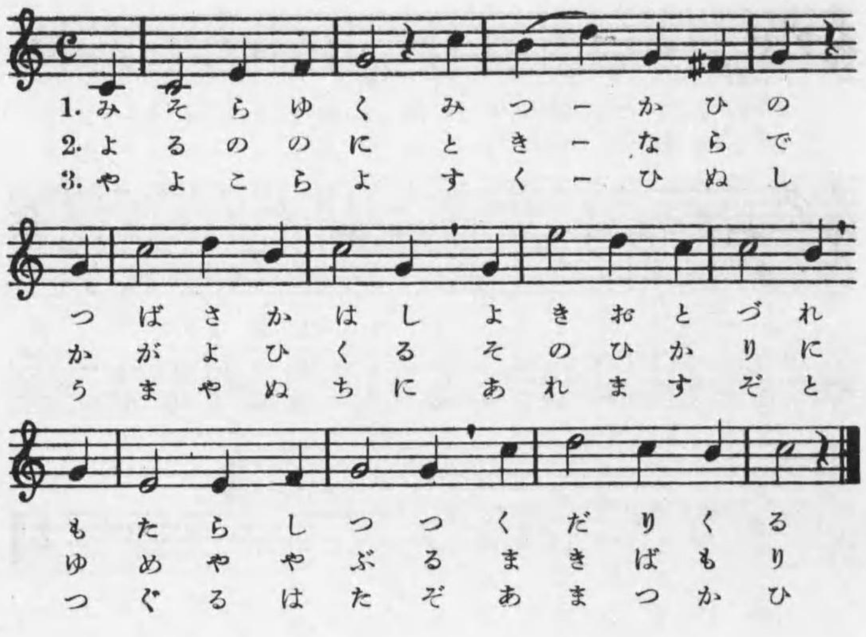
身こそいぶせき まやにあれ
あまつみくにの かみなれや
たへなるひかり かがやきて
四方はめでたき しるしあり

二

「なはわが愛子」 主は宣りぬ
「けふぞ生けり」 ちちのみの
ちちこそはかみ ははそばの
み母はマリア とこをとめ

三

なみだに充てる うつそみの
世は咲くはなの さにづらふ
わがおほぎみの しろしめす
御代とはなりぬ ほぎまつれ



一

みそらゆく みつかひの
つばさ交はし よき音づれ
もたらしつつ くだり來る

二

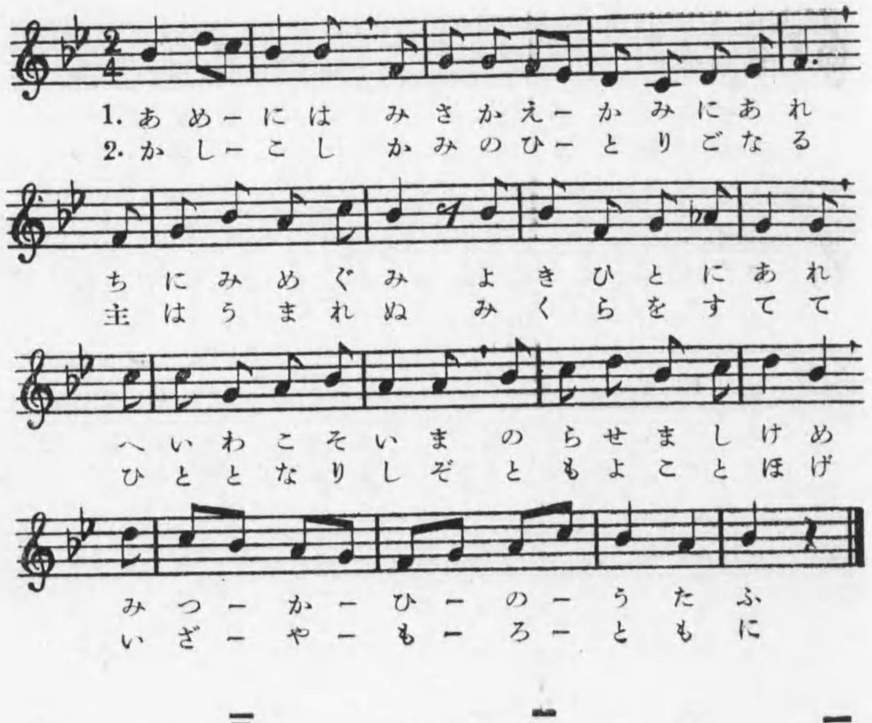
よるの野に ときならで
輝よひくる その光りに
ゆめや破る まきばもり

三

「やよ子等よ すくひぬし
うまやぬちに 生ますぞ」と
告ぐるは誰ぞ あまつかひ

四

わがこころ くらきとき
みつかひ來よ 光り出でよ
へりくだりて 吾が待てば



一

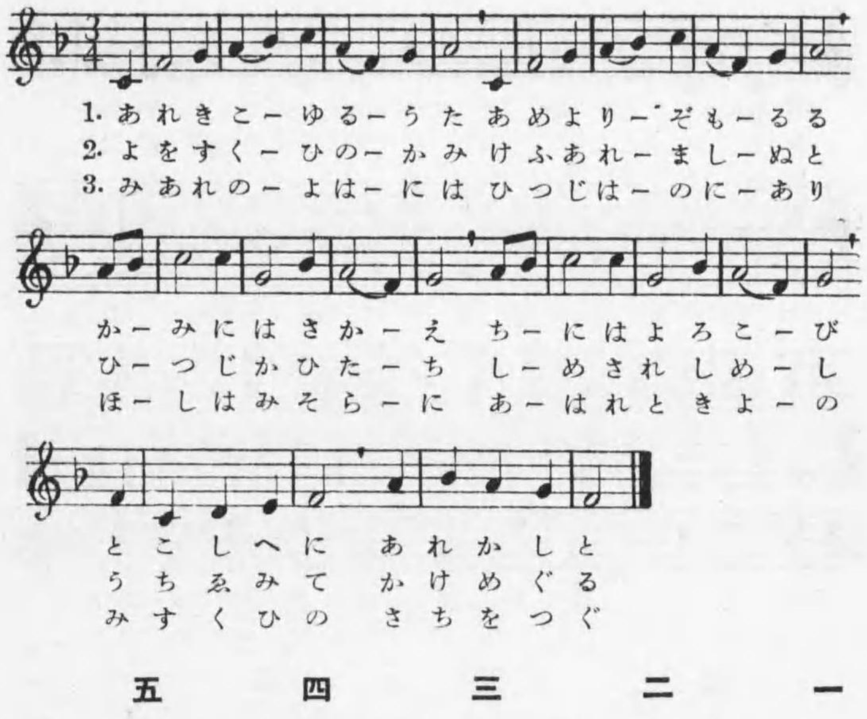
あめには　みさかえ神にあれ
地にみめぐみ　よき人にあれ
平和こそいま　宣らせましけめ
みつかひのうたふ

二

かしこし　神の獨り子なる
主はうまれぬ　御座をすてて
人となりしぞ　友よことほげ
いざやもろともに

三

世のひと　歌ひ奉れ永久に
憂きは去りて　よろこび來ぬと
眠ります御子　拜みまつれよ
まぶねに在はせば



一

あれ聞こゆる歌　天よりぞもるる
かみにはさかえ　地にはよろこび
とこしへに　あれかしと

二

世をすくひの神　けふ生ましぬと
ひつじかひたち　示されしめし
うち笑みて　かけめぐる

三

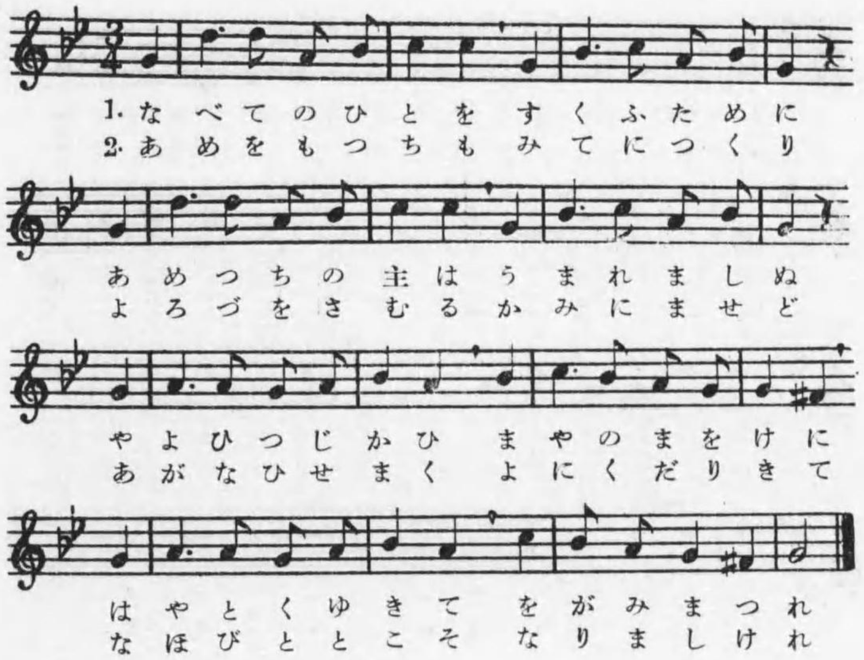
降誕の夜半には　羊は野にあり
ほしはみそらに　あはれ時世の
みすくひの　さちを告ぐ

四

み生のありしは　この御厩なりや
見よ見よ御母　御子ともに在す
いざ入りて　ふしをがまん

五

あやに畏こし　御子の稜威ほめ
ぬかつくわらべ　なみだや落つる
きよくこそ　さきくこそ



一

なべてのひとをすくふために
あめつちの主はうまれましぬ
やよひつじかひまやの馬槽に
はやとく行きてをがみまつれ

二

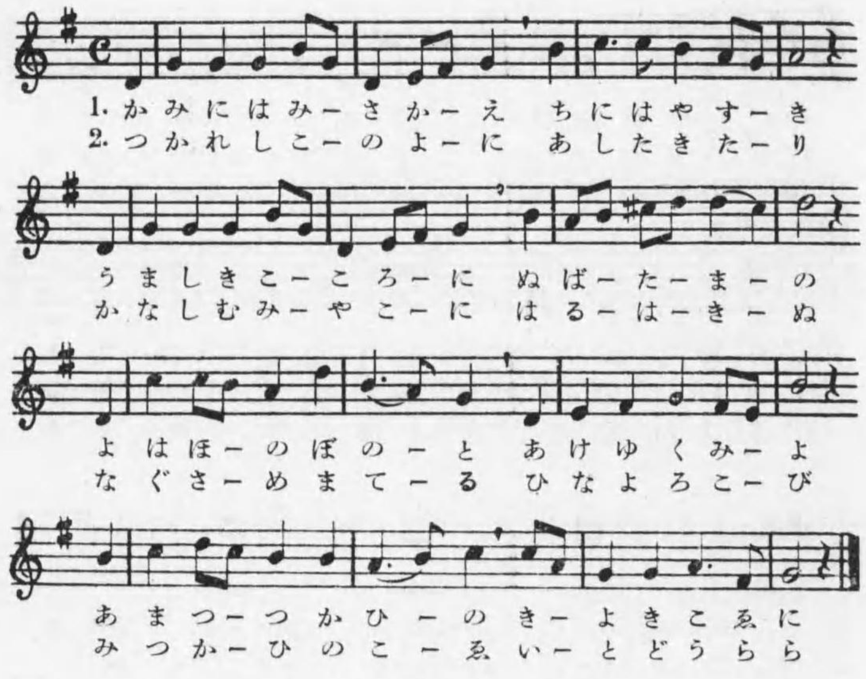
あめをもつちもみ手につくり
よろづ治むるかみに在せど
あがなひ爲まく世に降り來て
直人とこそなりましけれ

三

世のたからをばひたにしたふ
こころなきひとゆきて見ずや
いぶせき馬屋に神すみたまふ
こがねしろがねひかりぞなき

四

しづがふせ屋もたまのうてな
父にならへる子にしあらば
憂さも辛苦さもものの數かは
みあとしたひてゆくぞうれし



一

神にはみさかえ地にはやすき
美しきこころに夜はほのぼのと
あまつつかひのぬばたまの明けゆく見よ
きよきこゑに

二

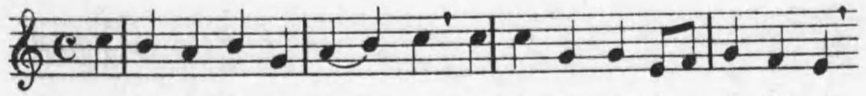
疲れしこの世にあした來たり
かなしむ都にはるは來ぬ
なぐさめ待てる鄙よろこび
みつかひのこゑいとどうらら

三

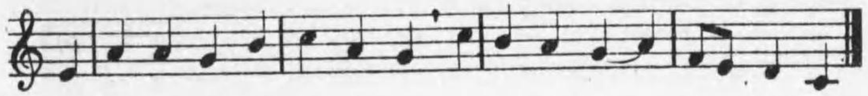
いざ世の惱みにつかれし子等
行きぞなやむ海またあらず
見るがうれしさちある日を
こころゆくまでたのしめよや

四

みつかひの歌ふ平和きたり
代々の聖人らの待ちし主は
いまのぞみしぞうちつどひて
老いも若きもいざやうたへ



1. やみにすむひーとよろこびのーくにの
2. しかげゆくひーといのちのしーみづの
3. ただしきとあーいもたらしたーまへる



あけゆくみそらにはなてよーまーなこ
わきいづるみずやむすびてーのーめよ
すくひのみここそとはのきーみーなれ

一

やみに棲むひと　よろこびの國の
明けゆくみ空に　放てよまなこ

二

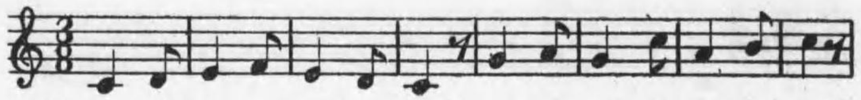
死蔭ゆくひと　いのちの清水の
湧出づる見ずや　掬びてのめよ

三

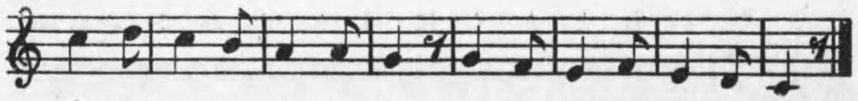
ただしきとあい　もたらし給へる
救ひの御子こそ　とはの王なれ

四

かみにはさかえ　人にはめぐみと
聲もたからかに　うたふを聞けや
愛しけやし御子　たのしき國をば
石づゑしかたく　まもりたまひね



1. すくひのみこは　けふあれましぬ
2. まぶねはちさく　うまやはせまし
3 あまつみくにの　さかえすてぞ



わがよのつみの　あがなひのため
わらをまくらの　しとねやさむき
しづがふせやに　あまくだりたる

一

すくひの御子は　今日あれましぬ
わが世のつみの　あがなひのため

二

まぶねは小さく　うまやはせまし
わらをまくらの　しとねやさむき

三

あまつみくにの　さかえ棄ててぞ
しづが伏屋に　あまくだりたる

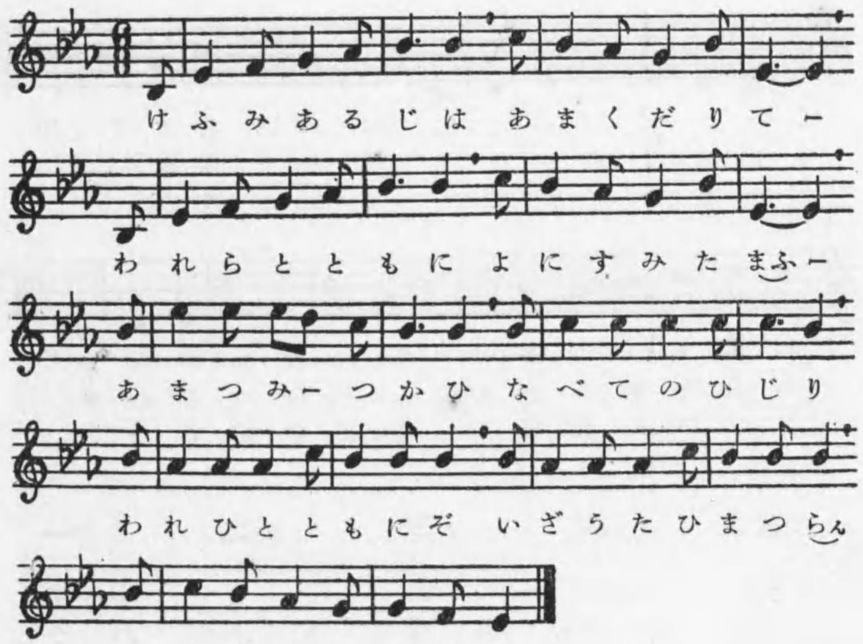
四

すさめるこころ　このとのに來て
まづしきとみに　まなこ見はるか

五

小百合にまがふ　みどり子のはだ
しづのあらぎぬ　おほひかねつも

33 御降誕



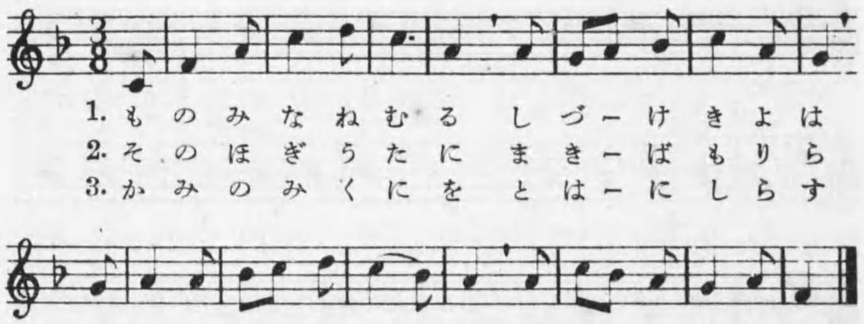
一
けふみあるじは あまくだりて
われらとともに 世にすみたまふ
あまつみつかひ なべてのひじり
我人ともにぞ いざ歌ひ奉らん
この嬉しき日を

二
夜べ生れませる 御子をみれば
あまつみかみの きよきまな子
眉目うるはしく 世の憂き知らに
うまいいと安ら みめいと匂ひて
傷なき小ひつじ

三
あああみどりごよ くらき世には
禍福みだれ なやみおほし
もろびとかわき あへぎあへぎて
求め乞ひにたり なが愛のいづみ
とこしへの國に

四
あはれ目覺めば
おどろいばら
つみなき君に
せまり來らし
いとほしの御子
わがつみゆるし
事へまつるべき
道しめしませや
その尊ときみち

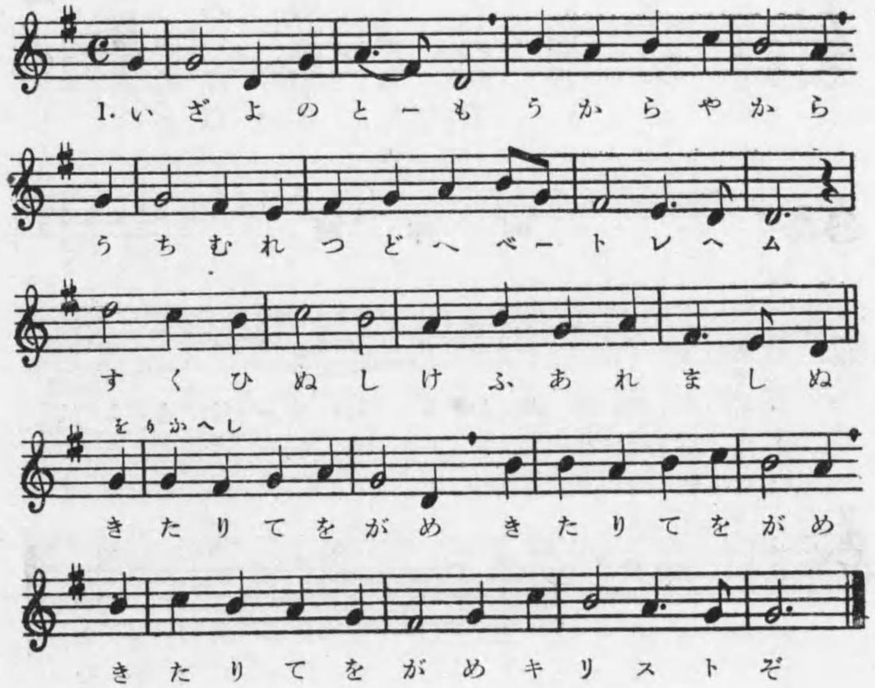
34 御降誕



一
ものみな眠る
しづけき夜半
神のまな子ぞ
世に生れます

二
そのほぎ歌に
まきばもり等
こころ躍りつ
行きてをがむ

三
かみの御國を
とはに統治す
御子なり我も
齋きまつらん

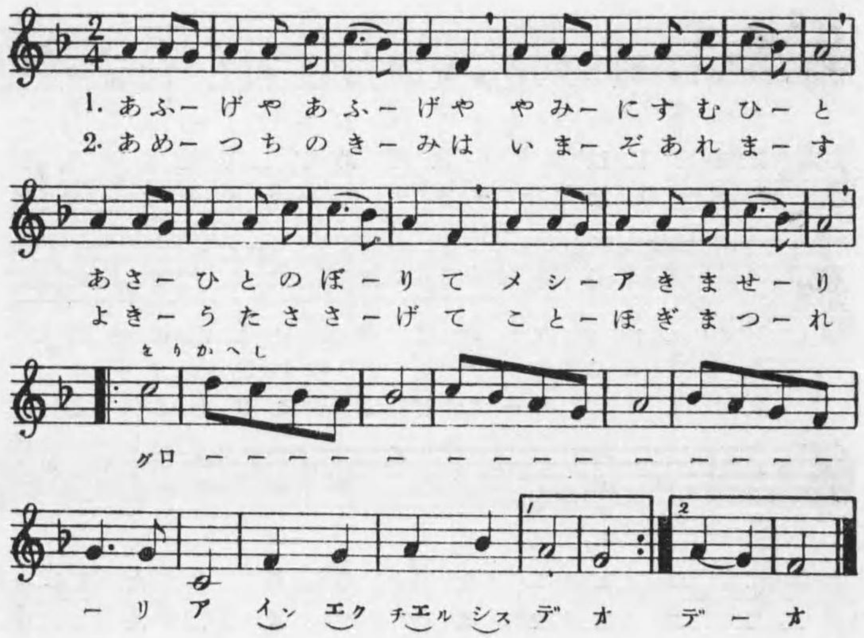


一 いざ世のとも 親族 家族
打ちむれ集へ ベトレヘム
すくひぬし けふ生ましぬ
(をりかへし)
來りてをがめ 來りてをがめ
きたりて拜め キリストぞ

二 待ちにし主ぞ いそぎ來たれ
御馬屋の馬槽 初のとこ
ひととなり 神ぞ來ませる

三 日の御子いで 夜は明けゆき
死かげの闇は あともなし
ひかりより いでし光りを

四 世の惡しきは しりへに退き
愛のみかみぞ すべしらす
かがやきの 國こそ建てれ



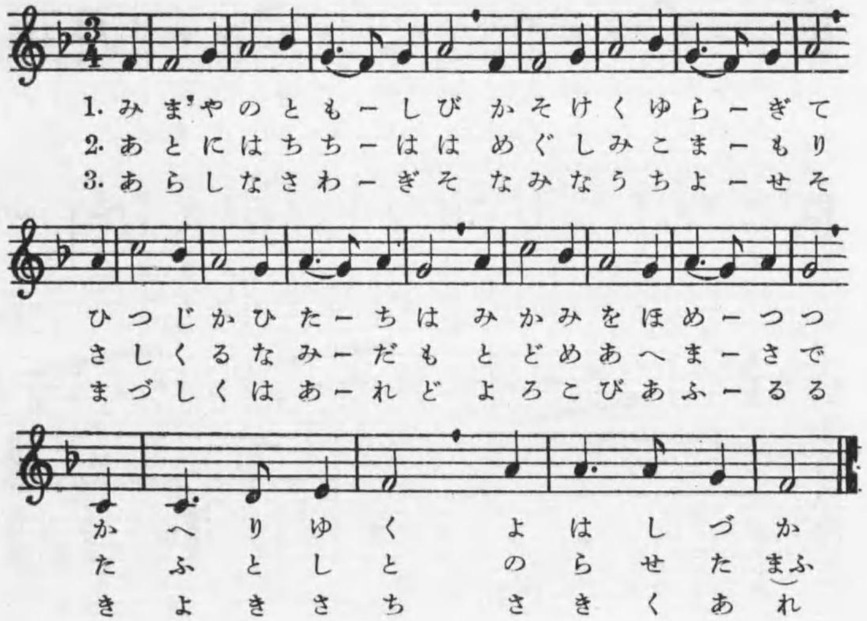
一 あふげや仰げや やみに住むひと
朝日とのぼりて メシア來ませり
(をりかへし)
グロリア イン エクチエルシス デオ
(復唱)

二 あめつちの王は いまぞ生れます
よき歌ささげて ことほぎまつれ

三 とこしへの生命 ほろびの子等に
與へてその身は 死ぬるみかみぞ

四 處女にやどりて いやしきすがた
いとひまさぬ君 あいぞたふとき

五 みちかひ違はず すくひはなりぬ
天地よこぞり よろこびあげよ



一

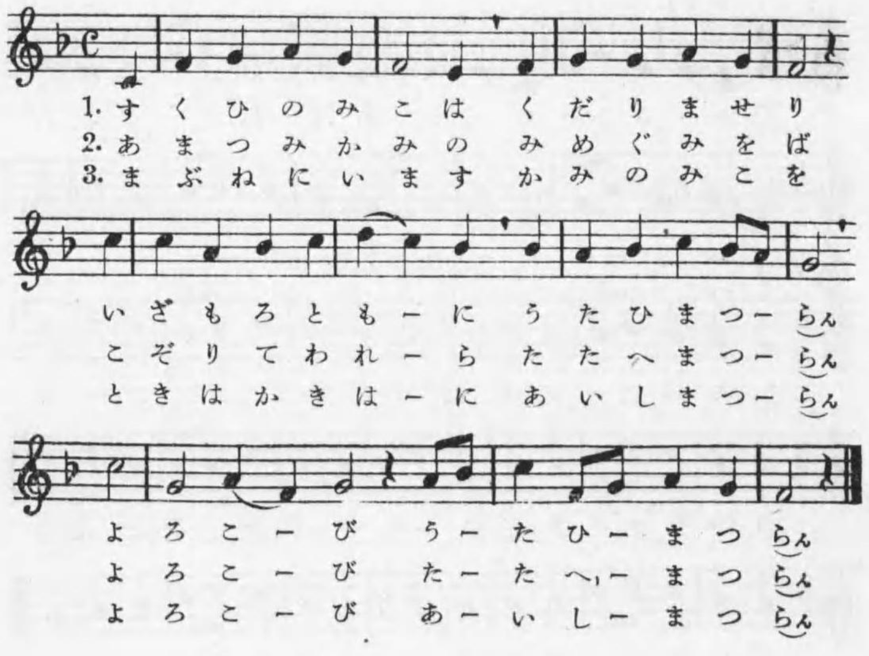
みまやの燈火 幽けくゆらぎて
羊飼ひたちは み神をほめつつ
かへりゆく 夜はしづか

二

あとには父母 愛ぐし御子守り
さしくる涙も 止めあへまさで
「たふとし」と 宣らせたまふ

三

嵐なさわぎそ 波なうちよせそ
貧くはあれど よろこび溢るる
きよきさち さきくあれ



一

救ひの御子は くだりませり
いざもろ共に 歌ひまつらん
よろこび うたひ奉らん

二

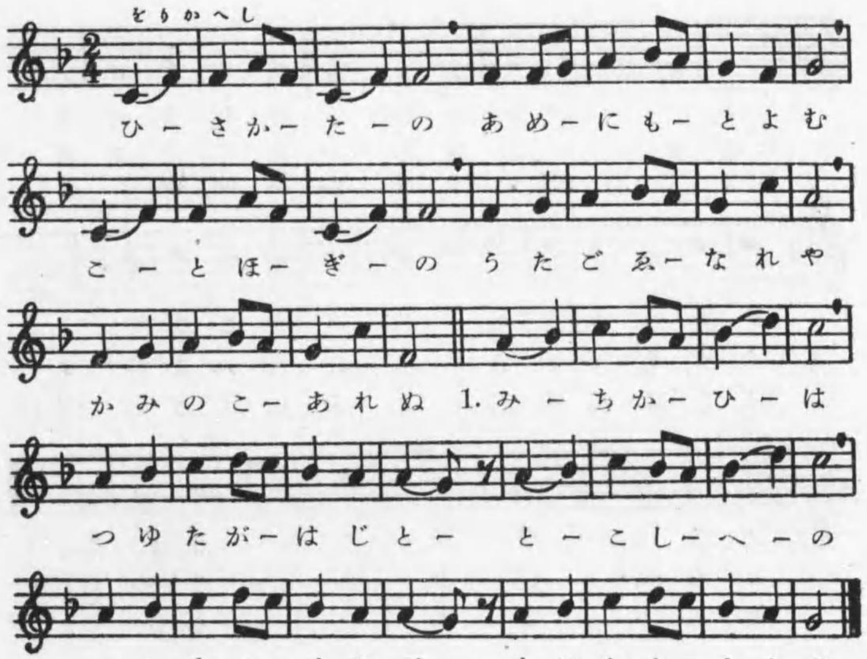
あまつみ神の みめぐみをば
擧りてわれら 讃へまつらん
よろこび たたへ奉らん

三

馬槽にいます かみの御子を
ときは堅磐に 愛しまつらん
よろこび あいし奉らん

四

尊とき御子の みまへに伏し
わが身わが靈 献げまつらん
よろこび ささげ奉らん

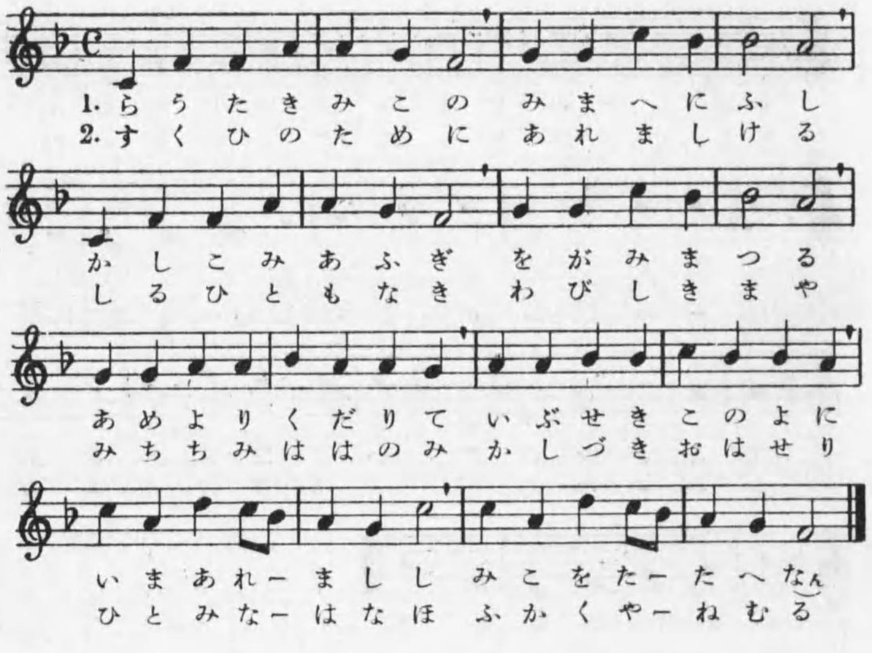


（をりかへし）
ひさかたの
あめにも響む　ことほぎの
うた聲なれや　神の子生れぬ

一
みちかひは
露たがはじと　とこしへの
平和の王ぞ　國立たしたる

二
つみの子は
悔のなみだの　たきつせに
生くる術なみ　み赦し乞へる

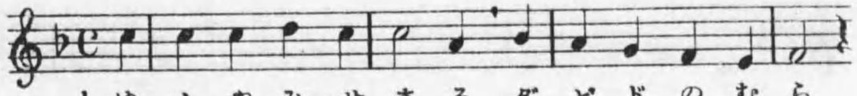
三
おほぎみは
賤の馬屋ぬち　なほなほに
あいの御國の　愛をしめしつ



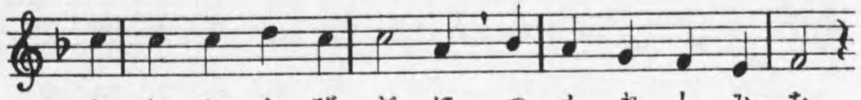
一
らうたき御子の　みまへに伏し
かしこみあふぎ　をがみまつる
天よりくだりて　いぶせき此世に
いま生れましし　御子を稱へなん

二
すくひのために　生れましける
知るひともなき　わびしきまや
み父み母のみ　侍づきおはせり
人みなはなほ　ふかくやねむる

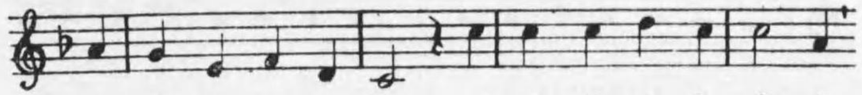
三
愛しきみどり兒　生れましぬと
あめのみつかひ　よろこび告ぐ
みよ羊牧ひら　御子をや拜める
いざもろびとよ　ゆきて禮まへ



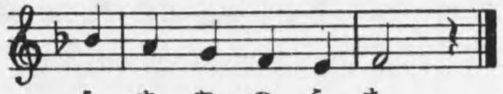
1. ゆふやみせまるダビドのむら
2. ともしびきえてさとびといね



なれぬたびぢにつかれしみを
たまのひかりはさしいできぬ



をとめマリア いこはせたまふ
かみのみこぞ マリアはえある



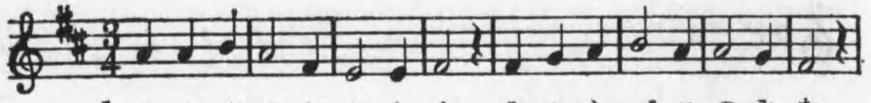
らまやのうち
はなたりたまふ

一 ゆふやみせまるダビドのむら
なれぬたびぢにつかれし身を
をとめマリア
いこはせたまふうまやのうち

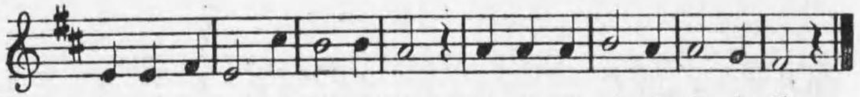
二 ともしび消えてさとびと寢ね
靈のひかりはさし出で來ぬ
かみの御子ぞ
マリア榮ある母たりたまふ

三 ほしかげ冴えてふけゆく夜半
そらより告ぐるそのよろこび
すくひぬしぞ
ひつじかひ等はをがみまつる

四 いざやもろびとうたひまつれ
くすしき御子よ美し母よ
たへなるわざ
語りつたへなんとこしなへに



1. あふぐもたふとし みこイエズスのみな
2. うたへどつきせぬ こほしきそのみな
3. わするるときなく よもひもおもひて



いづこにあるべき きみにまさるなは
うたへどうたへど あかぬことばかも
わがむねをどるよ かみのみなれば

一 あふぐもたふとし　み子イエズスの御名
いづこにあるべき　きみにまさる名は

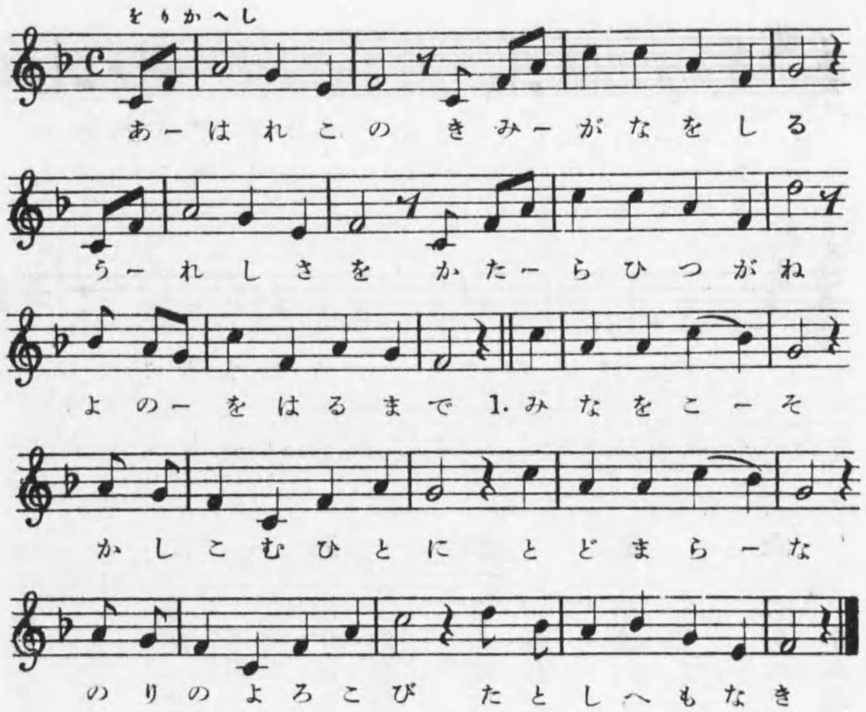
二 うたへどつきせぬ　戀ほしきその御名
うたへどうたへど　あかぬ「言」かも

三 わするるときなく　夜も日もおもひて
わがむねをどるよ　かみの御名なれば

四 その名はいく千代　へりくだるひとの
むねよりむねより　ひびかひ響かふ

五 かばかりたふとき　イエズスの御名をば
すくひのちからと　われら仰ぎゆかん

六 ちちみこみたまの　三つのくらゐなる
かみの御名にこそ　世々みさかえあれ



（をりかへし）
あはれこの
君が名を知る
語らひつがね

一
御名をこそ
かしこむ人に
教のよろこび

二
みことばを
愛づる心に
あまるみ恵み

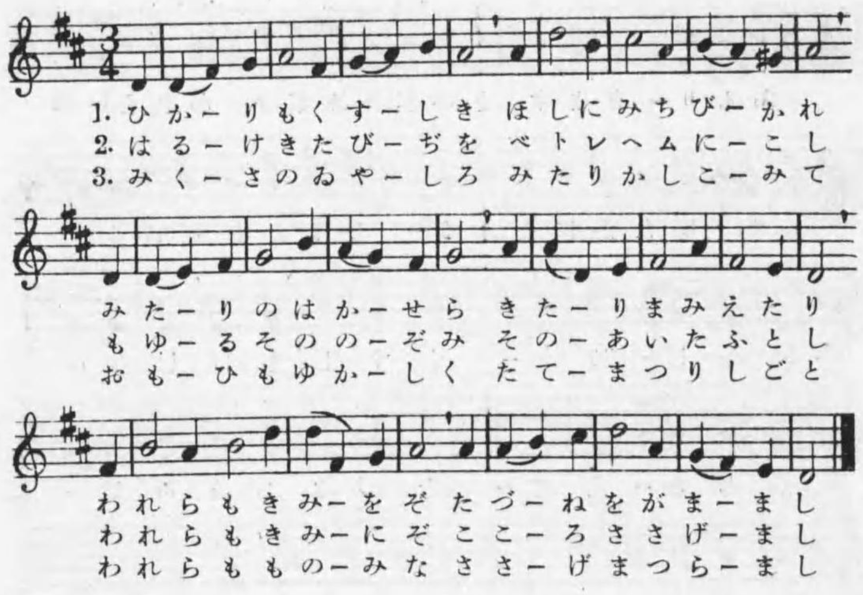
三
ちりひぢの
身は賤しけれ
燃ゆる心に

うれしさを
世の終るまで

とどまらな
例しへもなき

なみだしぬ
包みあへねば

きみを思ひ
歌のながるる

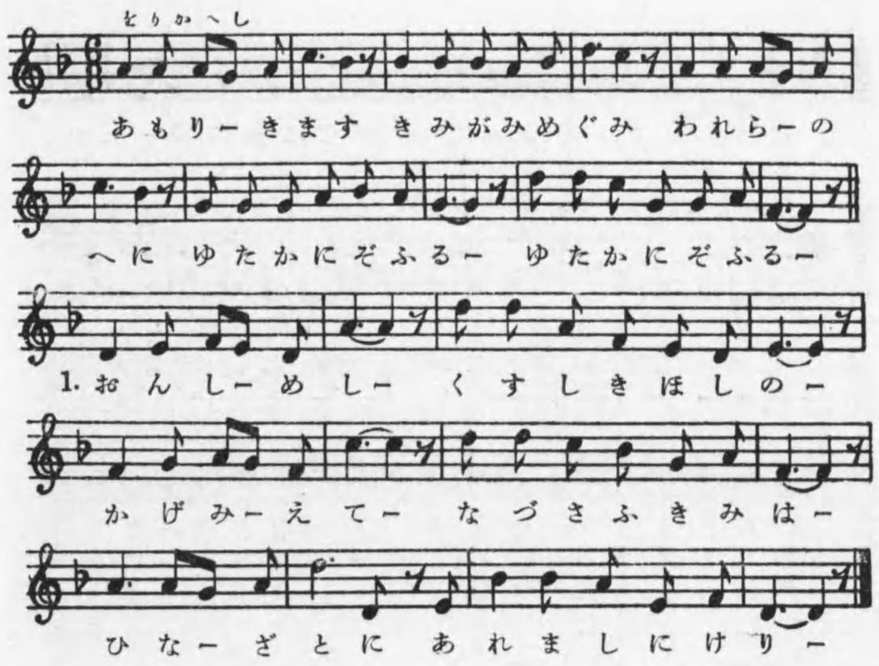


一
光りもくすしき　ほしにみちびかれ
みたりの博士ら　來たりまみえたり
われらも君をぞ　たづねをがまましし

二
はるけき旅路を　ベトレヘムに來し
燃ゆるその望み　その愛たふとし
われらも君にぞ　こころささげまし

三
三種のゐやしろ　三人かしこみて
思ひもゆかしく　たてまつりしごと
われらも物みな　ささげまつらまし

四
暗き世のたびぢ　い行くわれらこそ
のぞみの光りを　斷えせずぞ見まし
かみの正道に　かがやくそのほし



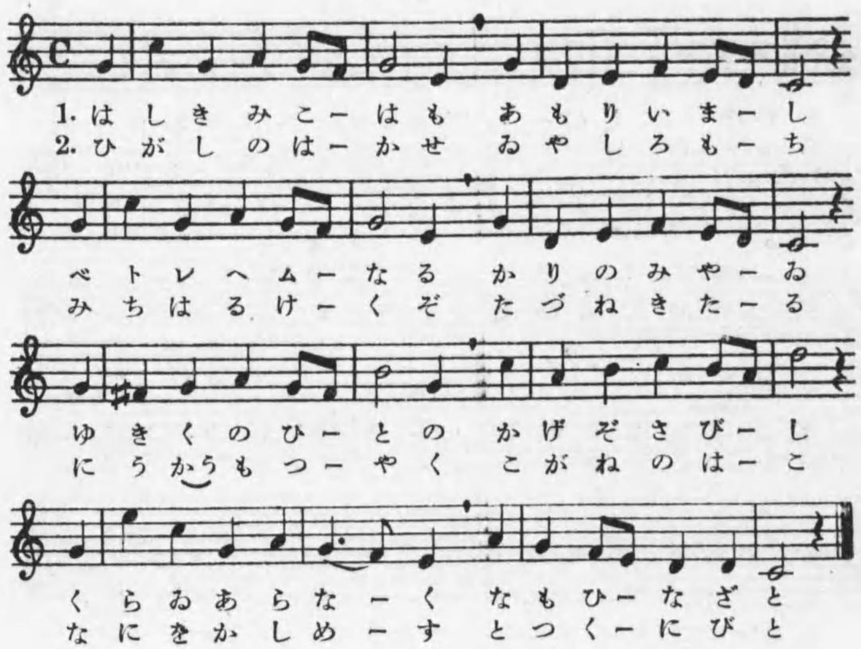
（をりかへし）
あもり來ます　われらの上に
君がみめぐみ　ゆたかにぞふる
豊かにぞ降る

一
おんしめし　くすしきほしの
かげ見えて　なづさふきみは
ひなざとに　生れましにけり

二
博士らは　名をなつかしみ
あづまより　ほしをしるべに
はろばろと　みやこにぞ來し

三
ヘロデらは　なに狂ほしく
みどり兒の　いのちやもとむ
ひと知れず　教師等を呼びて

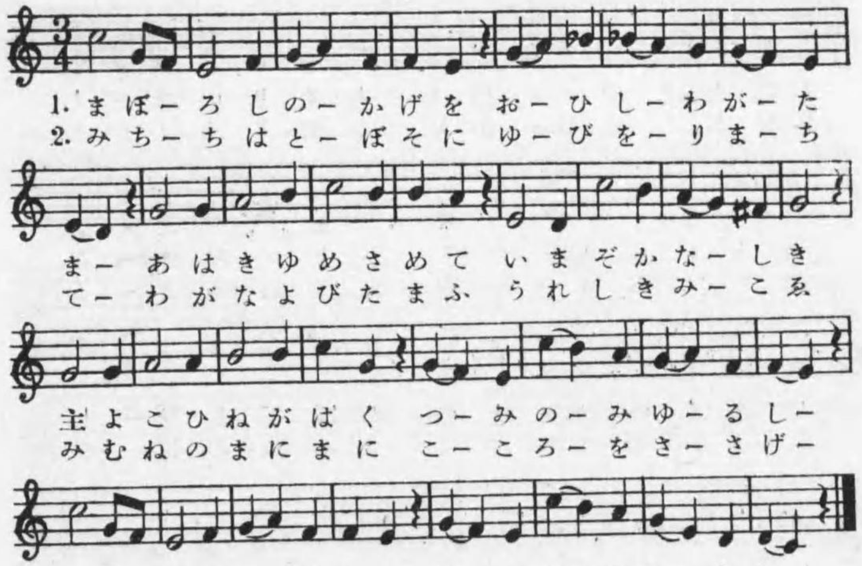
四
ゆかりある　三つの禮物
みどり兒に　かしこみささぐ
いちはやに　知らぬ國人



一
愛しき御子はも　あもりいまし
ベトレヘムなる　假りの宮居
行き來のひとの　かげぞさびし
くらゐ有ら無く　名もひなざと

二
ひがしのはかせ　ゐやしろ持ち
みちはるけくぞ　たづねきたる
乳香もつやく　こがねのはこ
なにをかしめす　とつくにびと

三
やすみししきみ　さかえ棄てて
憂きちりひぢの　世のなやみを
嘗むるもつやく　あいの乳香
こがねのかむり　とこよの王



一

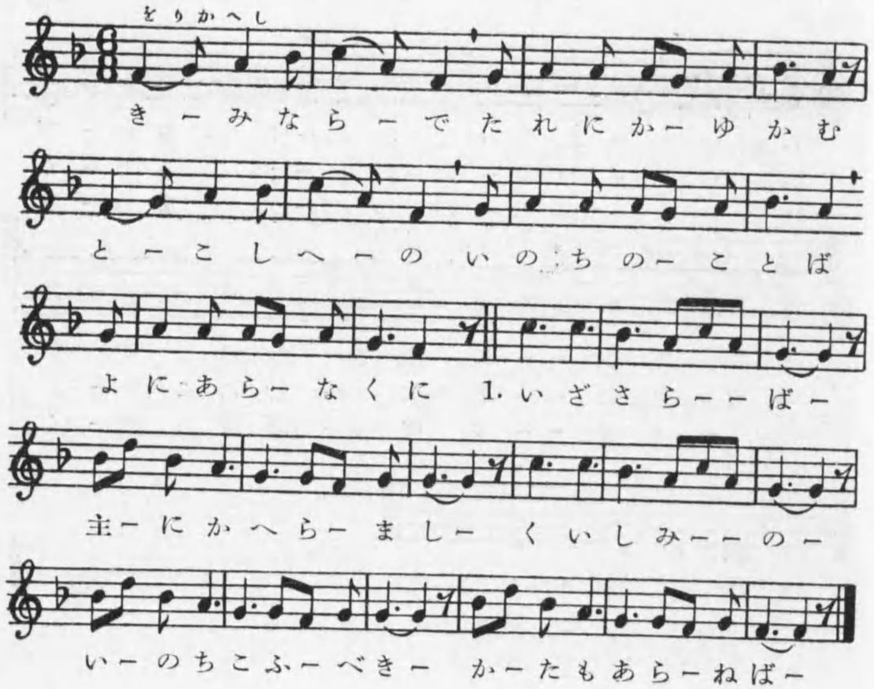
まぼろしの影を　追ひしわがたま
淡きゆめさめて　いまぞかなしき
主よこひ願はく　つみのみゆるし
いざ歸り行かな　あいのふるさと

二

みちちは扉に　ゆび折りまちて
わが名呼び給ふ　うれしきみこゑ
み旨のまにまに　こころをささげ
いざや從はなん　きよきみことば

三

悔ゆるわが胸に　十字架をしるし
偲ぶみかむりの　いばら染めたる
血潮のいづみに　いのち汲まましし
みめぐみの光り　受くるうれしさ



（をりかへし）
きみならで
誰にかゆかむ　とこしへの
いのちの言葉　世にあらなくに

一

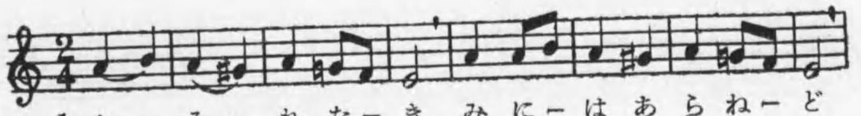
いざさらば
主に歸らまし　悔いし身の
命乞ふべき　方もあらねば

二

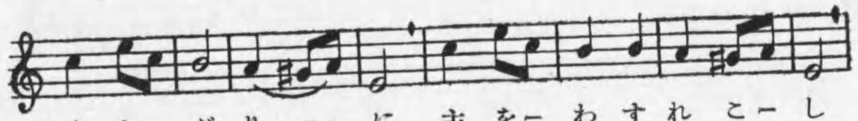
憂しと見し
日も有けるを　たまゆらの
悟りなりしか　またまどひぬし

三

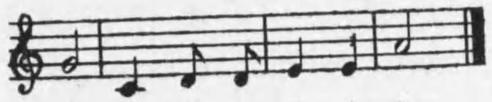
かさねては
又悔いなむと　泣きにつつ
罪ををかしぬ　またさらにして



1. おーそーれなーき　みにーはあらねーど
2. いーくーたびーか　主にーかへらまーく
3. うーたーがひーの　のべーのくまわーを



たかーぶりーーに　主をーわすれこーし
にごーりえーーの　よどーむこころーし
たもーとほーーり　けふーははれゆーく



われにありしよ
いますすみゆく
くもゐへのたび

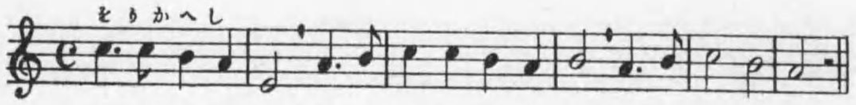
一　おそれなき　身にはあらねど　主をわすれ來し　たかぶりに　我にありしよ

二　いくたびか　主に歸らまく　澱むこころし　濁り江の　いま進みゆく

三　うたがひの　野邊の隈曲を　今日は晴れゆく　徘徊り　雲井へのたび

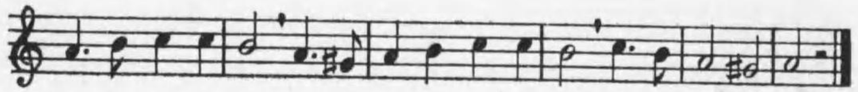
四　との曇る　こころは晴れぬ　かくてぞいまは　身は生きぬ　生命な惜しみ

五　つみの海　わたる世の子等　しづまぬ岩に　浮きしづみ　救ひ得ささね



をりかへし

まなかひに　みまつるときの　ちかければ



1. 主よきたり　けがれしわれを　きよめませ
2. よこしまの　むくいにめぐる　よみのくに
3. こころをば　そなへせさせよ　ひかりのこ
4. みさばきに　ゐをしくたたむ　こころせむ

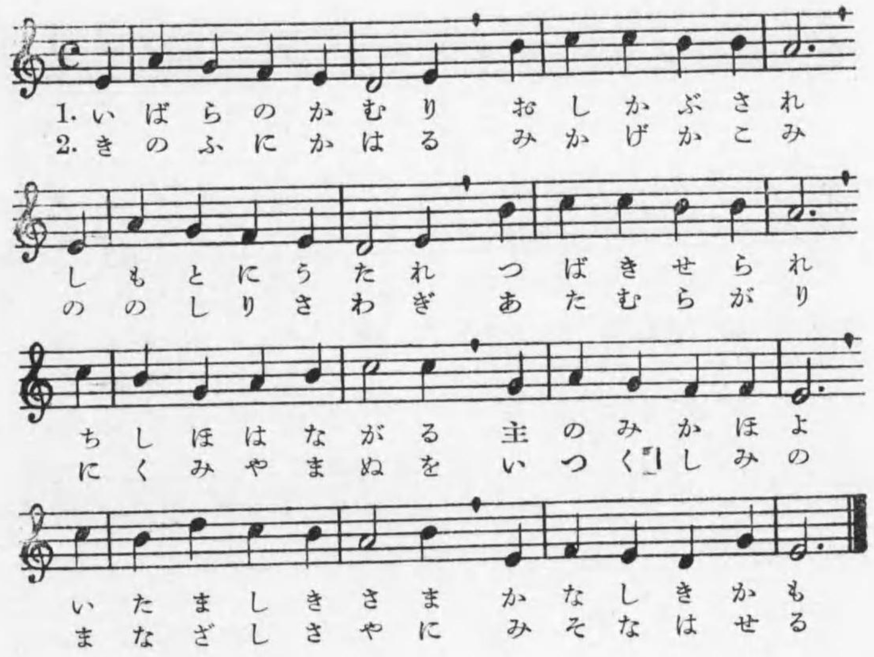
（をりかへし）

一　主よ來たり　けがれしわれを　きよめませ

二　よこしまの　むくいにめぐる　陰府のくに

三　こころをば　そなへせさせよ　ひかりの子

四　みさばきに　雄々しく立たむ　こころせむ

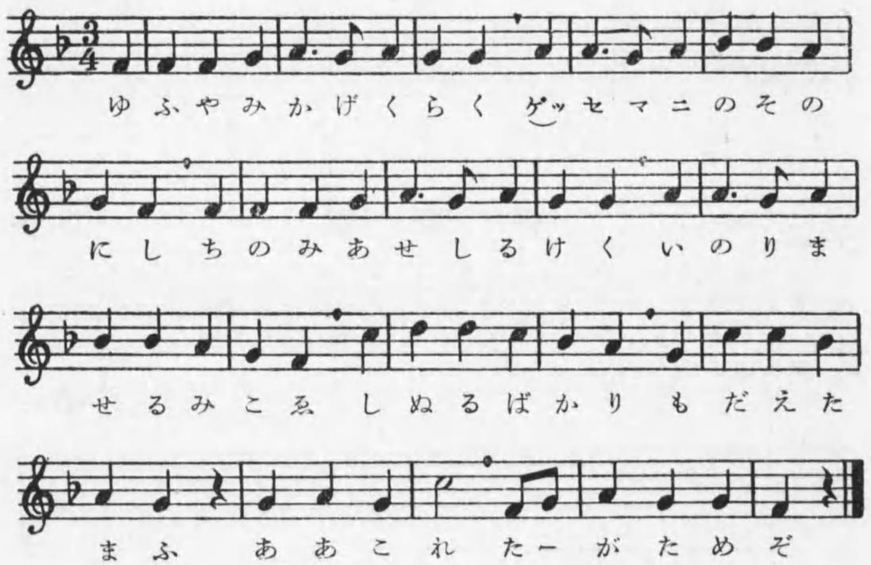


一 いばらのかむり おしかぶされ
しもとに打たれ つばきせられ
ちしほはながる 主のみかほよ
いたましきさま かなしきかも

二 昨日にかはる 御影かこみ
ののしりさわぎ 仇むらがり
にくみ止まぬを いつくしみの
まなざしさやに 見そなはせる

三 主のみくるしみ 誰がためぞも
よみに墮つべき 罪し負へる
世のひとびとの すくひのため
示させたまふ みむねにこそ

四 わが身わがたま ささげまつり
いかでめぐみに むくいでやは
身に十字架を ひたに負ひて
御名かぐはしみ み跡行かなん



一 夕闇かげくらく ゲッセマニの園にし
血のみ汗著けく 祈りませる御こゑ
死ぬるばかり もだえたまふ
ああこれ たがためぞ

二 看よ御衣は剝れ いやしき人の手に
繩目も嚴しくぞ 鞭打たれたまへる
みはだやぶれ ちしほながる
ああこれ たがためぞ

三 笞數をはれば いばらの冠させ
嘲りつ笑ひつ み顔につばきして
あなかしまし ののしるこゑ
ああこれ たがためぞ

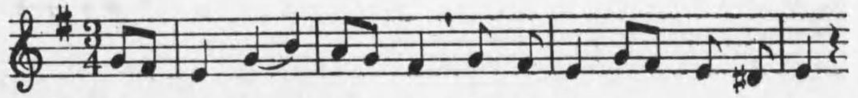
四 十字架負まして カルワリオの山路
喘ぎのぼり給ふ 行きの進むにつれ
ちからよわみ たふれたまふ
ああこれ たがためぞ

(次頁に續く)

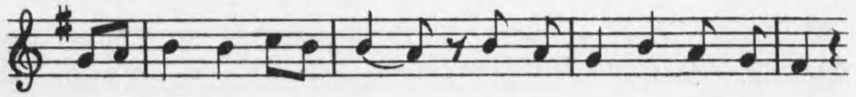
五

十字架の上にて
釘うたれ給へど
仇の罪ゆるして
父に祈りませり
みよ槍の穂
みわきぞ刺す
みなこれ
我がためぞ

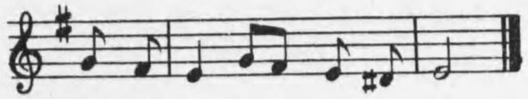
御苦難 53



1. う ー け ま ー し ー し しもとの ー いたみ



お ー も ひ つ ー つ ー なみだのあめの



ま な く ふ ー り く る

一
うけましし
しもとの痛み
なみだの雨の

二
世のひとの
咎にかはりて
み苦しみなり

三
カルワリオ
岡にのぼりて
釘うたれます

四
つみの子は
君がいさをに
たのしき國の

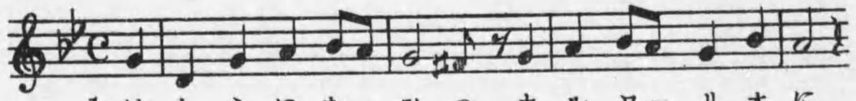
おもひつつ
間なく降來る

とりましし
われ忘れめや

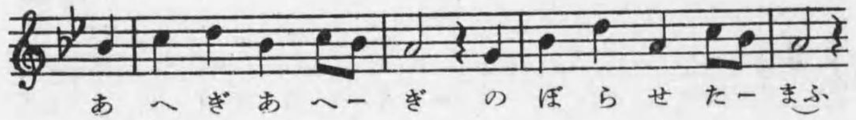
みはしらに
すくひ主はも

たのみ來て
とはの幸得よ

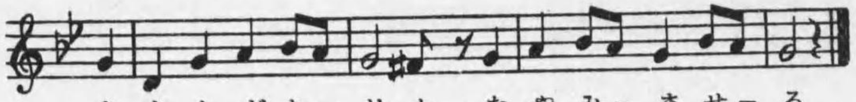
御苦難 54



1. は し ら に な ー ひ つ カ ル ワ ー リ オ に
2. ま だ は る あ ー さ く ニ サ ン ー の つ き
3. み か ほ は あ ー け に ち り や ー ま み る



あ へ ぎ あ へ ー ぎ の ぼ ら せ た ー ま ふ
や ま ぢ な や ー み た ふ れ ま し ー し
あ せ つ は ぶ ー き い ば ら の き ー ず



あ あ た が た ー め か な や み ー ま せ ー る
い た ま し き ー さ ま か し こ ー き か ー も

一
はしらになひつ
あへぎあへぎ
ああ誰がためか

二
まだ春あさく
やま路なやみ
いたましきさま

三
みかほは赤けに
あせつはぶき
らうがはしくも

四
岡上のはしら
み手みあしよ
いつつのみきず

五
主よわが身はも
かずはあれど
主とともにこそ

カルワリオに
登らせたまふ
なやみませる

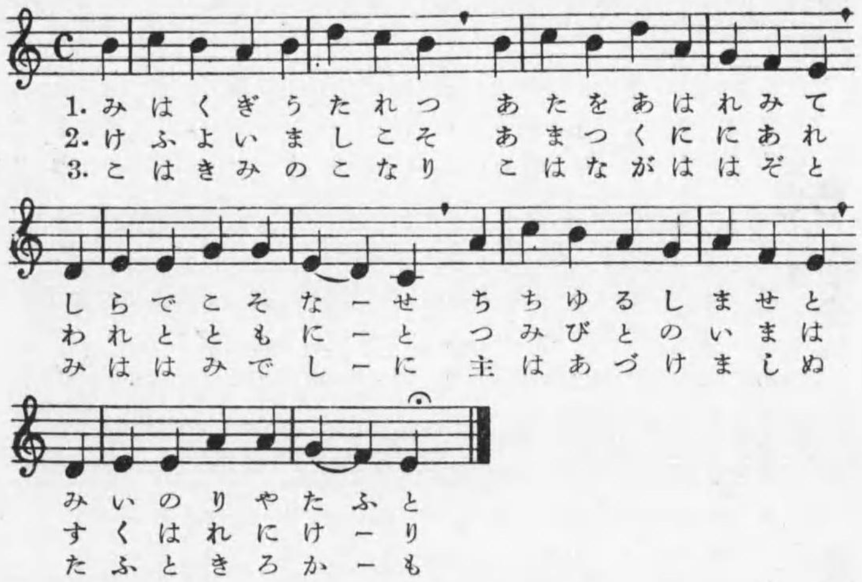
ニサンのつき
たふれまししし
かしこきかも

ちりやまみる
いばらのきず
見たてまつる

なにを語る
みわきばらよ
あいのいづみ

うき世のきず
たづき知らに
しのぎゆかめ

御苦難 55



一 身は釘うたれつ 仇をあはれみて
「知らでこそなせ 父ゆるしませ」と
み祈りやたふと

二 「今日よ汝こそ あまつくににあれ
われとともに」と つみびとの臨終
すくはれにけり

三 「こは君の子なり」 「こは汝が母ぞ」と
み母み弟子に 主はあづけましぬ
たふときろかも

四 人となりまししし 人の性もちて
「わが神などか 我をすてます」と
いたまし御こゑ

五 きみはみめぐみの いづみにしあれど
身はくるしみて たふとくも宣りぬ
「われよ渇く」と

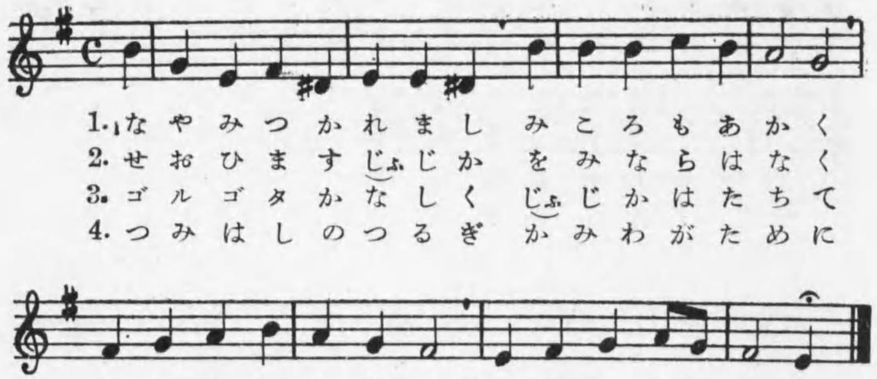
六

み誓ひことごと
その如くなりて
「事をはりぬ」と
主は宣ひけり
いまはのときに

七

「父よわが靈を
御手にぞ委ぬ」と
言おごそかに
事切れたまひし
すくひぬしはも

56 御苦難

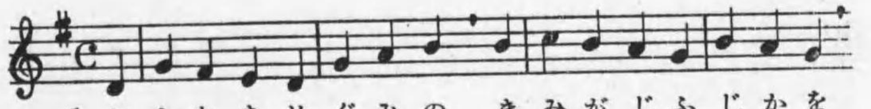


一 なやみ疲れまし
みころもあかく
血に染みたまひ
みち行くきみ

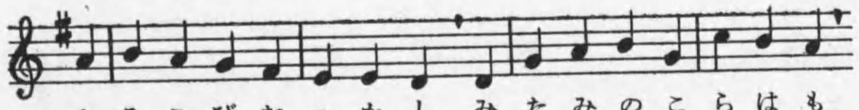
二 脊負ます十字架
婦人等は泣く
たすけまゐらす
すべを無みと

三 ゴルゴタ哀しく
十字架は立ちて
負ひまししきみ
かかりましぬ

四 罪は死のつるぎ
神わがために
ひとたび死して
いのちたまふ



1. こよなきめぐみの　きみがじふじかを
2. わきいでながるる　いのちのましみづ



よろこびおへかし　みたみのこらはも
じふじかのかげに　たえずぞくまましみたみのこらはも
たえずぞくまましみたみのこらはも

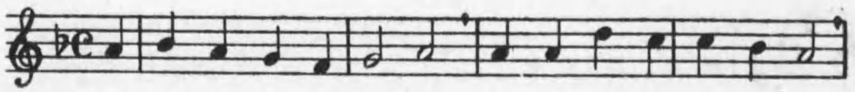
一　こよなきめぐみの　きみが十字架を
　よろこび負へかし（復唱）　み民の子等はも

二　湧き出でながるる　いのちの眞清水
　十字架のかげに（復唱）　絶ずぞ汲まましみたみのこらはも

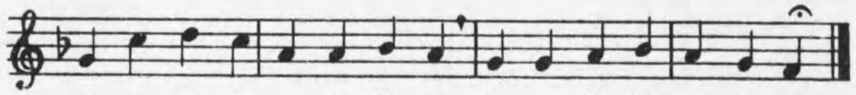
三　よろこびたのしみ　幸はふことごと
　十字架よりこそ（復唱）　醜の身に受けめ

四　とこ世とこ春の　あめなるみ園に
　しめしゆくひかり（復唱）　ただ主の十字架

五　こよなくうれしき　きみが十字架を
　よろこび擔はなん（復唱）　いまはの時まで



1. ほめよたたへよ　ちよよろづよに
2. あまつみくにを　あこがれゆけば
3. よのなみかぜは　ふきあるるとも
4. せめよるあたも　あらぶるししも



こよなきたからの　きよきじふじかを
じふじかのはしだて　きよくかがやく
じふじかのみちびく　みちぞやすけき
じふじかにをのき　とくこそにぐれ

一　頌めよたたへよ　千代よろづ代に
　こよなき寶の　きよき十字架を

二　あまつみくにを　あこがれ行けば
　十字架の橋立て　きよくかがやく

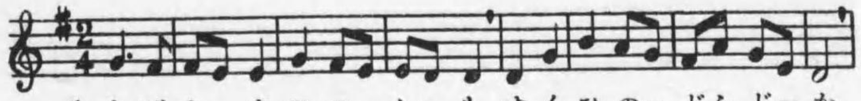
三　世のなみかぜは　吹き荒るるとも
　十字架の導びく　みちぞ安けき

四　攻めよる仇も　あらぶる獅子も
　十字架に戰慄き　疾くこそ逃ぐれ

五　あめにゆくまで　間なく暇なく
　十字架を揭なん　みちの技折に

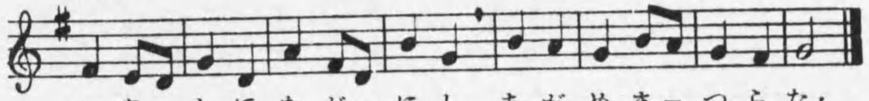
六　あまつみくにの　すくひの門を
　開くは十字架の　血に染む鍵ぞ

七　あなたふとしや　すくひの道の
　しるべも著けき　聖教の十字架



1. わ び し ー き ひ の ー と ー も す く ひ の ー じ ふ じ ー か
2. さ か え ー の み く ー ら ー の た か き か ー し ー こ ー き
3. ほ こ り ー は わ が ー み ー に ま た あ ら ー な ー く ー に

う き よ ー の な ぐ ー さ ー め　う へ な き ー ち ー か ー ら
す く ひ ー の ぬ し ー を ー ば　わ が し ろ ー と ー な ー し
じ(ふ)じ か ー ぞ ま た ー な ー き　わ が み ち ー の ー と ー も



い や ー と ほ な が ー に し　あ が め ま ー つ ら な(ん)
な れ ー を ば あ ふ ー ぎ て　な や み を ー さ り な(ん)
ひ た ー に や す が ー り て　し を の が ー れ ま し

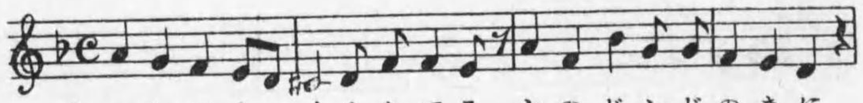
一　佗(わ)びしき日(ひ)のともすくひの十字架(じふじか)
うき世(よ)のなぐさめうへなきちから
いや永久(とほながく)にしあがめ奉(まつ)らな(ん)

二　さかえのみくらのたかきかしこき
すくひのぬしをばわが城(しろ)となし
なれをばあふぎて惱(なや)みを去(さ)りな(ん)

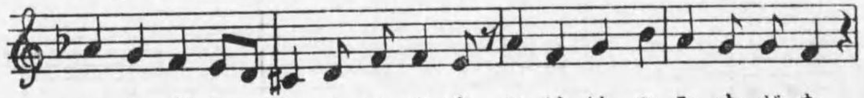
三　誇(ほこ)りは我(わ)が身(み)にまたあらなくに
十字架(じふじか)ぞまたなき わが道(みち)のとも
直(ひた)にや縋(すが)りて死(し)をのがれまし

四　あめつち崩(くつ)るつひの日(ひ)來(き)なば
主(しゅ)の手(て)によるものこころしづしづ
みくにの御殿(みとの)に進(すす)みぞ入(い)らな(ん)

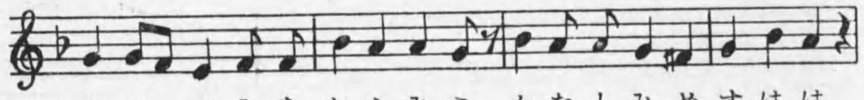
五　めでたし十字架(じふじか)ようるはしの木(き)よ
なれこそさかえぞのぞみのひかり
ひかりの子等(こら)してなれを負(お)はまし



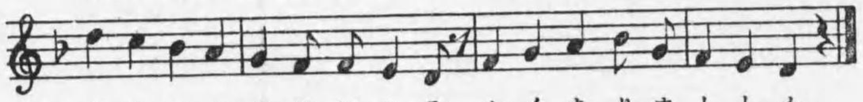
1. い た ま し ー く も た て る　主 の じ ふ じ の き に
2. あ が ひ の ー み こ こ ろ は　は は の み し り ま す



た た ず み ー む か ひ ま す　み は は の み す が た
み で し ら ー は う ち ち り　ヨ ハ ネ の み あ り き



よ の ー つ み を お ふ み こ　か な し み め す は は
主 は ー は は を み で し に　み で し を み は は に

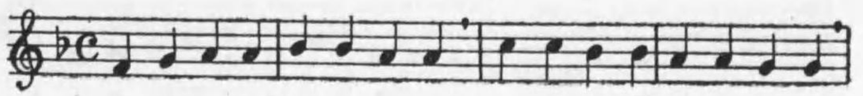


わ れ ら の た め に こ そ　か く あ り ま し し か
あ た へ つ ゆ だ ね つ つ　こ と き れ た ま ひ ぬ

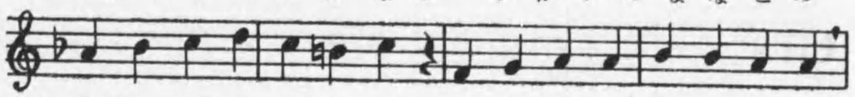
一　傷(いた)ましくも立(た)てる主(しゅ)の十字(じふじ)の木(き)に
たたずみ向(むか)ひます聖母(みはは)のみすがた
世(よ)の罪(つみ)を負(お)ふ御子(みこ)かなしみ召(め)す母(はは)
われらの爲(ため)にこそかく在(あり)ましし か

二　贖(あが)ひのみこころは母(はは)のみ知(し)ります
み弟子(でし)らは打散(うちち)りヨハネのみ在(あり)き
主(しゅ)は母(はは)をみ弟子(でし)に御弟子(みでし)をみ母(はは)に
あたへつ委(ゆだ)ねつつ事切(ことき)れたまひぬ

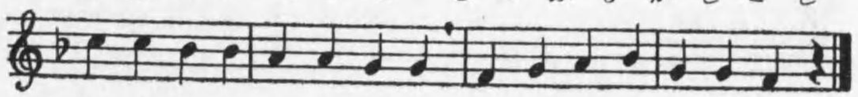
三　海(うみ)のごとくひろき母(はは)ごころもちて
神(かみ)のみめぐみをしあまねく頒(わか)ちつ
み子(こ)の賜(たま)ふいのちわれに守(まも)らひて
いまもかも勤(いそ)しき聖母(みはは)ぞたふとき



1. みこのじふじかの　みもとにたたずみ
2. うれひやいかなる　みかみのまなごの



みはなげかす　つるぎさしたりや
ははのみこころ　しのぶもかしこし



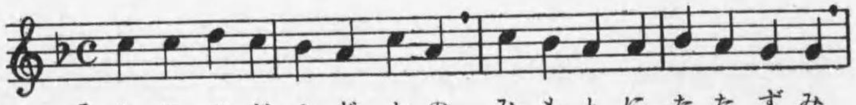
みこころのいたで　えたへでおはす
こをおもふおやの　みむねのいたみ

一　み子の十字架の　み下に佇ずみ　み母なげかす
二　剣さしたりや　み心のいたで　え堪へで在す
三　憂ひやいかなる　み神の愛子の　母のみこころ
四　偲ぶもかしこし　子を思ふ親の　みむねの痛み
五　見る眼も慘はし　偲びて誰かは　たもと濡さぬ
六　み子のみ苦しみ　歎きます母の　みすがた悲し
七　例しへもあらぬ　十字架の惱み　母は見ませり
八　いとも傷ましき　いまはのみ姿　母は見ませり
　みいのち終りて　み母は悲しみ　あめつち暗し
　聖母よわれにも　主を思ふ心を　足らはせ給へ
　かくもわが爲に　主こそ苦みを　うけ給ひしか
　愛のいた手なる　五つのみ傷よ　われに印させ

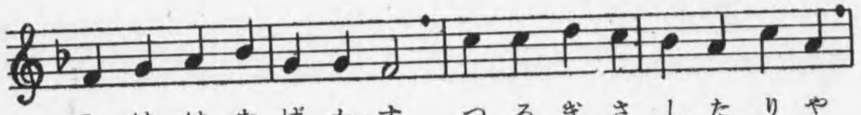
七
世にある限りは
み母とともにぞ
御子を偲ばなん
十字架のもとに
ひれふして我や
歎かひあらなん

八
み母よわれはも
みそばに侍りて
いのりや爲まし
いでや勇み立ち
世と戰ひつつ
みあとしたはな

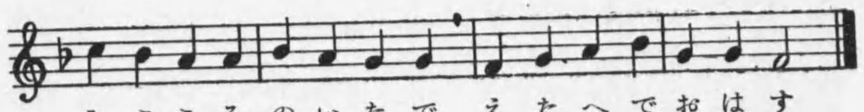
61A　悲しみの聖母



1. みこのじふじかの　みもとにたたずみ
2. うれひやいかなる　みかみのまなごの
3. みるとめしもいたはしぬて　しのびてかはたなれかやしみ
4. たとへもあらぬ　じふじかはかなるのはみみ
5. みいのちをはり　みはは

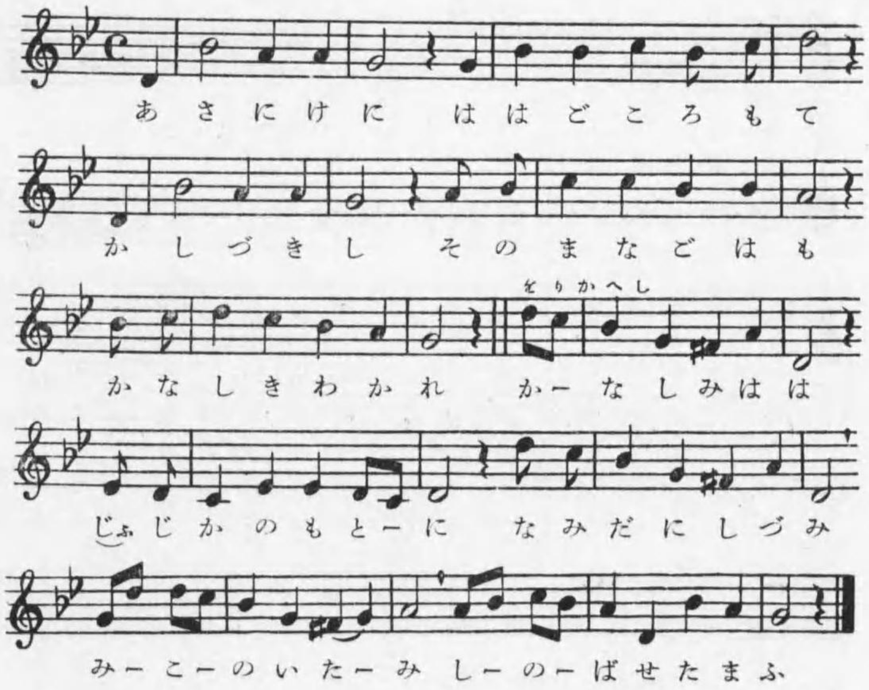


やしみきも　すろぬりし
りこしに　かこさせら
たしるまれ　げこらまく
しかくたわ　なみぬみち
さもみいよ　はのとはつ
きぶのもは　はもはめ
るのことは　みはたはあ
つしみいみ



すみしりへ　でのたを
はたなせま　たやはがろ
おいかまた　いおはすこ
でのたみせ　のふすみこ
へねがはは　ろもまのふ
たむすはら　こおきはも
えみみはた　こをげまを
みこない主

（歌詞は前頁の61番と同じ）

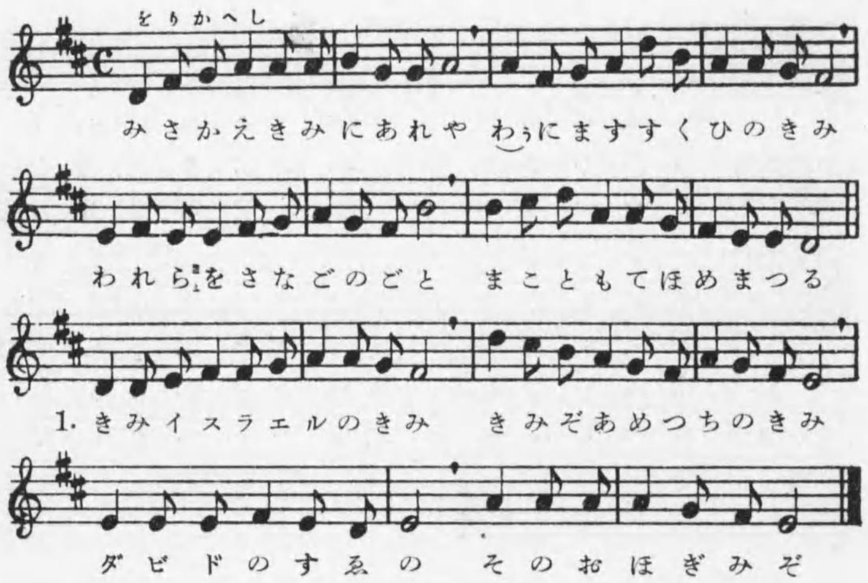


一　あさにけに　かしづきし
母ごころもて　その愛子はも　かなしき別れ

（をりかへし）
かなし御母　なみだに沈み
十字架の下に　偲ばせたまふ
御子のいたみ

二　世のひとの　いばらなる
救ひのために　母の泣きます
かむりは痛し

三　世のつみを　いたましく
負ひし小羊　さす劍はも
み母のむねに



（をりかへし）
み榮え君にあれや　王にます救ひの君
われら幼兒のごと　誠もて讃めまつる

一　君イスラエルの君　君ぞあめつちの君
ダビドのすゑの　その大君ぞ

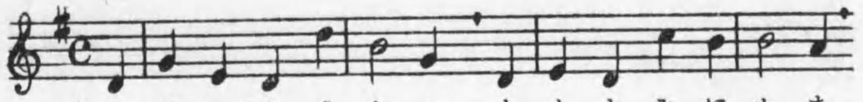
二　ユデア人棕櫚執て　ホザンナ〳〵と
きみをむかへて　祝ぎまつりにし

三　尊とき天の集ひの　王たる君の祝ぎ歌
地にもひびかへ　ともにうたはなん

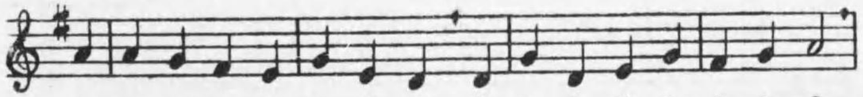
四　惱みの待てる君を　斯くこそ國民はも
主とむかへしか　たまゆらにしも

五　さあれ天地のきみ　人稱へであるべき
石さへいまは　もだしあへぬを

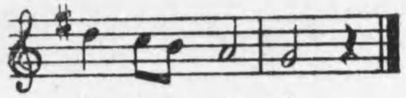
六　量り知らぬ愛の主　いと高き神の子は
あめつちの主と　いまぞ來ませる



1. いはへやうたへ　しとよみにかち
2. みつかひたちと　ともにうたはなん
3. やよマグダレナ　なぞやなきます



よみがへりし主の　たふときみさかえ
よみがへりし主の　めでたきかちうた
よろこびうたへよ　主よみがへりしぞ



アレールヤ
アレールヤ
アレールヤ
アレールヤ

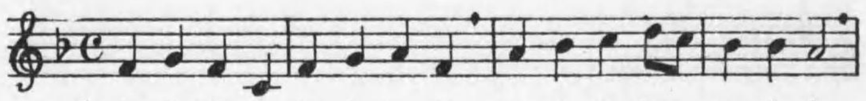
一　いはへやうたへ　死と陰府に勝ち
　　甦がへりし主の　たふとき御榮え
　　アレルヤ

二　みつかひたちと　ともに歌はなん
　　甦がへりし主の　めでたき凱歌
　　アレルヤ

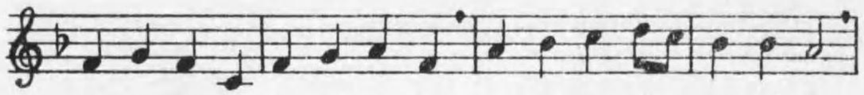
三　やよマグダレナ　なぞや泣きます
　　よろこび歌へよ　主甦がへりしぞ
　　アレルヤ

四　すくひの偉業を　成し遂げまして
　　墓を出でまして　主を讃め稱へよ
　　アレルヤ

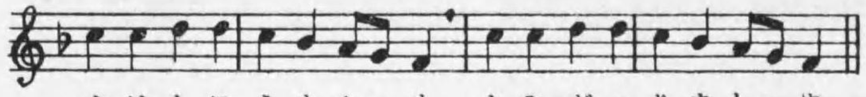
五　よろこびうたへ　主のごとわれら
　　また甦がへりて　天にこそ往かめ
　　アレルヤ



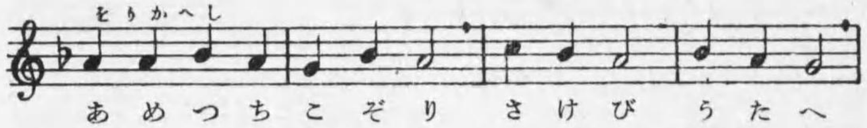
1. しろたへのきぬに　こころさーやけく



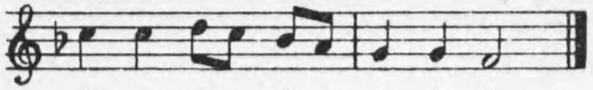
しゅろのはかざして　よろこびーをどれ



主はしにうちかーち　よみがへりましーぬ



あめつちこぞり　さけび　うたへ



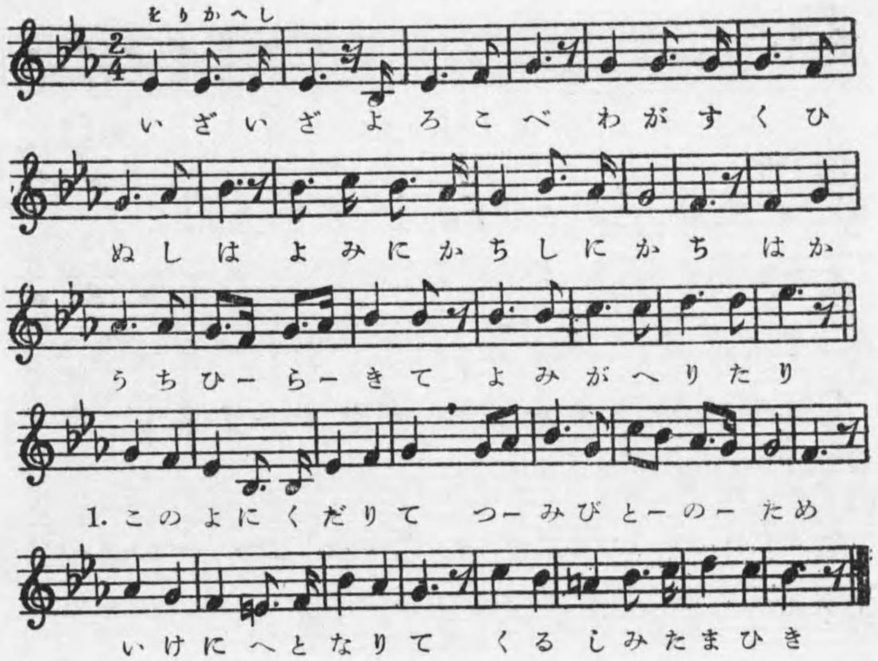
主のみーさーかえを

一　しろたへの衣に　心さやけく
　　棕櫚の葉翳して　よろこび躍れ
　　主は死に打勝ち　甦へりましぬ
　　（をりかへし）
　　あめつちこぞり　さけびうたへ

二　朽ちざる生命を　世に備へんと
　　死のま悲しみを　うち消し給ひ
　　黄泉路の門をし　毀ち給ひけり
　　かく甦へりて　主の御榮えは

三　かくるる方なく　神の右へに
　　今はのぼりまし　とりなしの主

四　仰げやもろびと　み空し高く
　　かみの都をば　統知らします
　　わが大君をぞ　思ひ偲びつつ



（をりかへし）
いざいざよろこべ　わが救主は
陰府に勝ち死に勝ち　墓打開きて
よみがへりたり

一　この世に降りて　つみびとのため
犠牲となりて　苦しみたまひき

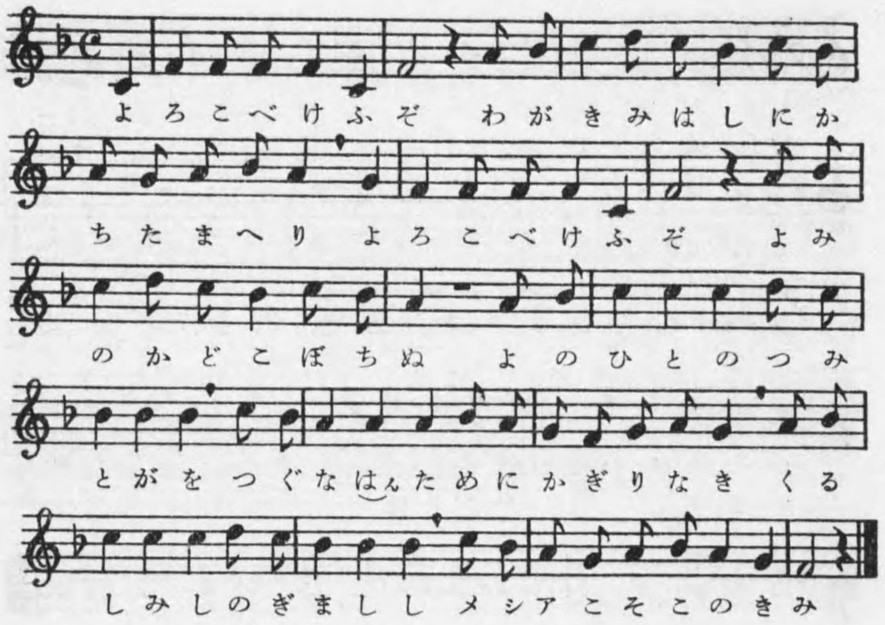
二　責め辱かしめて　つみびとのごと
鞭うちあざけり　死にさへ仕置ど

三　三日目の朝開に　日もなほ未明
正義のひかりは　躍りてぞ出でし

四　主は現はれまし　手足のきずを
み弟子に示して　「われぞ」と宣ふ

五　トマこそひと度　うたがひてしか
みきずのみ痕を　見てぞ慄きし

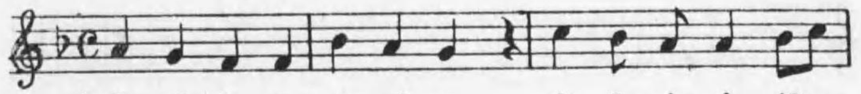
六　「我主わが神よ」　信ずるものは
永世のいのちに　勇み進み行かん



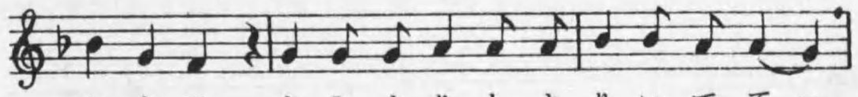
一　よろこべ今日ぞ　我君は死に勝給へり
よろこべ今日ぞ　陰府の門こぼちぬ
世の人の罪咎を　償はん爲に限りなき
苦み凌ぎまししし　救世主こそこの君

二　やよもろびとよ　聲を合せ歌ひ奉れや
やよもろびとよ　身も魂もささげて
高き賤しき總て　御旗の下に集へかし
上もなきその榮　いま汝をかこめば

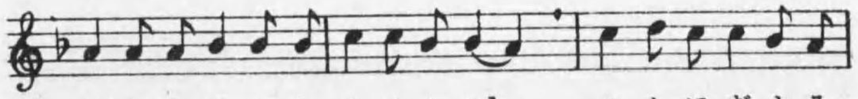
三　あめつちのきみ　我等のため命を與へ
あめつちのきみ　よみがへりたまへり
我等は等く死を　み軍に捧げまつりて
勝ち人のその冠　御手より得まほしき



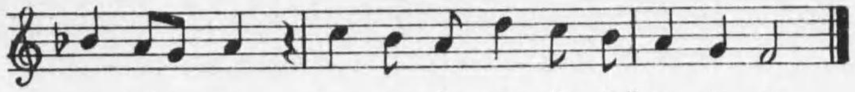
1. わがきみ イェズス よみとしにー
2. わがきみ イェズス たふときちー



かちて よみよりしよりいでてー
をもて よのつみのあがなひをー



はかうちひらきましぬー ことほぎよろ
いまやなしとげましぬー われらも主に



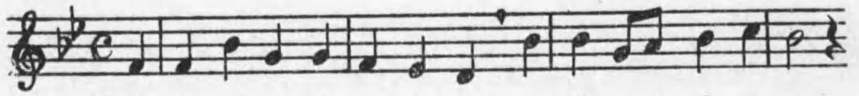
よしめまほたをかの主にしちやのでいてーびりーこよ

一

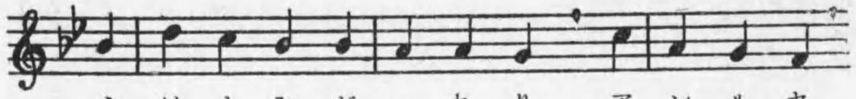
わがきみイェズス
陰府と死に勝ちて
陰府より死より出でて
墓うちひらきましぬ
ことほぎよろこびて
いのちの主をほめよ

二

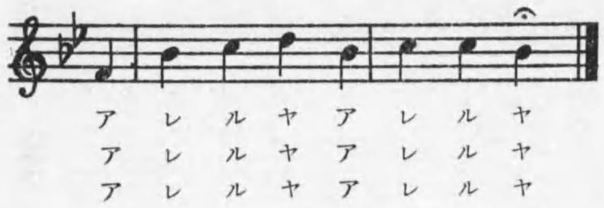
わがきみイェズス
たふとき血をもて
世の罪のあがなひを
今や成し遂げましぬ
われらも主によりて
いでや死に勝たまし



1. よろづのくにたみ いはへーうたへ
2. しのかせくだきて みはかーひらき
3. あいなるみきずは ひにもーまさり



主はよみがへれり アレルヤ
主はよみがへりぬ アレルヤ
てりいでかがやく アレルヤ



アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤアレルヤ

一

よろづのくにたみ いはへうたへ
主はよみがへれり アレルヤ
アレルヤアレルヤ

二

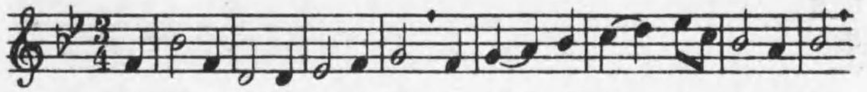
死の桎梏くだきて みはかひらき
主はよみがへりぬ アレルヤ
アレルヤアレルヤ

三

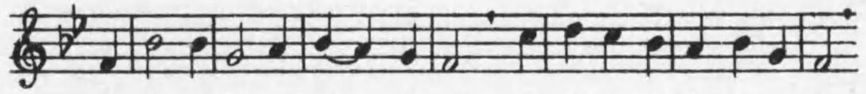
あいなるみきずは 陽にもまさり
照りいでかがやく アレルヤ
アレルヤアレルヤ

四

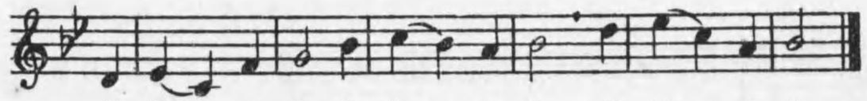
陰府にうち捷ちし われらの主に
世々みさかえあれ アレルヤ
アレルヤアレルヤ



1. よ ろ こ び た た へ よ　わ が ー す く ー ひ ー ぬ し は
2. あ め よ り く だ り て　ひ と ー み な ー の ー た め に



よ み の ち か ら ー に ぞ　う ち か ち た ま へ る
し の と を ひ ら ー き て　よ み が へ り ま し ぬ

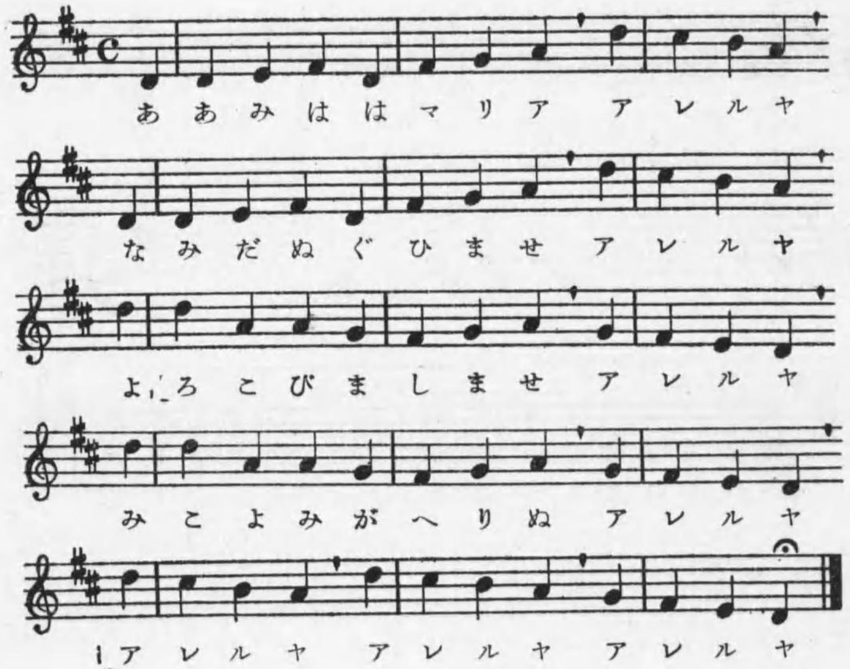


う た ー へ よ た た ー へ よ　ア レ ー ル ヤ
主 を ー ほ ぎ ま つ ー れ よ　ア レ ー ル ヤ

一　よろこびたたへよ　わがすくひぬしは
陰府のちからにぞ　うち勝ちたまへる
うたへよたたへよ　ア　レ　ル　ヤ

二　あめよりくだりて　人類みなのために
死の戸をひらきて　よみがへりましぬ
主を祝ぎまつれよ　ア　レ　ル　ヤ

三　みちかひたがはず　しののめとともに
つはものの守もる　はかを出でましぬ
あなたふときかな　ア　レ　ル　ヤ



あ あ み は は マ リ ア　ア レ ル ヤ
な み だ ぬ ぐ ひ ま せ　ア レ ル ヤ
よ ろ こ び ま し ま せ　ア レ ル ヤ
み こ よ み が へ り ぬ　ア レ ル ヤ
ア レ ル ヤ　ア レ ル ヤ　ア レ ル ヤ　ア レ ル ヤ

一　ああみははマリア　アレルヤ
なみだぬぐひませ　アレルヤ
よろこびましませ　アレルヤ
御子よみがへりぬ　アレルヤ
アレルヤアレルヤ　アレルヤ

二　憂きよかなしみよ　アレルヤ
いまはいづこぞや　アレルヤ
見よ勝ちうたこそ　アレルヤ
果つるを知らえね　アレルヤ
アレルヤアレルヤ　アレルヤ

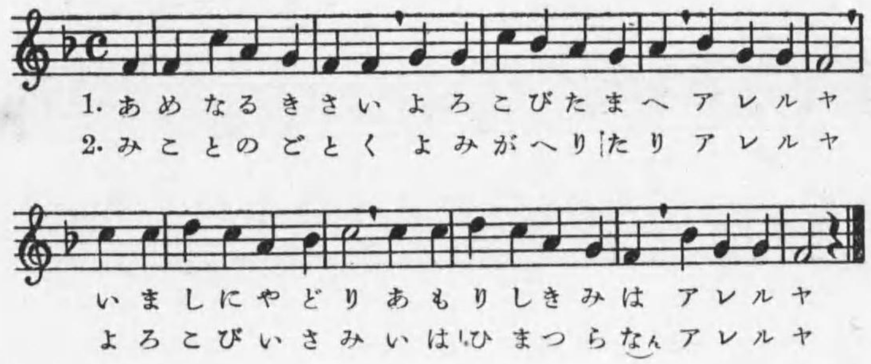
三　ああ御子イエズス　アレルヤ
死のちからくだき　アレルヤ
陰府の門やぶりて　アレルヤ
み墓よ出でます　アレルヤ
アレルヤアレルヤ　アレルヤ

（次頁に續く）

四

みははと御子にぞ
アレルヤ
ちからのかぎりに
アレルヤ
ほぎうたささげて
アレルヤ
もろびとようたへ
アレルヤ
アレルヤアレルヤ
アレルヤ

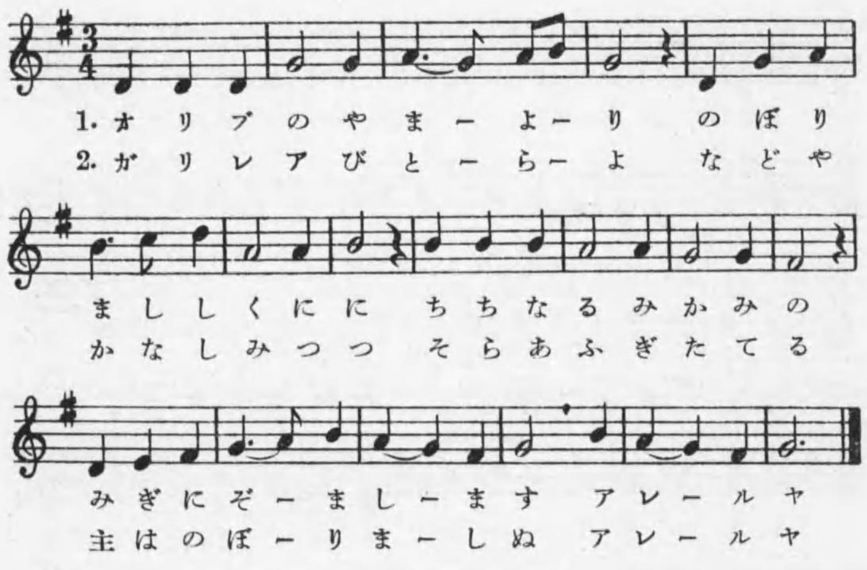
72 喜びの聖母



一 あめなるきさい
よろこびたまへ
アレルヤ
いましにやどり
あもりしきみは
アレルヤ

二 み言のごとく
よみがへりたり
アレルヤ
よろこびいさみ
祝ひまつらなん
アレルヤ

73 御昇天



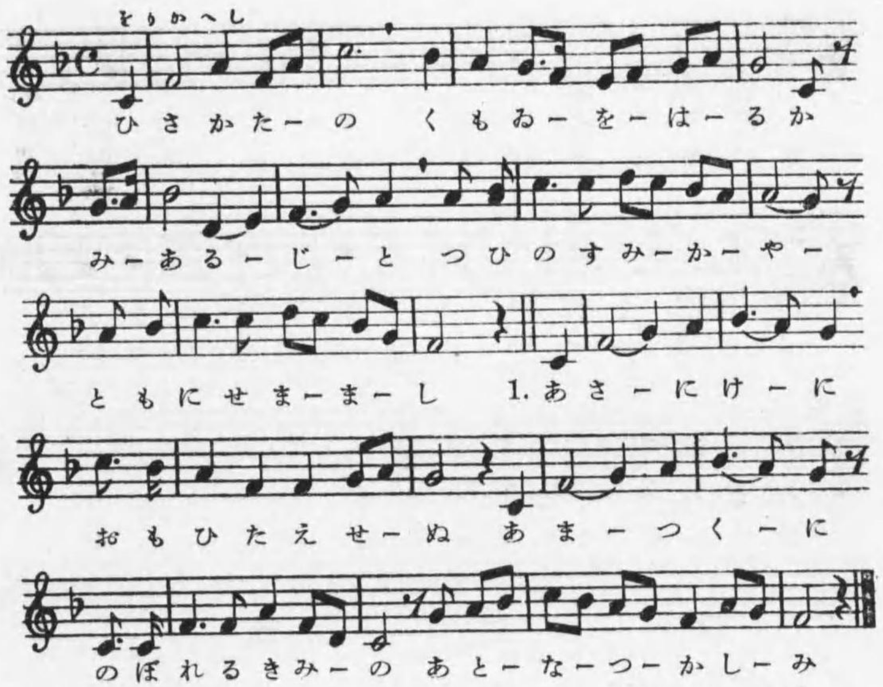
一 オリブのやまより のぼりましし國に
ちちなるみかみの みぎにぞ在します
アレルヤ

二 ガリレアびと等よ などや悲しみつつ
空あふぎ立てる 主はのぼりましぬ
アレルヤ

三 われらをはなれて あめに昇りし主は
ふたたび來ますと みつかひぞ告らす
アレルヤ

四 みむねにかなひて この憂世を經なば
われらもあめにて 主にぞ會ひ奉らん
アレルヤ

御昇天 74



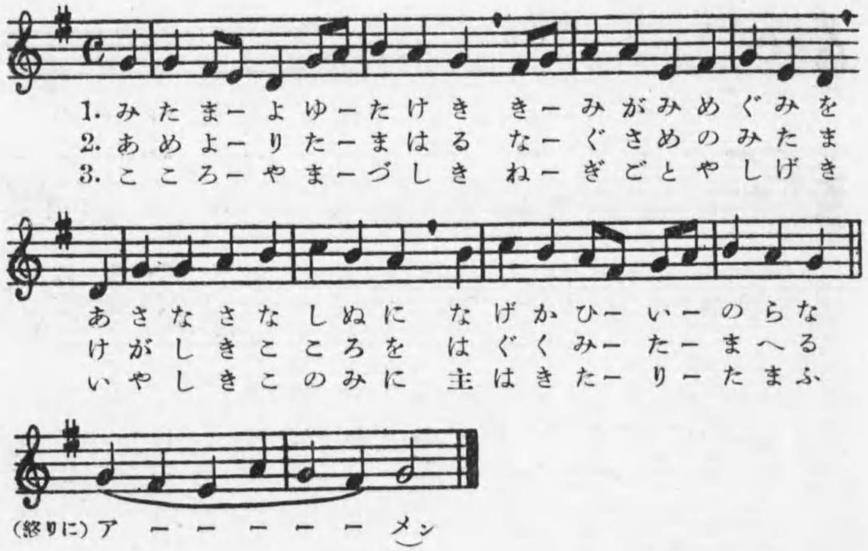
（をりかへし）
ひさかたの
雲井をはるか みあるじと
終の住み家や 共にせまし

一
あさにけに
思ひ絶えせぬ あまつくに
昇れるきみの あと懐かしみ

二
主のいます
御國戀ほしく うき世をば
過難てにする 我ならなくに

三
おやたちも
妹背友どち とことはに
變らで住まむ みくに偲ばゆ

75 聖靈



一
みたまよゆたけき きみがみめぐみを
朝な朝な繁に なげかひいのらな

二
あめよりたまはる なぐさめのみたま
けがしきこころを はぐくみたまへる

三
こころやまづしき ねぎごとや繁き
いやしきこの身に 主はきたりたまふ

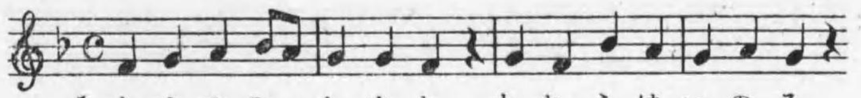
四
あめよりおりくる みめぐみのつゆぞ
日にけにしげけく 身ぞうるほひける

五
ななつのたまもの はるさめにまさり
いろも香もきよく 地に花咲かせよ

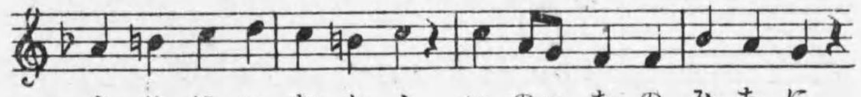
六
悪しきは暫しぞ い往けるをみれど
つよき七鬼をば ひき具しこそ來め

七
主よわがこころを たかぶりなさせそ
守らひたまへや みかどに入るまで
アメン

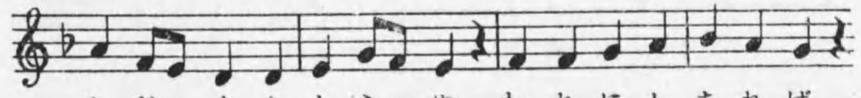
76 聖　霊



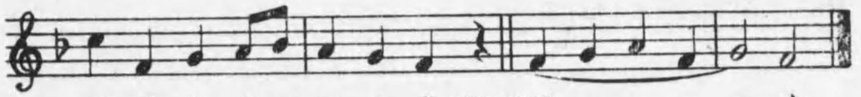
1. きませみーたまよ　われらはいのる
2. なぐさめーぬしよ　つみにけがれて



あめにいむかふ　いのーちのみちに
われあらがねの　つちーとひくけど



たどーきもしらーぬ　われにしあれば
くちーせぬたまーを　はらむちからを



てらせみーひかり（終りに）アーーーーメン
あめよりーたまへ

一　きませみたまよ　われらはいのる
あめにい向かふ　いのちのみちに
方便も知らぬ　われにしあれば
てらせみひかり

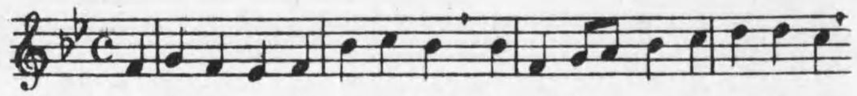
二　なぐさめぬしよ　つみにけがれて
われあらがねの　土と卑けど
朽ちせぬ珠を　はらむちからを
あめよりたまへ

三　ま夏のたびの　いこひの木かげ
かぜを涼しみ　むすぶしみづの
なぐさめのきみ　ちからたまひて
われこそはゆけ

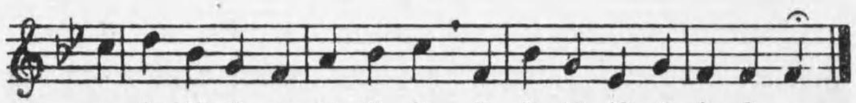
四　きみしあらずば　などわが旅の
たのしくあらめ　よきことなべて
めぐみとかはり　うつせみの世は
またなくうれし

五　きませみたまよ
きず癒やしませ
かわきはてたる
こころの畑も
めぐみのあめに
霊こそ注だて
みのりゆたけく
アメン

77 聖　霊（ヴェニ クレアトル）



1. みたまよあもりて　めぐーみのあめに
2. みたまよあもりて　かよわーきわれらを



かわけるこころを　うるほはせたまへ
たすけつつよめつ　みちびかせたまへ

一　聖霊よ天降りて　み恵みのあめに
乾けるこころを　うるほはせ給へ

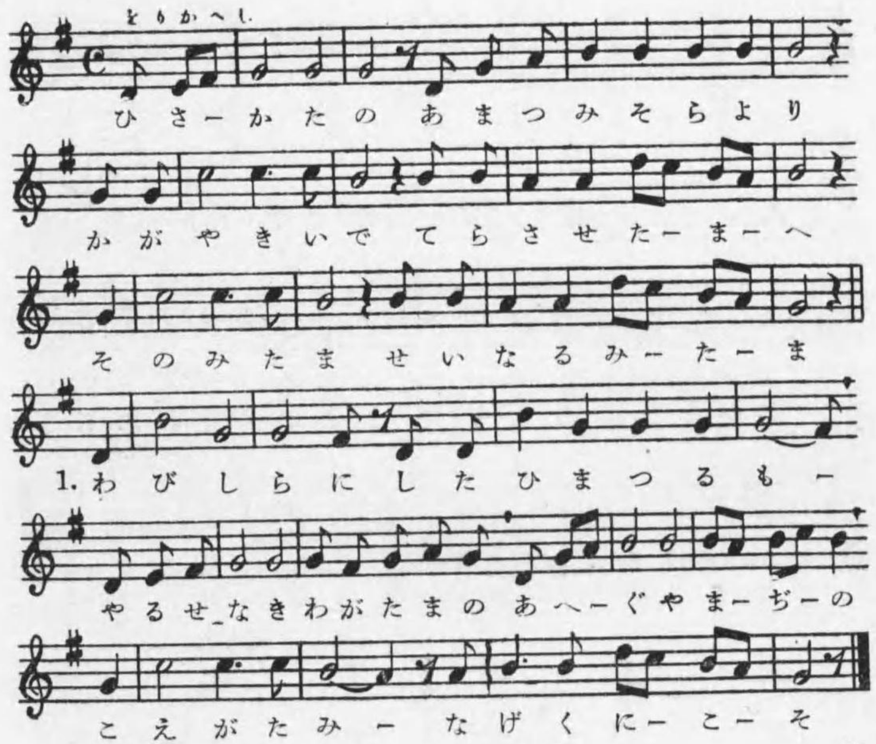
二　聖霊よあもりて　か弱きわれらを
たすけつ強めつ　みちびかせ給へ

三　聖霊よあもりて　み光りを照らし
たへなる御教を　さとらしめ給へ

四　聖霊よあもりて　厳くしきほのほ
眠れるこころに　燃えたたせ給へ

五　聖霊よあもりて　いにしへの如く
くすしき御業を　世に満たし給へ

六　父み子みたまの　位ぞ三つなる
ひとりの御神に　世々み榮えあれ

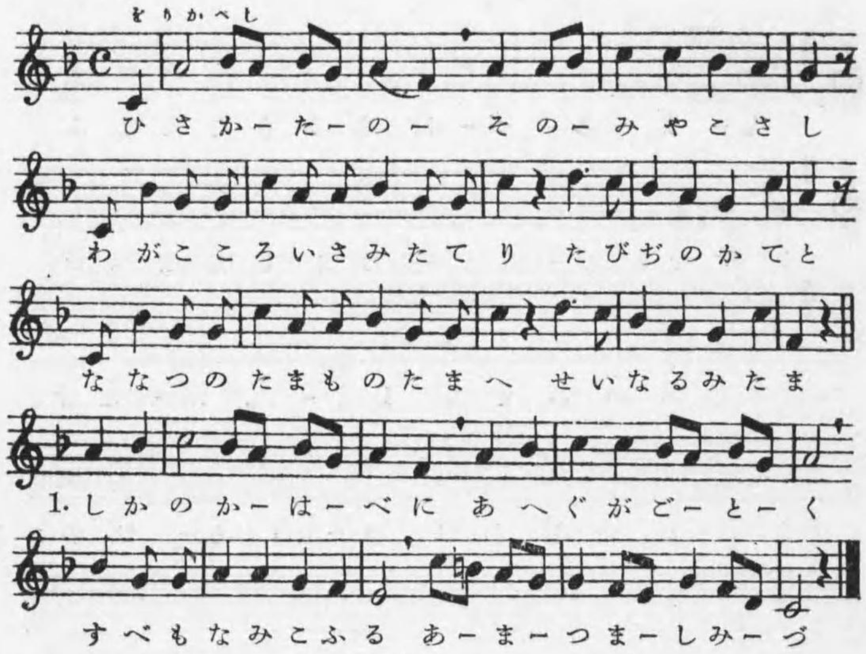


（をりかへし）
ひさかたの天つみ空より
かがやきいで照らさせ給へ
そのみたま聖なるみたま

一
わびしらに慕ひまつるも
遣瀬なき我靈のあへぐ山路の
越え難みなげくにこそ

二
みあるじの御法を技折に
辿行く我なれど禍事しげく
行きなやみみかほあふぐ

三
かにかくにみ誓ひ思へば
天地は滅ぶともわれ恐れじと
たのむかげ主にしあれば



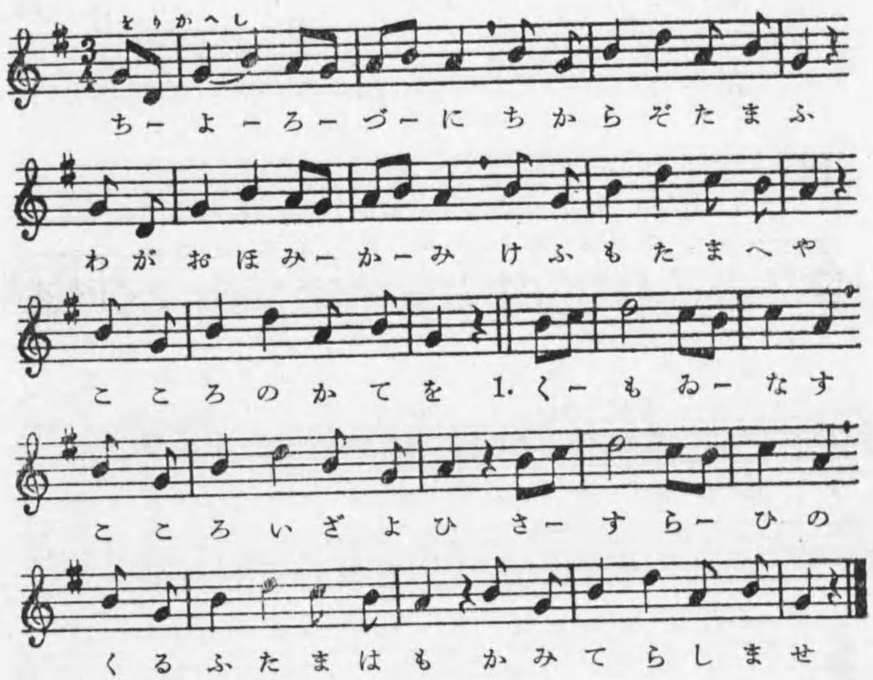
（をりかへし）
ひさかたのそのみやこ指し
我心勇立てり たび路のかてと
七の靈賜たまへ 聖なるみたま

一
鹿の河邊にあへぐがごとく
術も無み戀ふるあまつましみづ

二
止む時しなく我がたましひは
鳩のごと來にしきみをしぞ思ふ

三
あらしや猛るわれやは撓む
力や失せぬる神たすけませ

80 聖　　靈



をりかへし
ちよろづに
力ぞたまふ　わが大御神
今日も賜へや　こころの糧を

一
くもねなす
心いざよひ　さすらひの
くるふ靈はも　神照らしませ

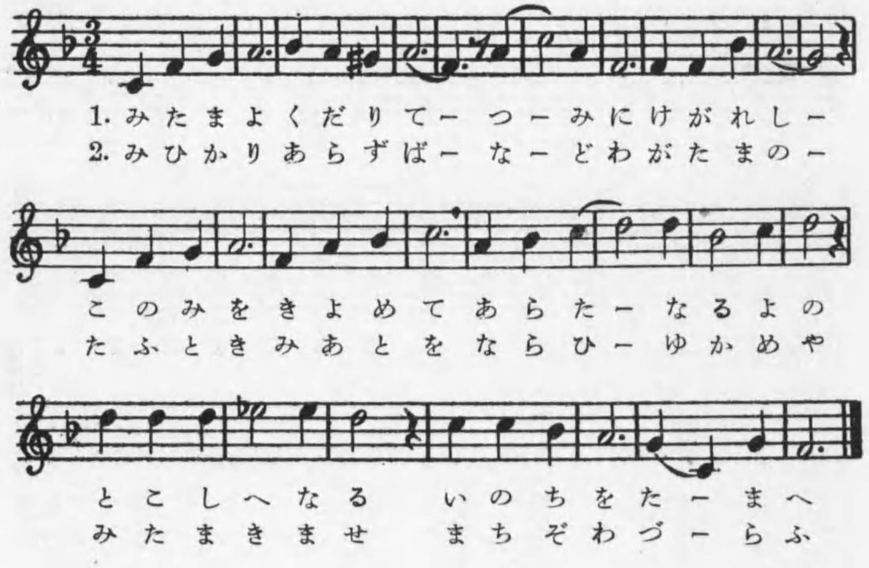
二
かしのみの
ひとり勝れし　神なれや
言と行爲との　しるべ示させ

三
あきらけく
強く言はませ　大御神
たかき教訓を　否といはめや

四
けふけふと
あすは何處の
たびならむ
みちびけ光り
靈のゆくがね

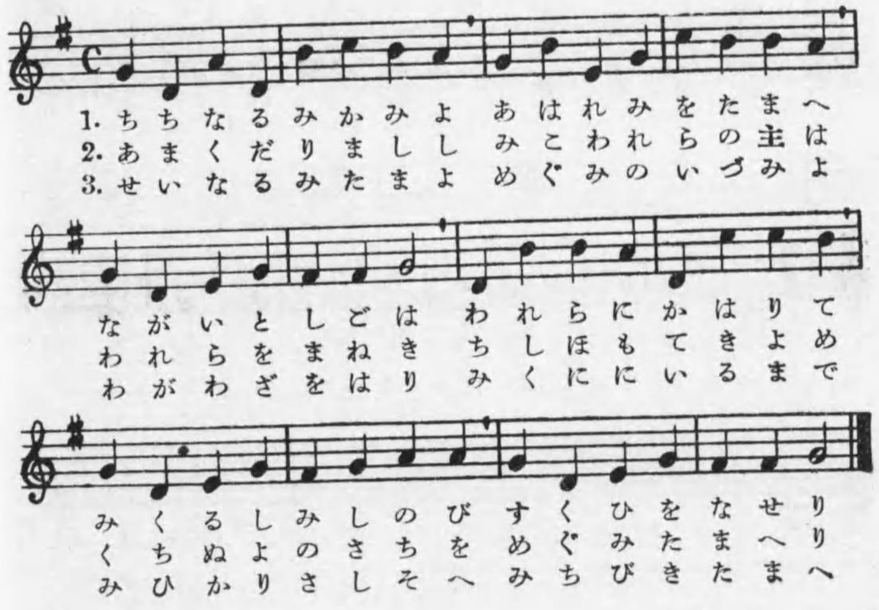
五
うらやすに
親しみあつき
かみをのみ
たのみ昵ふ
我ならなくに

81 聖　　靈



一
みたまよくだりて
つみにけがれし
この身をきよめて
あらたなる世の
とこしへなる
いのちをたまへ

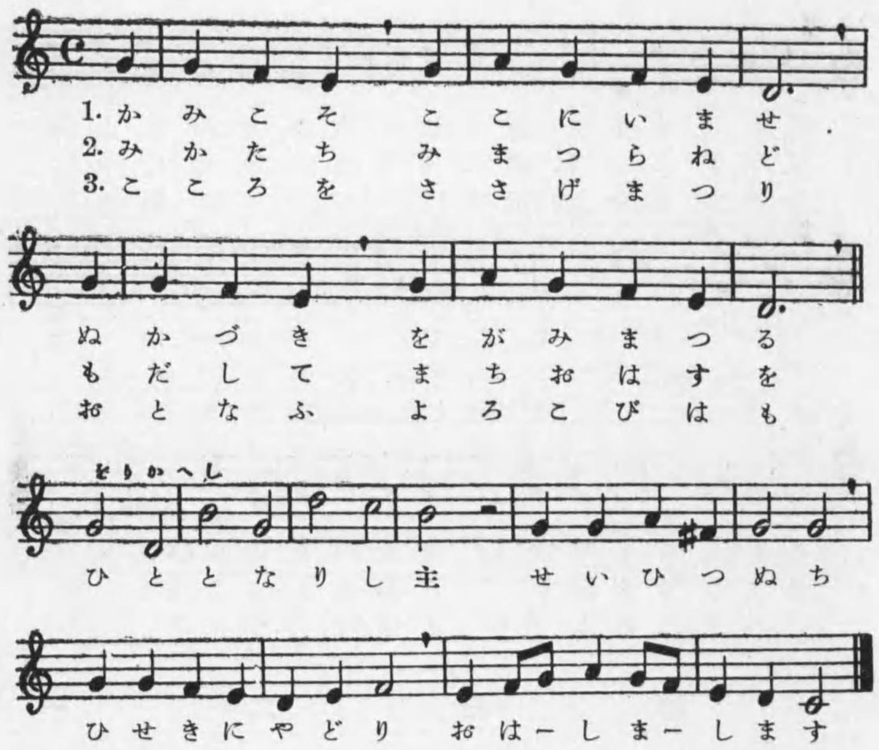
二
みひかりあらずば
などわがたまの
たふときみあとを
ならひ行かめや
みたま來ませ
待ちぞわづらふ



一
父なるみかみよ　あはれみを賜へ
汝がいとし子は　われらに代りて
みくるしみ忍び　すくひをなせり

二
あま降りましし　御子我等の主は
われらをまねき　血汐もてきよめ
朽ちぬ世の幸を　めぐみたまへり

三
聖なるみたまよ　惠みのいづみよ
わが業をはり　み國に入るまで
み光りさしそへ　みちびきたまへ

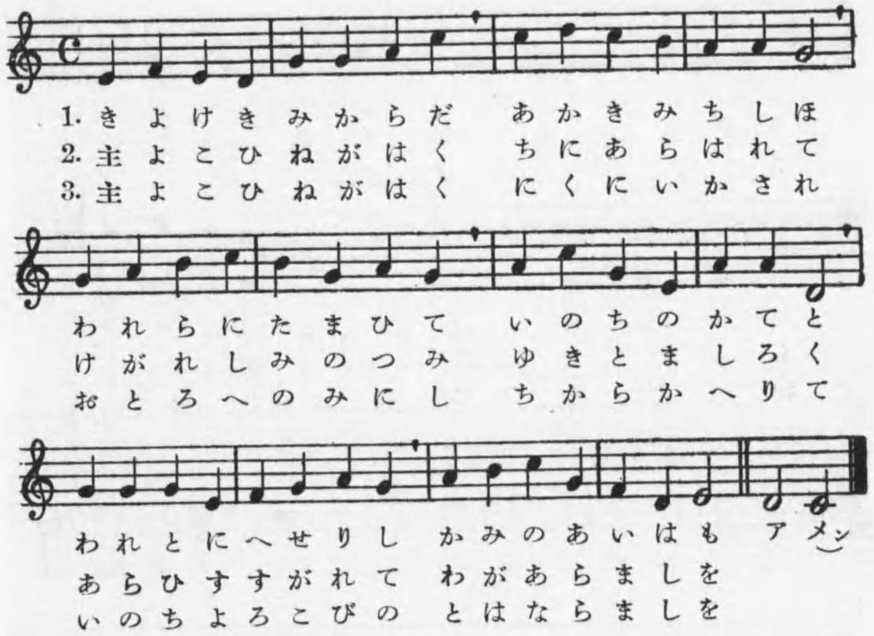


一
神こそ　此處にいませ
ぬかづき　をがみまつる

（をりかへし）
人となりし主　聖櫃ぬち
秘蹟にやどり　座し在す

二
みかたち　見まつらねど
もだして　待ちおはすを

三
こころを　ささげまつり
おとなふ　よろこびはも



一

きよけき御身體　あかき御血潮
われらに賜ひて　生命のかてと
我と犧牲せりし　神の愛はも

二

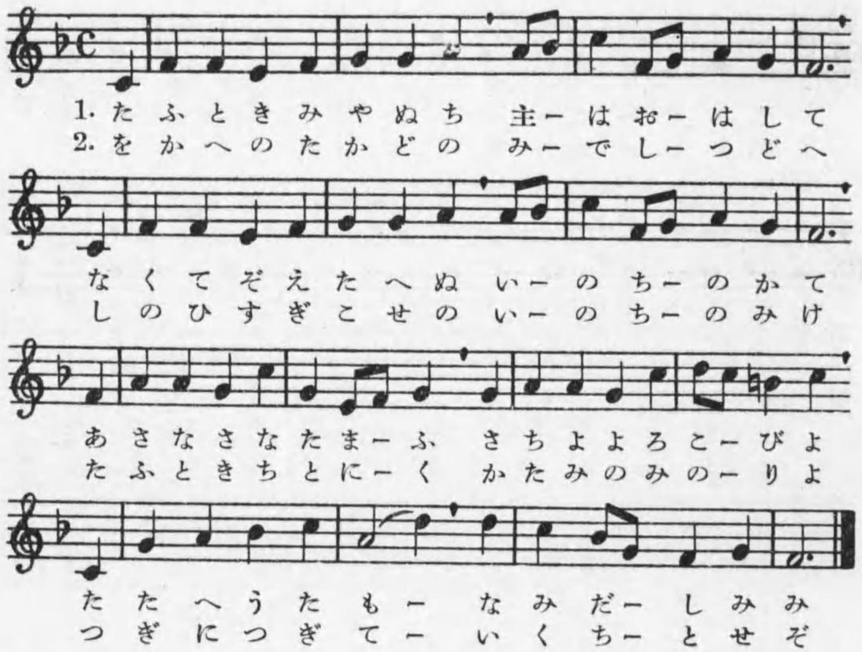
主よ乞ひ願はく　血に洗はれて
けがれし身の罪　雪とましろく
あらひ滌がれて　吾があらましを

三

主よ乞ひ願はく　肉に生かされ
衰への身にし　ちから歸へりて
生命よろこびの　永遠ならましを

四

三位のみさかえ　いや遠長に
ひとりの御神に　よろづ代つかへ
人みなのいのち　神に歸へらへ
アメン



一

尊とき聖堂ぬち　主はおはして
無くてぞえ堪ぬ　いのちのかて
朝な朝なたまふ　幸よよろこびよ
たたへうたも　なみだ繁み

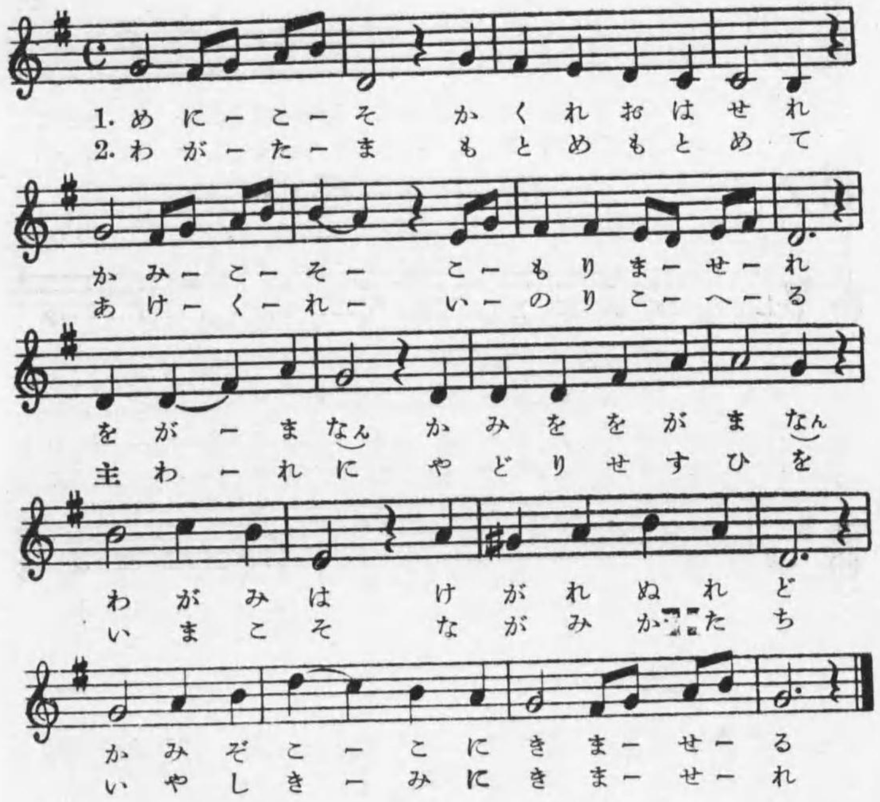
二

岡上の高樓　み弟子つどへ
死の日過越せの　いのちの御餐
たふとき血と肉　記念の御式典よ
繼ぎにつぎて　いくちとせぞ

三

ことば人となり　世にくだりて
今はホスチアの　みすがたもて
食す身を養なひ　靈を生したまふ
ああみめぐみ　うれしきかも

聖　體　86



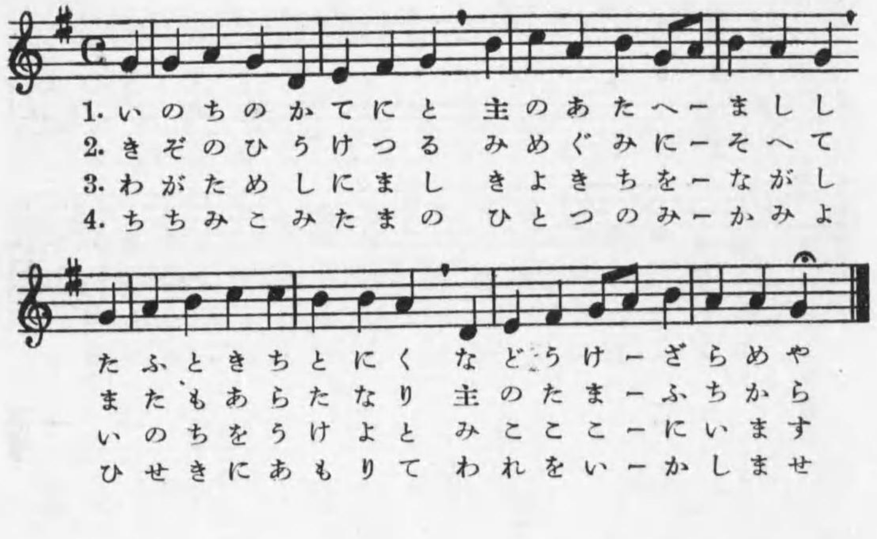
一
眼にこそ　隱れおはせれ
神こそ　こもりませれ
拜まな(ん)　神を拜まな(ん)
わが身は　けがれぬれど
神ぞここに來ませる

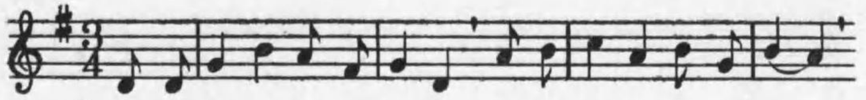
二
わが靈魂　もとめ求めて
明けくれ　いのり乞へる
主(ゆ)われに　宿りせす日を
いまこそ　汝がみかたち
賤しき身に來ませれ

三
わが思ふ　たふとき君よ
なれをば　食しまつらで
われには　生命なしとふ
みことば　われかしこみ
禮まひむかへまつる

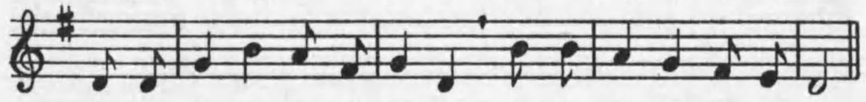
四
とき　はの
み生命こそは
わが身に
衣せられけれ
嶮しき
道ならなくに
おもきを
主にまかせて
やすらけき
世をすごさん

87　聖　體

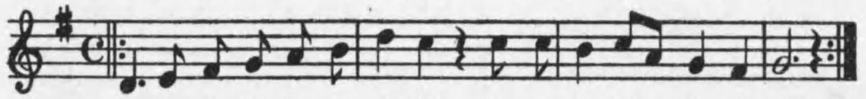

1. いのちのかてにと　主のあたへーましし
2. きぞのひうけつる　みめぐみにーそへて
3. わがためしにまし　きよきちをーながし
4. ちちみこみたまの　ひとつのみーかみよ
たふときちとにく　などうけーざらめや
またもあらたなり　主のたまーふちから
ちーーーー



1. ひせきにこもれる　すくひぬしこそー
2. もろびとひれふし　ちのはたてまでー
3. むかしはユデアの　さかひにおはせー



きよきをとめにし　きたりまししか
あさひのめぐりに　ミサうちつづけ
いまはくまもなく　ひとすむかぎり



いまはそのみをば　ちにやどーりせす
みやゐいやさかえ　ほめうたーたかし
ちかくおはしまし　めぐみをーぞたまふ

一

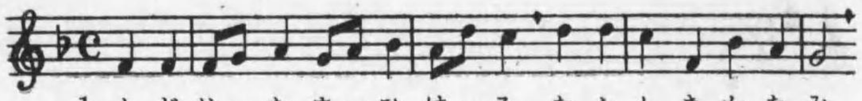
秘蹟にこもれる　救ひぬしこそ
きよき處女にし　來りまししか
（復唱）今はその身をば　地に宿りせす

二

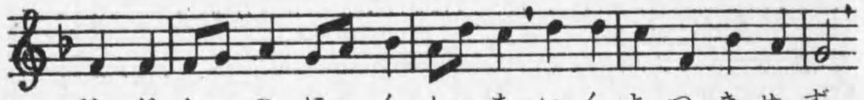
もろ人ひれ伏し　地の果まで
朝日のめぐりに　ミサうち續け
（復唱）宮居いやさかえ　ほめ歌たかし

三

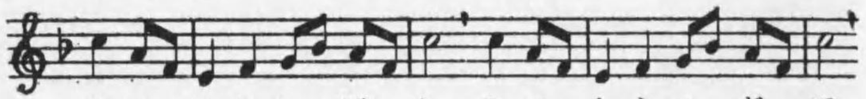
昔しはユデアの　境域におはせ
いまは隈もなく　人棲むかぎり
（復唱）近くおはしまし　惠をぞたまふ



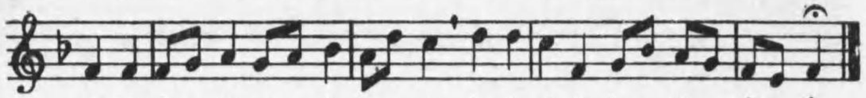
1. とどめーたまーひけーる　たふときかたみ
2. あはれーわがー主こーそ　とはにいまして



じふじかーの　にーくとーちいくよつきせず
ひせきーに　あーもりーつわれらのうちに



主のーみことーばーを　みでーしらつーぎーて
ちかーくぞおーはーす　などーわすれーめーや



ひせきーにつーかへーつよをやしなーひーゆーく
めにみーまつーらねーどなどうたがーひーせーめ

一

留めたまひける　たふとき形見
十字架の肉と血　いく代つきせず
主の御ことばを　御弟子ら繼ぎて
秘蹟につかへつ　世を養なひゆく

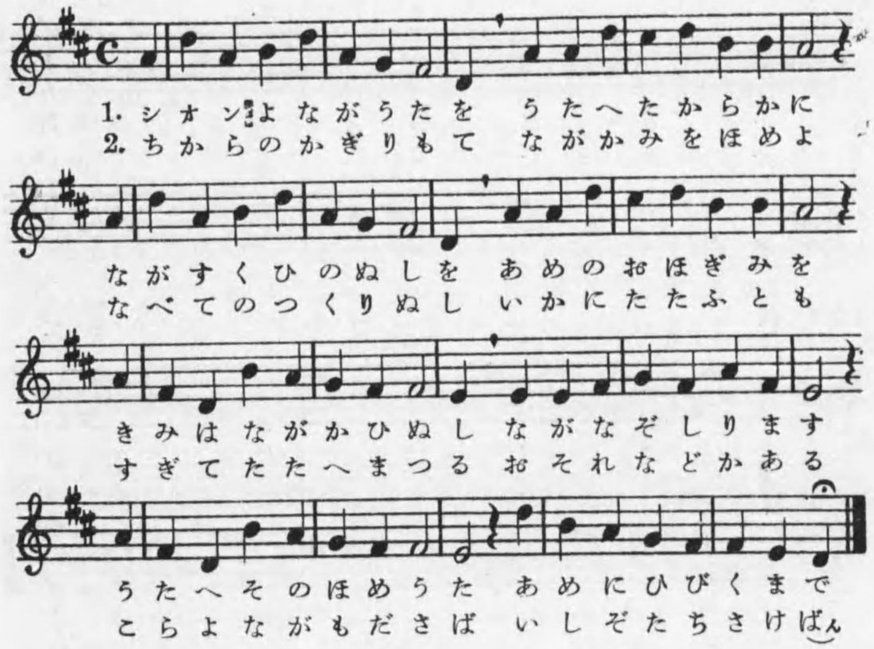
二

あはれ我主こそ　永久にいまして
秘蹟にあもりつ　われ等のうちに
ちかくぞおはす　などわすれめや
眼に見奉らねど　など疑がひせめ

三

うつせみの人と　なりましし日は
神のみすがたは　かくれおはしき
いま秘蹟には　ひとの性さへ
見え給はねども　奇にぞ戀ほしき

聖　體（ラウダ シオン）　90



一　シオンよ汝が歌を
汝がすくひの主を
君はなが牧ひぬし
うたへそのほめ歌

二　ちからの限りもて
なべてのつくり主
超ぎて稱へまつる
子らよ汝が默さば

三　偲ぶそのいにしへ
照る高樓に主は
きよき肉と血もて
いのち活くる糧と

四　すぎこしの祭りは
いのち契りましし
流れながれゆきて
すくひ生かし給ふ

うたへ高らかに
あめの大君を
汝が名ぞ知ます
天にひびくまで

なが神をほめよ
いかに稱ふとも
畏れなどかある
石ぞ立ち叫ばん

ニサンの夕月
十二の御弟子に
おのが身を頒ち
法典定めましぬ

いまぞ新らしき
新約の血
あまねく人の世
み惠みぞかしこ

五　世のあがなひ爲まく
のぼりてみからだを
ゆだねまかせて血を
いざや主のいけにへ

六　「斯くなして我をば
御宣の血と肉の
パンの肉血の御酒
日のめぐり行くなべ

七　日毎ささぐるミサ
御酒は血にかはりて
眼に見ゆるならねど
食しまつらねばなど

八　見ゆるはホスチアの
さとる智慧もあらぬ
燃えたつこころもて
秘蹟にあもりたまふ

主は詛ひの木に
惡しきものの手に
ながさせたまひき
あふぎ偲びゆかん

覺え言ひ繼げ」と
祭りは繼ぎつぎ
われらをやしなひ
間なくたえまなし

主のことばにより
パンは肉となる
そは主のみからだ
主の御弟子ならめ

みかたちのみなり
われらにしあれど
信じまつり來ぬ
主をなつかしみつ

九　いみじきたからこそ
お坐しかくれたりと
かてよ飲みものよと
みくにのそのいづみ

かたちの陰にし
きみを思ふこころ
靈魂はうゑかわき
汲む我がさちはひ

御酒のしたたりよ
全きみからだを
みこころよたふと
御血汐ぞこもる

十　ホスチアのくだけよ
主はうちにこもりて
われらにぞたまはる
食しまつるホスチア

十一　みつかひのパンなり
イサアクのいけにへ
善きひつじかひなる
いく千代かはりなき

祖先のマンナなり
すぎこしのちしほ
おほぎみの御手に
みやしなひ受けめ

十二　手負ひし小牡鹿の
つかれいきづきつつ
傷手いやしたまふ
みかて身にうけつつ

谷にあへぐごと
主を戀ひにこひて
愛によるこの身
いさみ立ちてゆく

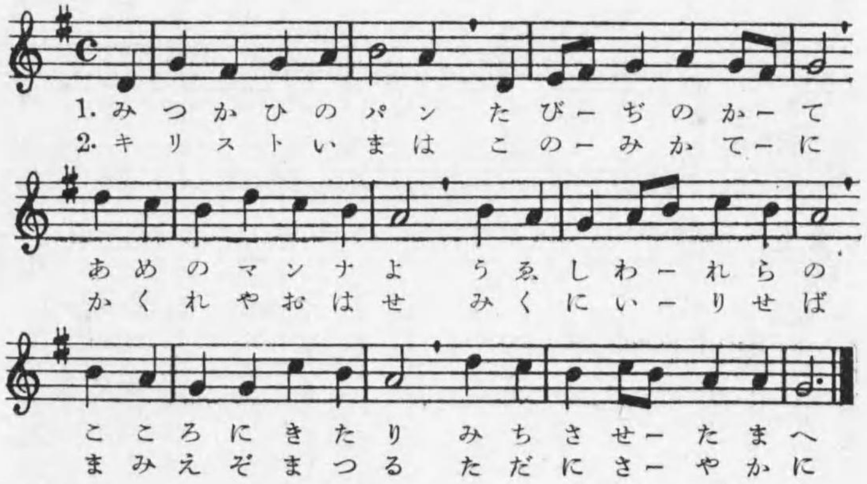
（次頁に續く）

十三

あなや主は我歌
上なきよろこび
わがつよき砦よ
わがかたき城よ
世を知召す主を
友よほめうたへ
いざや擧り歌へ
聲のかぎりして

十四

主よ御國入る時
わが靈魂をば
聖けき餐筵にぞ
迎へたまへかし
心禮裝ととのへ
みまへに進みて
かがやきの聖姿
喜びぞをがまん

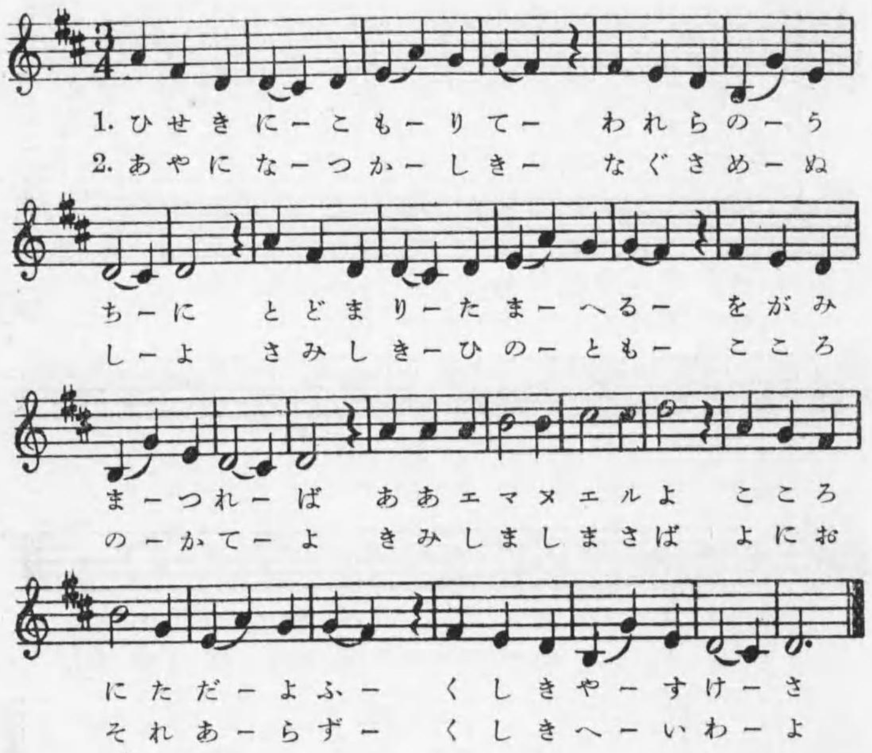


一

天使のパン
たび路のかて
あめの靈饌よ
饑ゑし我等の
こころに來り
滿ちさせ給へ

二

キリスト今は
このみかてに
隱れやお在せ
み國入りせば
見えぞまつる
直に分明に

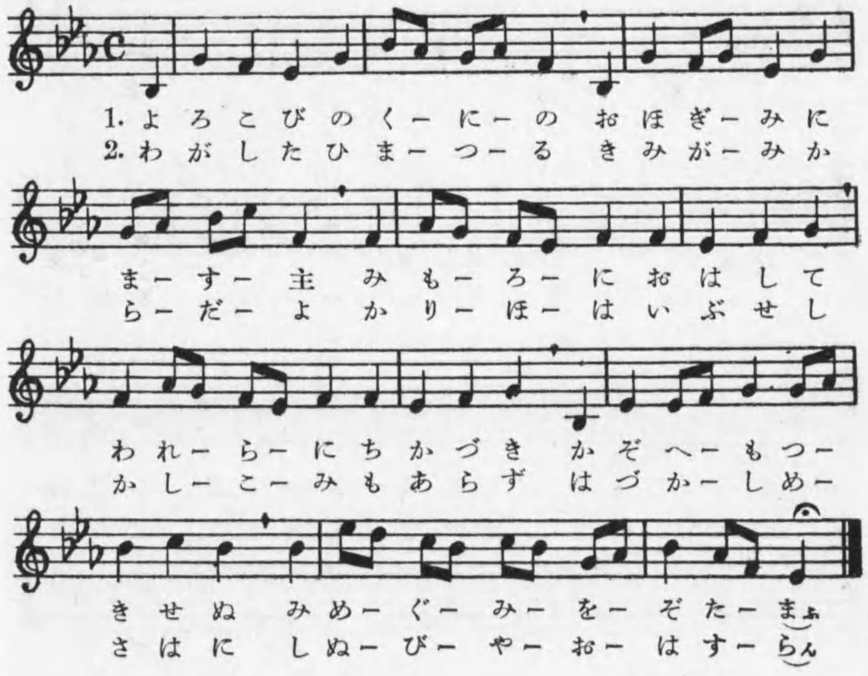


一

秘蹟にこもりて
われらのうちに
とどまりたまへる
をがみまつれば
ああエマヌエルよ
心にただよふ
奇しきやすけさ

二

あやになつかしき
なぐさめぬしよ
さみしき日の友
こころのかてよ
君し在しまさば
世に怖れあらず
奇しき平和よ



一

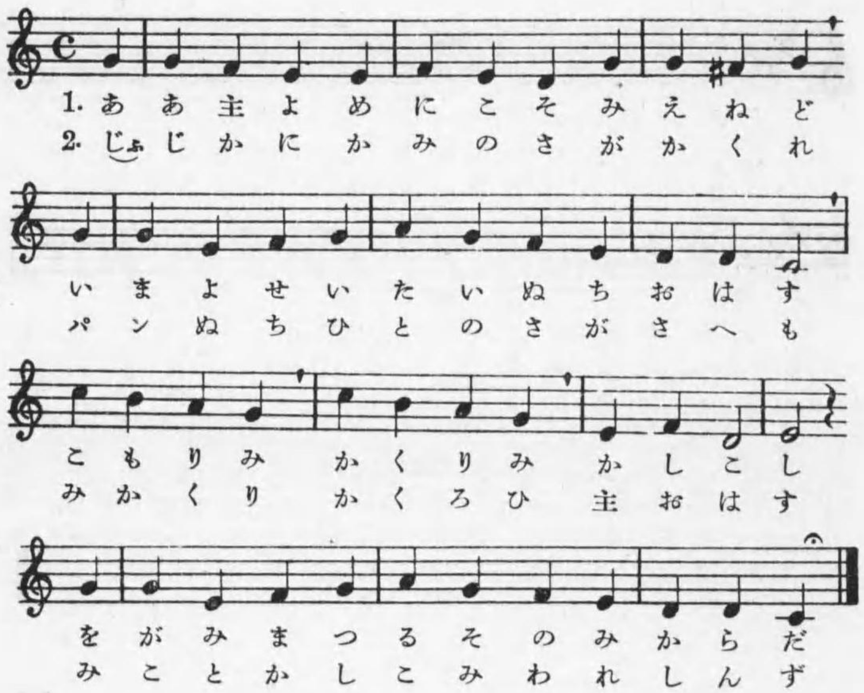
よろこびの國の　大君にます主)
聖櫃におはして　われらに近づき
數へもつきせぬ　み惠をぞたまふ)

二

わが慕ひまつる　君がみからだよ
假宮はいぶせし　畏こみもあらず
はづかしめ多に　忍びや在すらん)

三

率へりくだりて　禮まひ奉らなん)
數多主を無みし　畏れなきひとに
つぐのひ祈りて　主に仕へ奉らん)



一

ああ主よ　眼にこそ見ねど
いまよ聖體ぬちおはす
籠りみ　隱りみ　かしこし
をがみまつるその御體

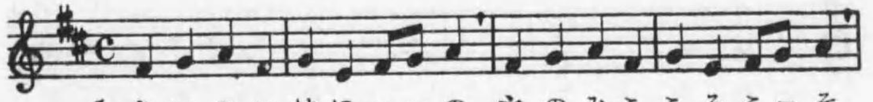
二

十字架に　神の性かくれ
麵麭ぬち人の性さへも
身隱り　隱ろひ　主おはす
御言かしこみわれ信ず

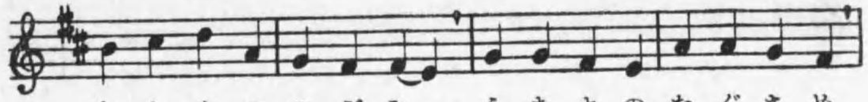
三

トマスの　疑雲うち晴れ
見ずて信ずる神の子の
聖なる　生命よ　こもりて
いざ弱き我を生かせよ

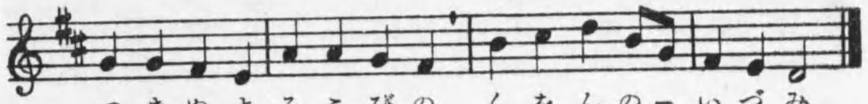
（聖トマの祈りより）



1. あいのいけにへーの　主のみこころこーそ
2. つみとがけがれーを　たふときちしほーに
3. きみがみこころーを　かがみとあふぎーて



われらののぞみー　うきよのなぐさめ
あらひきよめてー　わがすくひぬしの
おもひをきよめー　あゆみをただして



つきぬよろこびの　くをんのーいづみ
おほみこころをば　かしこみーゆかなん
つおさ

一

愛のいけにへの　主の聖心こそ
われらののぞみ　憂世のなぐさめ
盡きぬ喜びの　久遠のいづみ

二

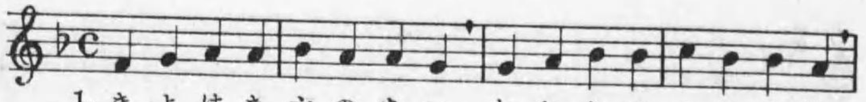
つみとが穢れを　たふとき血汐に
あらひきよめて　我がすくひ主の
大御心をば　畏こみゆかなん

三

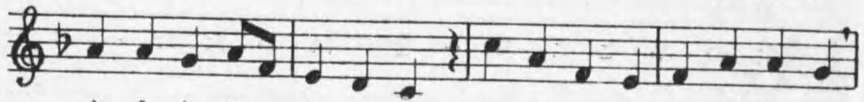
君がみこころを　かがみと仰ぎて
おもひを淨め　あゆみを匡して
榮光のかむりを　得まく欲りする

四

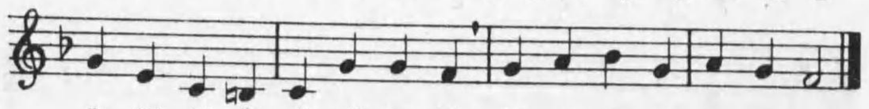
我等は祈らなん　國々島々
聖教のひかりを　かしこみ仰ぎて
君がみこころに　添ひまつる日を



1. きよけき主のあい　われらのこころに
2. 主とともにいきて　そのあいのほのほ
3. あいのひはげしく　もえずてやはある



もえしめーたまへ　このみとたまとを
あがれそーらへに　あまつみくにに
みこころーのくに　ひえやすきこころ



みてにさぐれば　主ようけたまへ
よろこびのうたの　ひびかふまでに
ここにいかされて　とはにかがやく

一

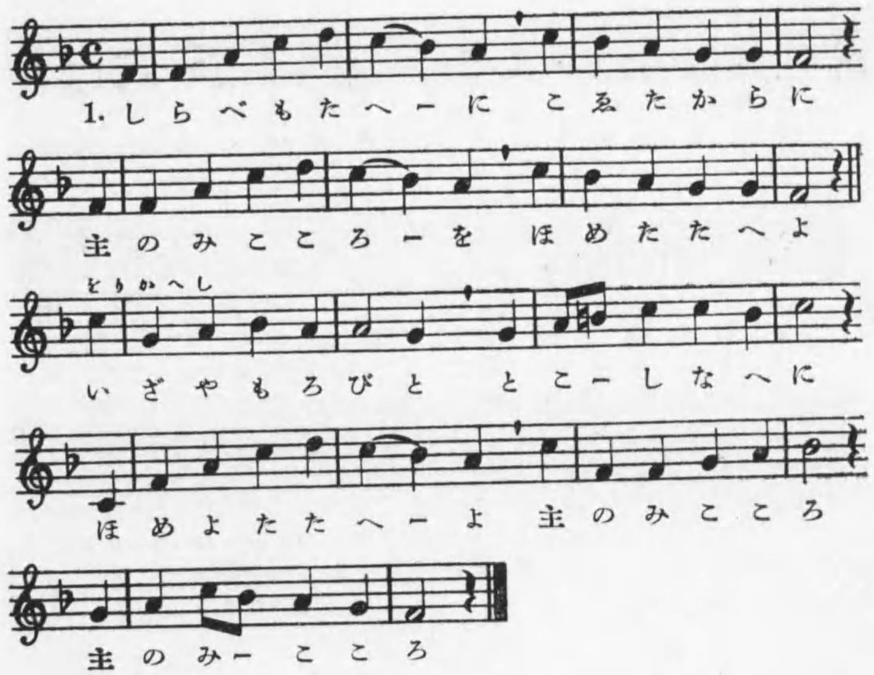
きよけき主の愛　われらのこころに
燃えしめたまへ　この身と靈魂とを
み手に捧ぐれば　主よ受けたまへ

二

主と共に生きて　その愛のほのほ
あがれ空へに　あまつみくにに
よろこびの歌の　ひびかふまでに

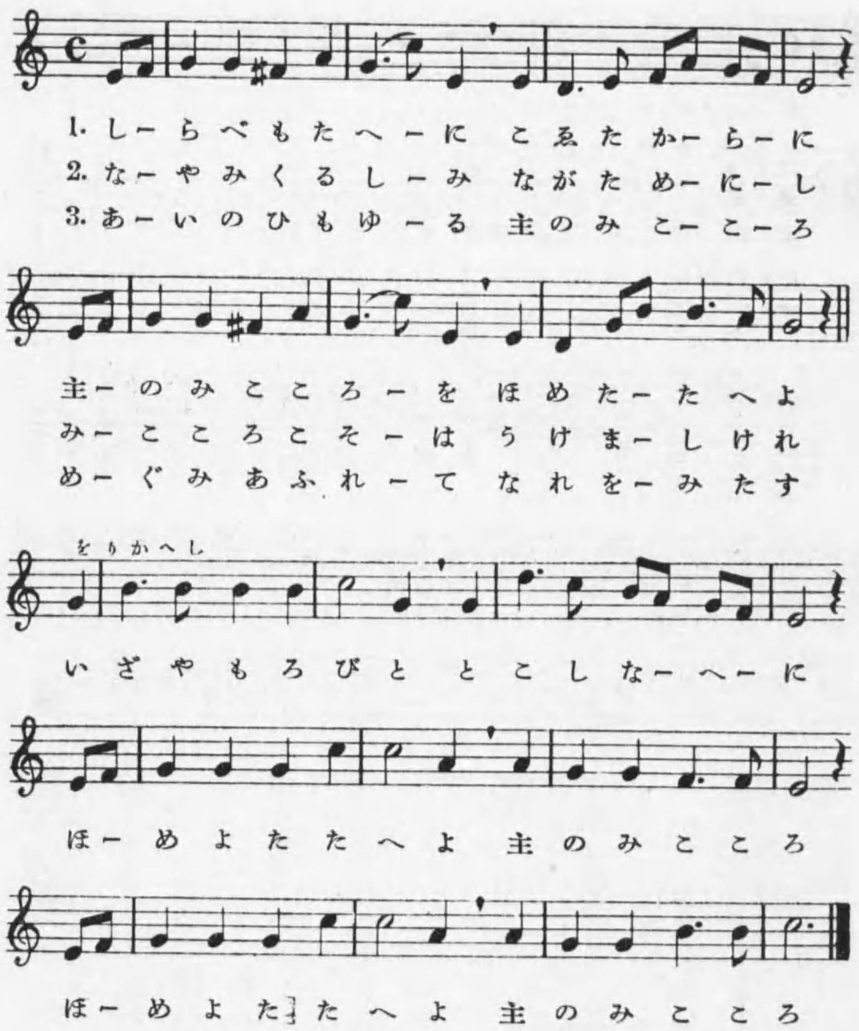
三

愛の火はげしく　燃えずてやはある
みこころのくに　冷えやすきこころ
茲にいかされて　永久にかがやく



一　しらべもたへに　こゑたからに
　主のみこころを　ほめたたへよ
（をりかへし）
　いざやもろびと　とこしなへに
　ほめよたたへよ　主のみこころ
　主のみこころ

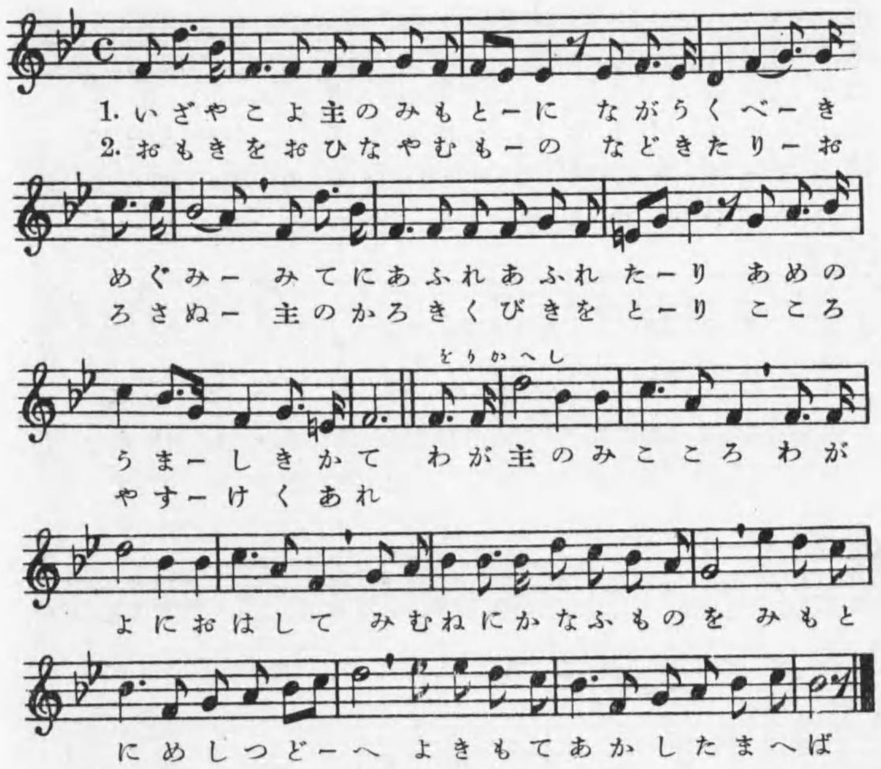
二　なやみくるしみ　汝がためにし
　みこころこそは　受けましけれ
　愛の火もゆる　主のみこころ
　めぐみあふれて　なれを充たす



歌詞は前頁と同じ

（但しをりかへしの最後の一行のみ相違）

98 聖心



一
率や來よ主の御許に
汝がうくべき惠み
み手に溢れ溢れたり
あめの美しき糧

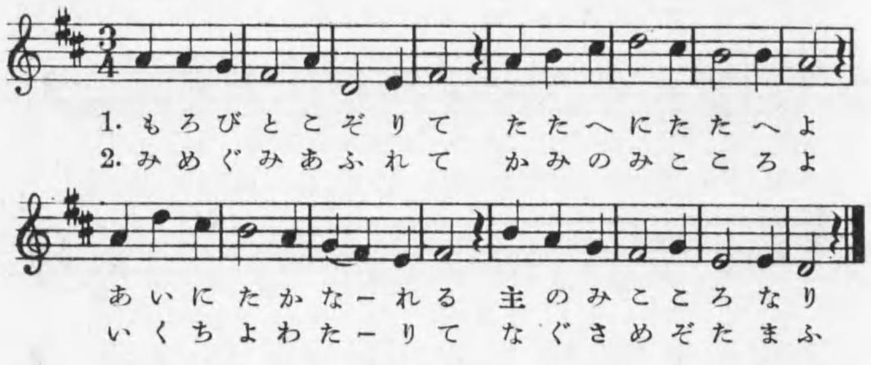
(をりかへし)
わが主のみこころ
わが世におはして
みむねにかなふ者を
み許に召しつどへ
善きもて飽し給へば

二
重きを負ひなやむ者
など來たり下さぬ
主のかろき軛をとり
こころ安けくあれ

三
渡津海の荒き波も
宣りまず一こゑに
風の共きき從がひ
靜けくぞなりける

四
主にある歡こそは
永久につきせぬ幸
誰か掠め奪ふべき
汝が贏ち得し寶

99 聖心

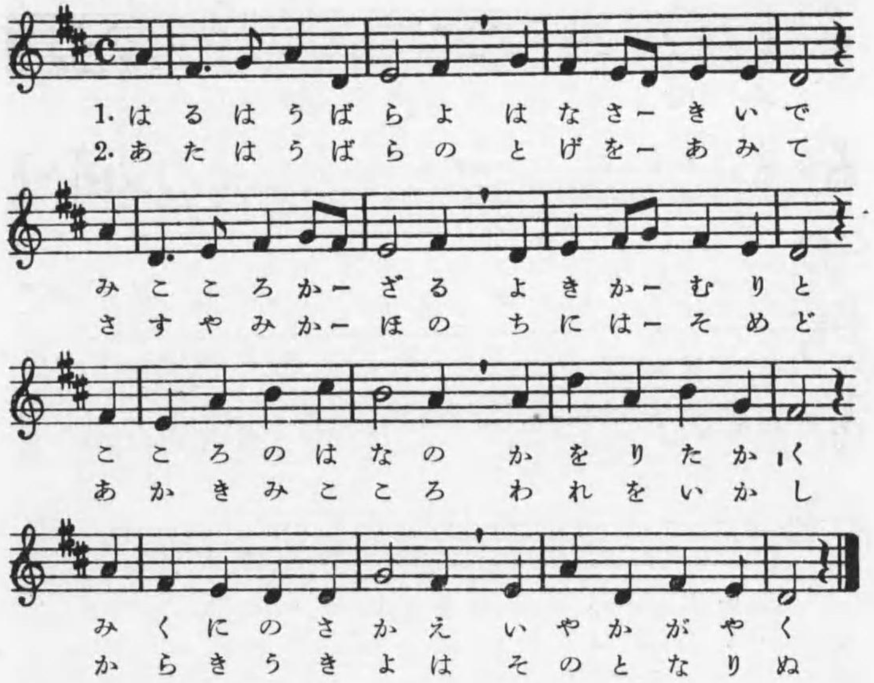


一
もろ人擧りて たたへに稱へよ
愛に高鳴れる 主の聖心なり

二
み惠み溢れて 神のみこころよ
幾千代亘りて なぐさめぞ賜ふ

三
うららの朝に わびしき夕べに
偲びまつる君 (イエズスの聖心)

四
尊ときわが友 救ひのみこころ
臨終の時にも みちびきを賜へ



一

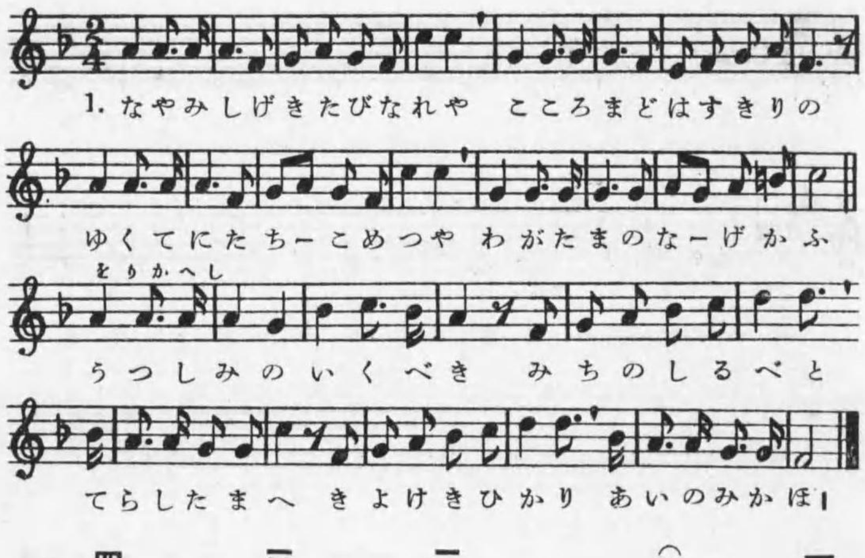
春はうばらよ　はな咲きいで
みこころ飾る　よきかむりと
こころの華の　かをりたかく
み國のさかえ　いやかがやく

二

仇は茨の　棘を編みて
刺すや御顔の　血には染めど
赤きみこころ　われを活かし
辛きうき世は　園となりぬ

三

我よこの世に　はづかしめを
いかに忍ぶも　わがみこころ
祝したまへば　棘は花の
臺となりて　われを幸はふ



一

惱みしげき旅なれや　こころ惑はす霧の
行手に立ち罩めつや　わが靈のなげかふ

（をりかへし）

うつし身の生くべき　道のしるべと
照らしたまへ　きよけき光り　愛の御顔

二

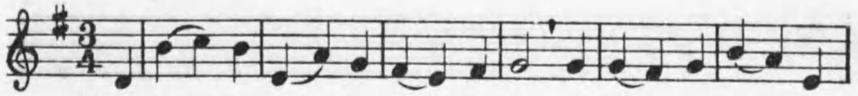
君は世の惡しき中に　傷つき倒れましき
されど聖心こそは　にこやかに在けれ

三

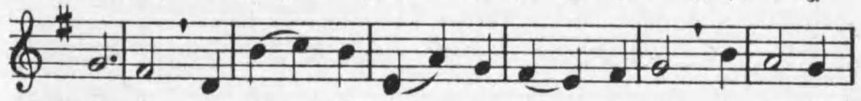
など恐るる小さき群　み國汝にあればと
なぐさめの御聲して　望みぞあらたなる

四

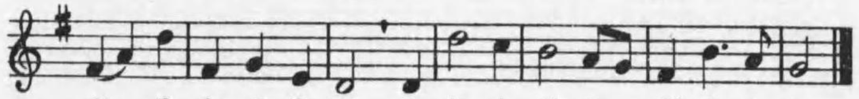
正しく清く雄々しく　歩みを主に倣ひて
君のみむねのままに　喜びつつすすまん



1. あふーぐもーかしーこし主のーみこーこ
2. さかーえかーがやーけばよもーのくーに
3. たぎーつまーしみーづとこーよにーな



ろよひにーけにーみたーみはみなを
たみとはーのさーちもーとめみもと
がれいたーめるーここーろをいかし



こーそたのみてまなくぞよーびまつる
にーつどひきてつみのゆるーしこへり
ゆーくいのちぞなぐさめのーみこころ

一

あふぐもかしこし主のみこころよ
日にけに御民は御名をこそ頼みて
間なくぞ呼び奉る

二

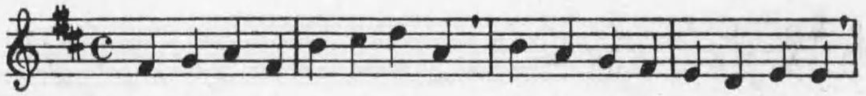
さかえかがやけば四方のくにたみ
永遠のさちもとめみもとに集ひきて
罪のゆるし乞へり

三

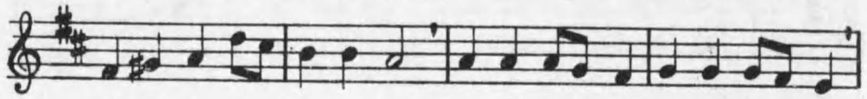
たぎつ眞清水とこ世にながれ
いためるこころを活しゆくいのちぞ
慰めのみこころ

四

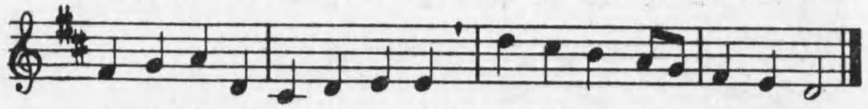
いまはの床にもあいのみこころ
ともにぞいましてとこ永遠の旅やすけく
みちびき給へかし



1. イエズスのみこころ　われらのたすけよ
2. いつつのみきずは　あけにそみたまひ
3. みてにつくわれぞ　いざいさみたてよ



よのたたーかひに　きずつーきつかるーる
われらのーために　いたみーくるしみーて
みむねのーままに　たたかーひふるひーて



このみのとりでと　きみやたーたせる
にぶれるこころを　はげましーたまふ
かちのかむりをば　あめにうーけまし

一

イエズスの聖心)
世のたたかひに　われらの助けよ
この身の堡と　傷つきつかるる
きみや立たせる

二

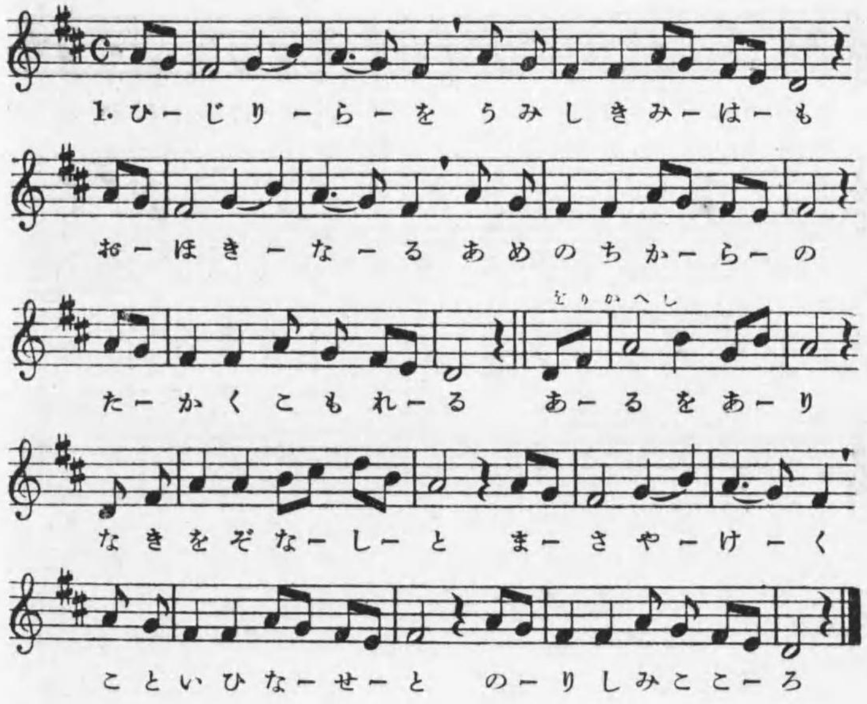
五つの御きずは　あけに染み給ひ
われらの爲めに　痛みくるしみて
鈍れるこころを　はげましたまふ

三

み手につく我ぞ　いざ勇み立てよ
みむねのままに　たたかひ振ひて
勝利の冠をば　あめに受けまし

四

裂かれし御脇に　ほとばしる泉
いのちの清水　汲めども盡せず
君はわがのぞみ　我が愛にこそ

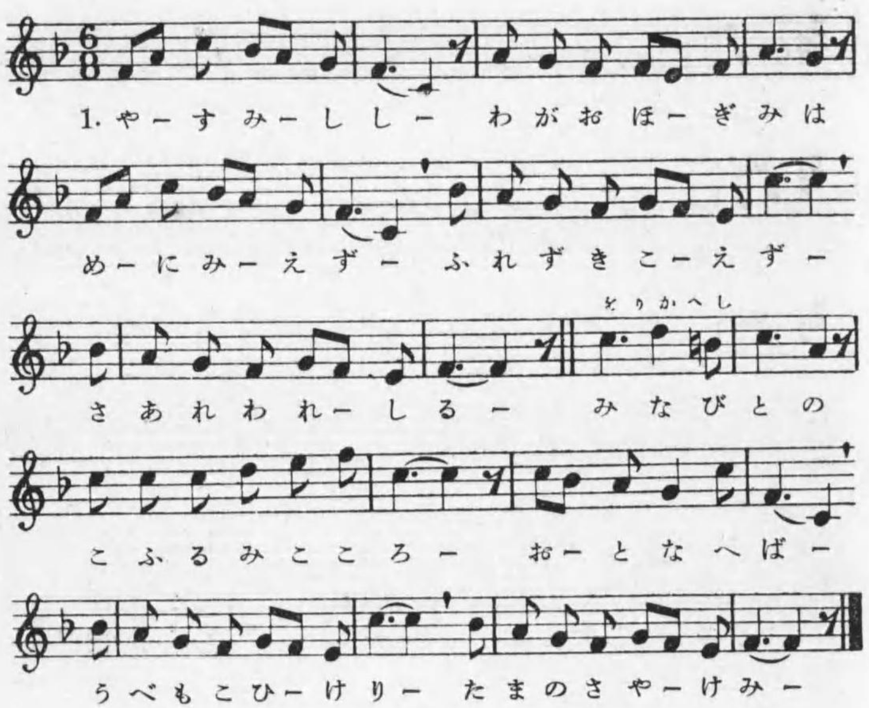


一
ひじりらを　大きなる
生みし君はも　高く籠れる
あめのちからの

（をりかへし）
あるをあり
なきをぞなしと　まさやけく
言いひ爲せと　宣りし聖心

二
あいこそは　日々なべて
神のみこころ　福音ぞよき
彌しきゆかむ

三
こころこそ　きみが手に
まづしかりけれ　禮や忘るる
なびきしわれぞ



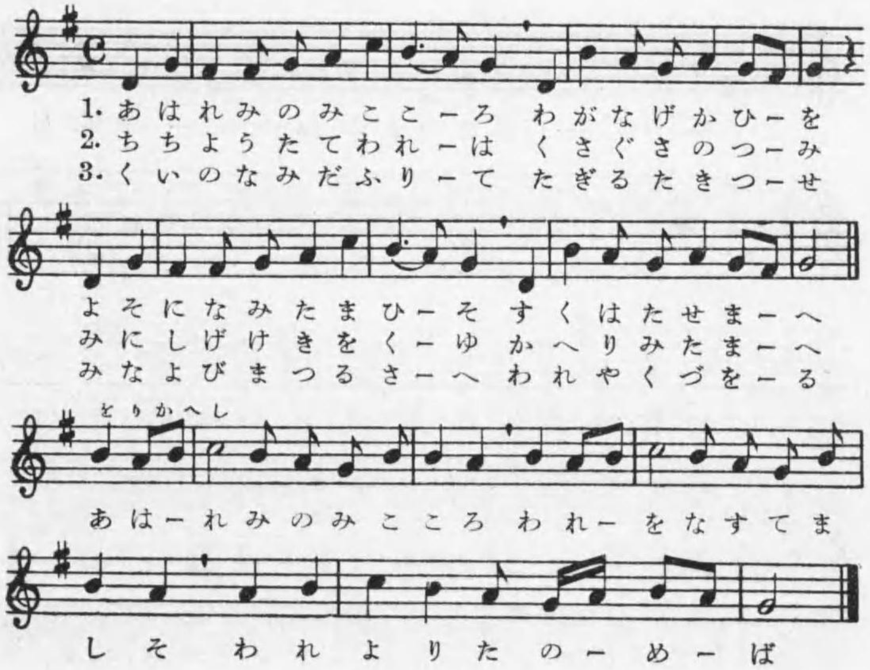
一
八隅しし　眼に見えず
わが大君は　さあれ我知る
觸れず聞えず

（をりかへし）
みな人の
戀ふる聖心　おとなへば
うべも戀けり　靈のさやけみ

二
地のはたて　我がゆくも
陰府の澳へに　尊ときろかも
君はおはせれ

三
やすけさは　みこころや
死ぬる心の　照しおはさめ
ひとりし君が　默ならず
語りおはす日

四
憎みあへるを　世のひとは
われ安きあり



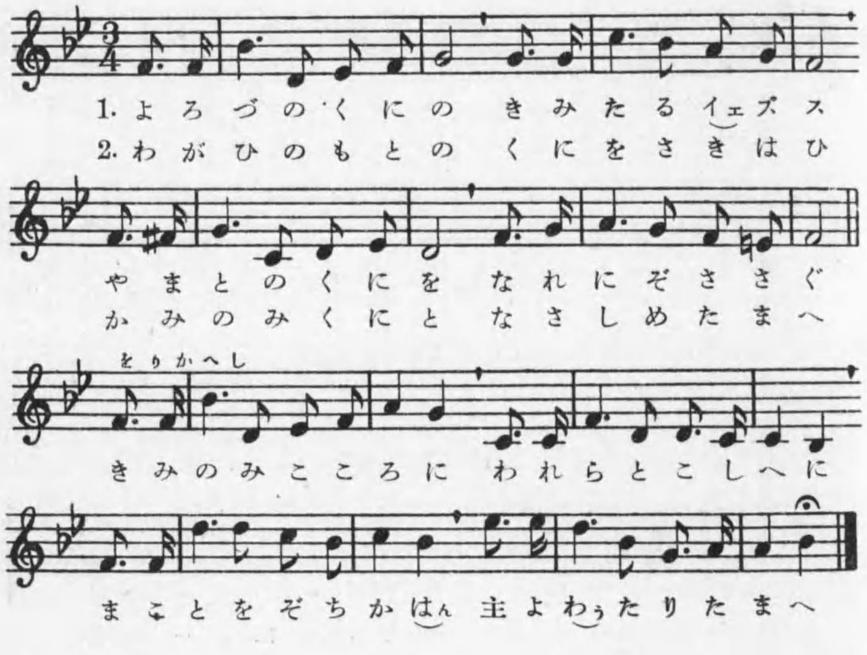
一 あはれみの聖心　わが歎かひを
よそになみたまひそ　救はせたまへ

（をりかへし）
あはれみの聖心　我をな捨ましそ
われ依り頼めば

二 父ようたてわれは　くさぐさの罪
身に繁けきを悔ゆ　かへりみ給へ

三 悔いの涙零りて　たぎる瀧つせ
み名よび奉るさへ　我やくづをる

四 たふときみ救ひに　萎えたる足を
いまやい立たし我　み許にぞゆく



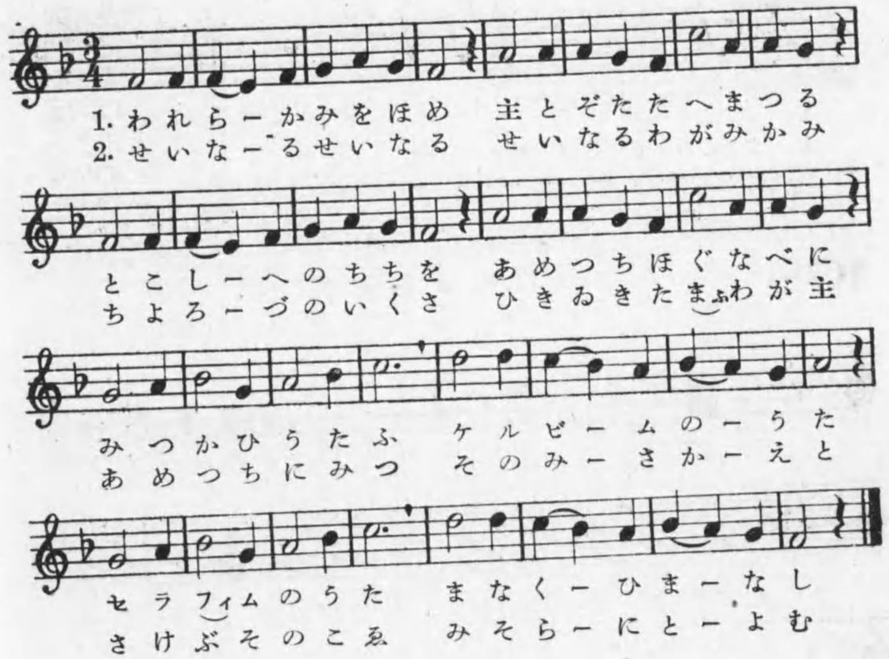
一 よろづの國の　君たるイエズス
やまとのくにを　なれにぞささぐ

（をりかへし）
君のみこころに　我等とこしへに
忠誠をぞ誓はん　主よ王たり給へ

二 わが日のもとの　國をさきはひ
神のみくにと　なさしめたまへ

三 闇にむか伏す　敵をくじきて
み旗のもとに　かちうたあがる

主に對する讃美（テデウム） 108



一

われら神を讃めとこしへの父をみつかひうたふセラフィムの歌

主とぞ稱へ奉る天地祝ぐなべにケルビムのうた間なくひまなし

二

「聖なる聖なるちよろづの軍あめつちに滿つさけぶそのこゑ

聖なるわが御神率來たまふ我主その御榮え」とみそらに響む

三

尊ときみ弟子ら生命をささげしきみに屬くもの量りもあらぬ

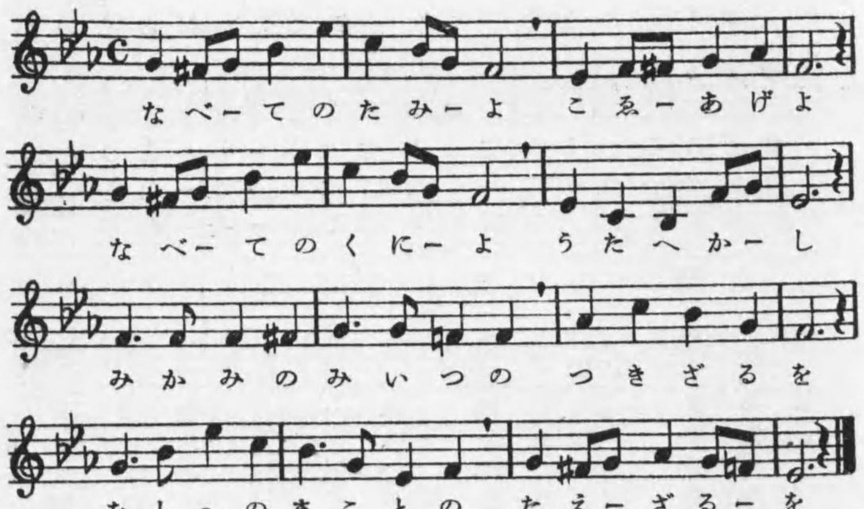
榮譽ある聖者ら證し人らこぞり競ひうたへば御稜威かがやく

四

父と子と聖靈ただひとりの神をとめにやどり死と陰府に勝ち

三つに御座せど世を救ひの爲にくるしみしのび天にゆきたまふ

109　主に對する讃美



一

なべての民よ
こゑあげよ
なべての國よ
うたへかし
御神の陵威の
盡きざるを
教への眞理の
たえざるを

二

三位にいます
ひとりの主
とはのみ榮え
あれよかし
始めに在しし
そのごとく
今も後の世も
とこしへに

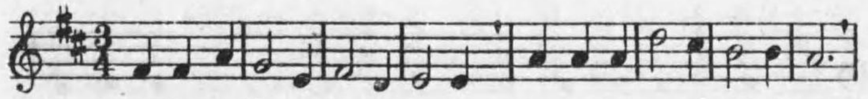
五

御門をばひらき
生るをば求めつ
主はまた來りて
世を審給ひなん

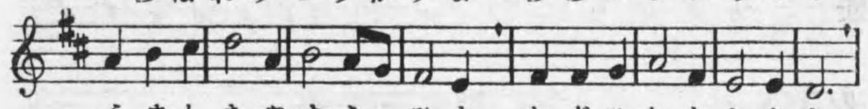
六

主よながぬ血もて
あがひしを受け
聖徒のむれに
入れたまへかし

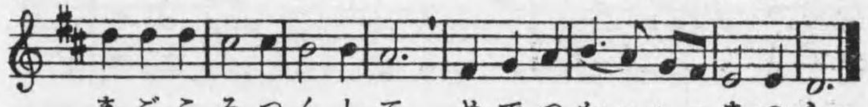
主よ御民のため
み國の榮光をば
かぎりなく保ち
日にけに守ませ
われらはいのる
きみのあはれみ
主によるわれに
罪な賜ひそ



1 主こそわがほまれよ　ひかりよたからよ
2. いのちよよろこびよ　ちからよたすけよ
3. あはれみのみかみよ　あめのみたすけに



うましきやすらーひよ　たぐひなきともよ
ながなぐさめをーこそ　われはまちのぞめ
とこしへのさちーこそ　さだやかにあらめ



まごころつくして　めでつかーへーまつらん
ながみいつくしみ　なににかーはーたとへん
あだにすぎしひの　みゆるしーをーねがふ

一

主こそわが榮譽よ　ひかりよたからよ
美しきやすらひよ　たぐひなき友よ
まごころつくして　愛で仕へまつらん

二

いのちよ歡喜よ　ちからよたすけよ
汝が慰めをこそ　われは待ちのぞめ
ながみいつくしみ　何にかはたとへん

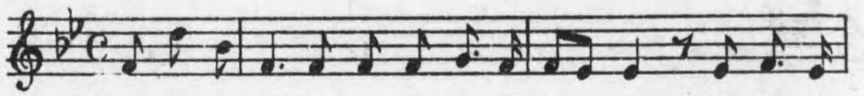
三

あはれみの御神よ　あめのみたすけに
とこしへの幸こそ　定やかにあらめ
徒空にすぎし日の　みゆるしをねがふ

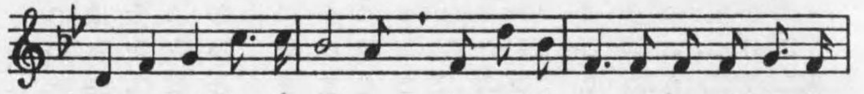
四

數多あやまちてし　つみのつぐのひを
のこりなく果して　み許にぞかへらん
燃えよ愛の火よ　めぐみにこたへて

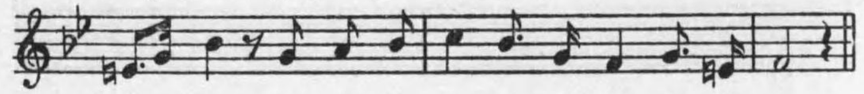
（聖アウグスチノの言葉より）



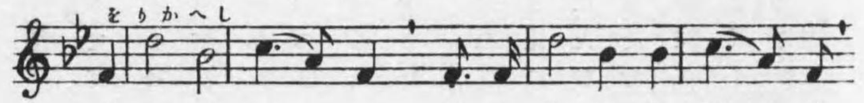
1. なみだのかわくひまなーく　うきよ



のなげきしげし　ただきみのみぞかは

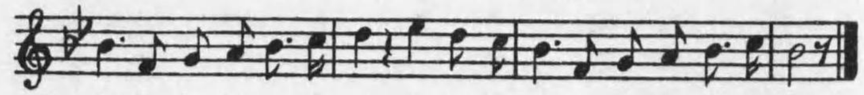


らーぬ　たのみにますぞうれし



うつせみーの　はかなきよにーは

なげきよるかげーもなし　つみの



ゆるしやいかできみならでこひえめや

一

なみだのかわく隙なく
うき世のなげきしげし
ただ君のみぞかはらぬ
たのみにますぞうれし

（をりかへし）

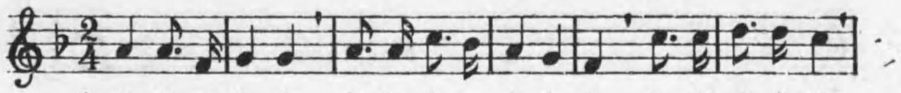
うつせみの儚き世には
なげきよるかげもなし
つみのゆるしやいかで
きみならでこひ得めや

二

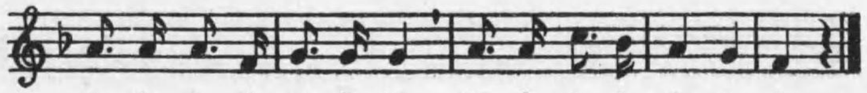
み足のもとにうちふし
おのがつみおもひ出で
みあはれみを乞につつ
いのるこころもかなし

三

父のみいかりをなだめ
身は十字架にかかりて
罪の子をば召したまふ
みいつくしみたふとし



1. あめにます　われらのちちよ　ねがはくは
2. みくにきて　みこころここに　おこなはれ
3. けふこのひ　またもたまへや　みとたまの
4. そむきぬる　つみゆるしませ　われもまた



みなあめつちに　はえまさましを
さながらにして　あまつみくにみん
なくてぞたえぬ　ひびのわがかて
われにおひぬる　ひとをゆるせば

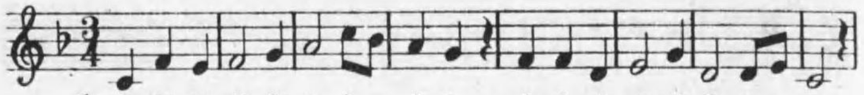
一　天にます　我等の父よ　願はくは
御名あめつちに　映えまさましを

二　御國來て　御心ここに　行なはれ
さながらにして　あまつみ國みん

三　今日この日　又も賜へや　身と靈の
なくてぞ堪えぬ　日々のわがかて

四　脊きぬる　罪赦しませ　我もまた
われに負ひぬる　ひとをゆるせば

五　世にあれば　折の荒びに　誘はれて
惡きに入りなん　主よまもりませ



1. あめにますみちーちよ　きよきみなをこーそ
2. あはれ主のみくーによ　のぞみきたれかーし
3. ゆるしませわがーつみ　さわれひとにせーば
4. みめぐみたらひーなば　こころのすさみーに

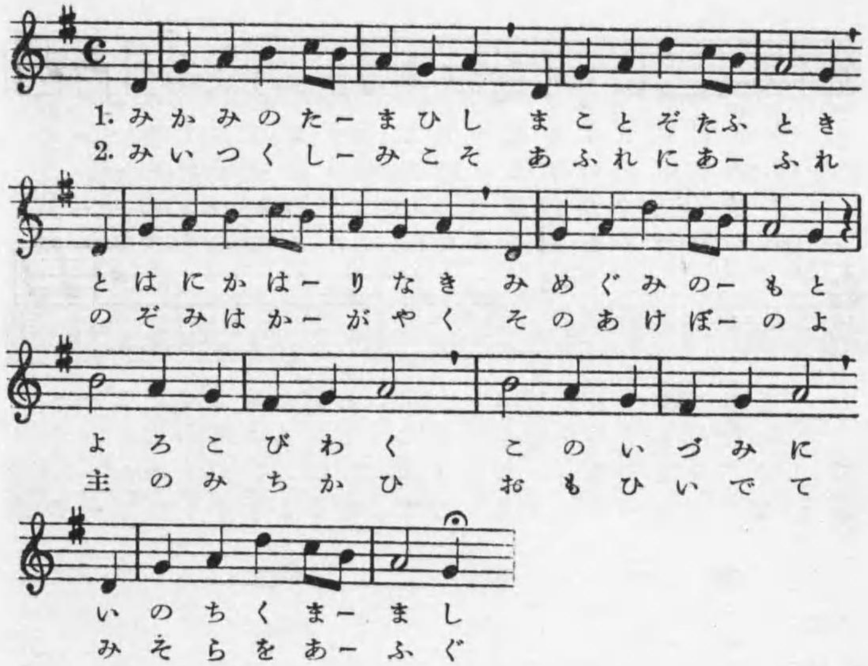
あめつちーしもーこーぞり　あがめせさせたまーへ
みむねよーなさーれーかし　ちにもあめのごとーく
めぐみたーまへーけふしも　ひびのいのちのかーて
こころみーやおーそーひなん　あくよりすくひまーせ

一　天にますみちちよ　きよき御名をこそ
あめつちしも擧り　あがめせさせ給へ

二　あはれ主の御國よ　のぞみ來たれかし
聖旨よなされかし　地にも天のごとく

三　ゆるしませわが罪　然吾他人にせば
惠み給へ今日しも　日々のいのちの糧

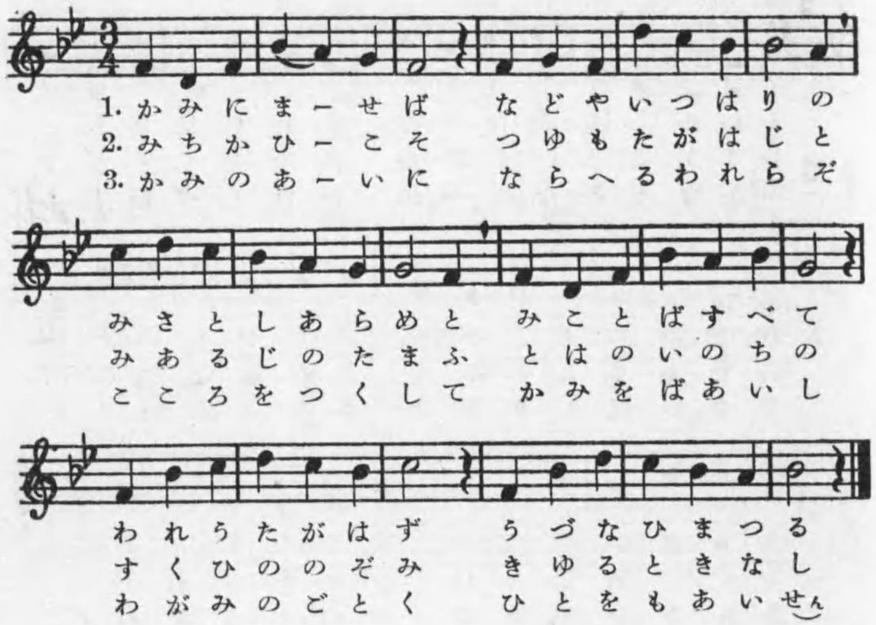
四　み惠み足らひなば　こころのすさみに
試みやおそひなん　惡よりすくひませ



一
み神のたまひし　眞理ぞたふとき
永久に變りなき　みめぐみのもと
よろこび湧く　このいづみに
いのち汲ままし

二
み愛くしみこそ　あふれにあふれ
希望はかがやく　そのあけぼのよ
主のみちかひ　おもひ出でて
みそらをあふぐ

三
わがつくり主に　こころをつくし
世の人ことごと　あいもて睦ぶ
あいもて知る　あいのくにに
身をや捧げなん

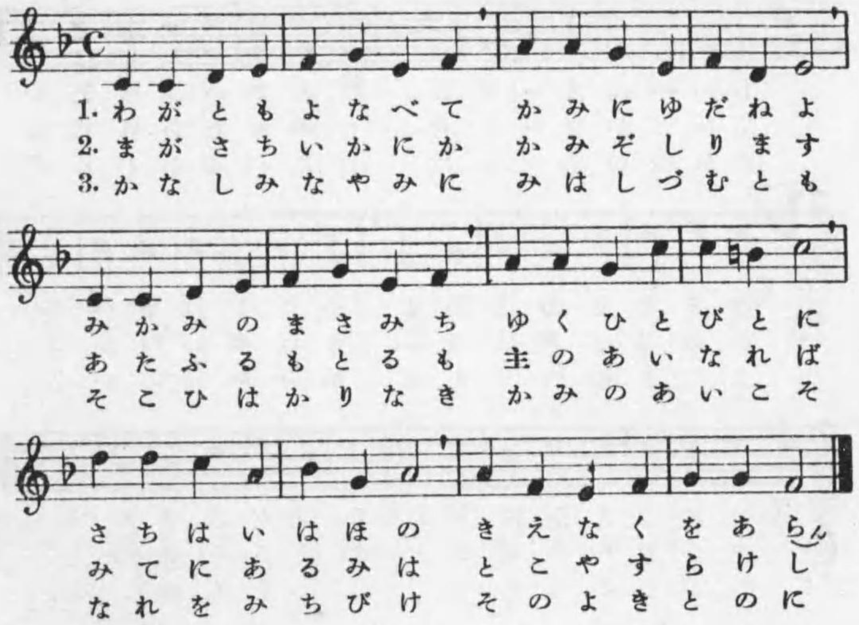


一
かみにませば　などや虚僞の
み啓示あらめと　みことばすべて
われうたがはず　うづなひまつる

二
みちかひこそ　つゆも違はじと
みあるじの賜ふ　とはのいのちの
すくひののぞみ　消ゆるときなし

三
かみのあいに　ならへる我等ぞ
こころを盡して　かみをばあいし
わが身のごとく　人をもあいせん

116 攝　理



1. わがともよなべて　かみにゆだねよ
2. まがさちいかにか　かみぞしります
3. かなしみなやみに　みはしづむとも

みかみのまさみち　ゆくひとびとに
あたふるもとるも　主のあいなれば
そこひはかりなき　かみのあいこそ

さちはいはほの　きえなくをあらん
みてにあるみは　とこやすらけし
なれをみちびけ　そのよきとのに

一
わが友よなべて　神にゆだねよ
み神のまさみち　ゆく人々に
幸福は巌の　消なくをあらん

二
禍福いかにか　神ぞ知ります
與ふるも取るも　主の愛なれば
み手にある身は　とこ安らけし

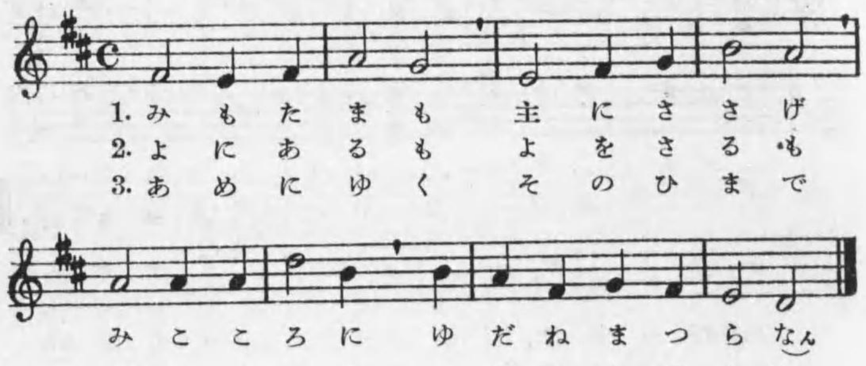
三
かなしみ惱みに　身はしづむとも
底ひ量りなき　神の愛こそ
汝をみちびけ　そのよき殿に

四
あらゆる苦しき　道ゆきましし
すくひの君こそ　みちびきませば
まかせつる身に　おそれやはある

五
髪毛のことごと
かぞへたまへる
主はわが隱れし
よわきを知れば
なぞ善きたすけ
わすれやおはす

六
神よたかぶれる
われにむちうち
祈りごころもて
みせつりに倚り
雄々しくきよく
生かしめたまへ

117 奉　献



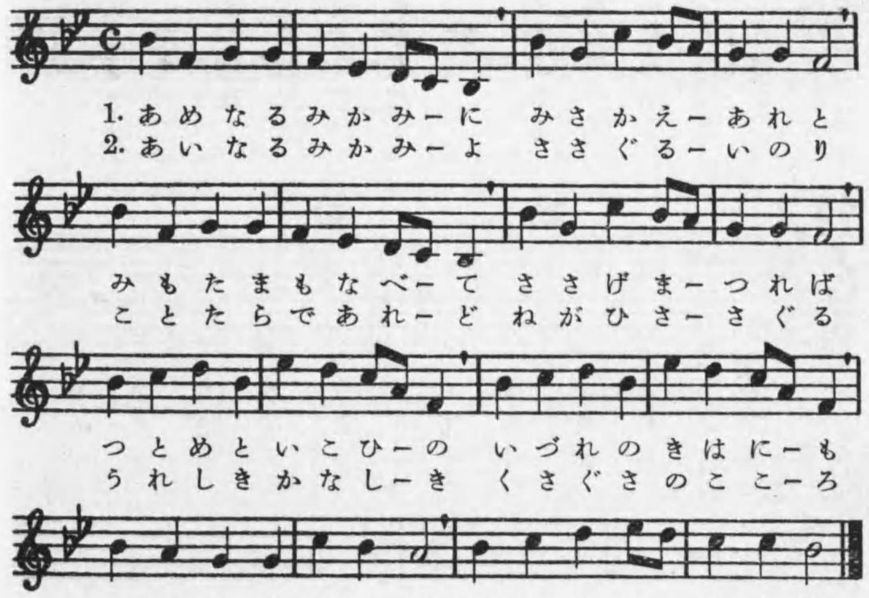
1. みもたまもも　主にささげ
2. よにあるもく　よをさるもで
3. あめにゆく　そのひまで

みこころに　ゆだねまつらん
こころへよ　こしきことみといい

一
身もたまも
主にささげ
みこころに
委ねまつらん

二
世にあるも
世をさるも
とこしへに
御手に賴らん

三
あめにゆく
その日まで
いときよく
まもらせたまへ

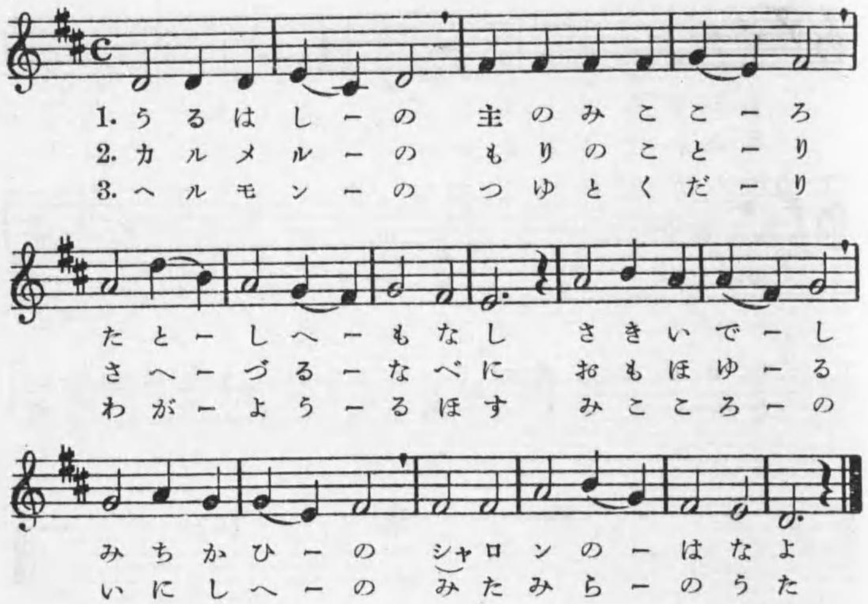


一

あめなるみ神に　み榮えあれと
身も靈もなべて　捧げまつれば
務めと憩ひの　何れの際にも
みむねをひたに　畏みてあらん)

二

愛なるみかみよ　ささぐる祈り
言足らであれど　ねがひ捧ぐる
嬉しき悲しき　くさぐさの心
しのびあはれみ　聞し召しませ



一

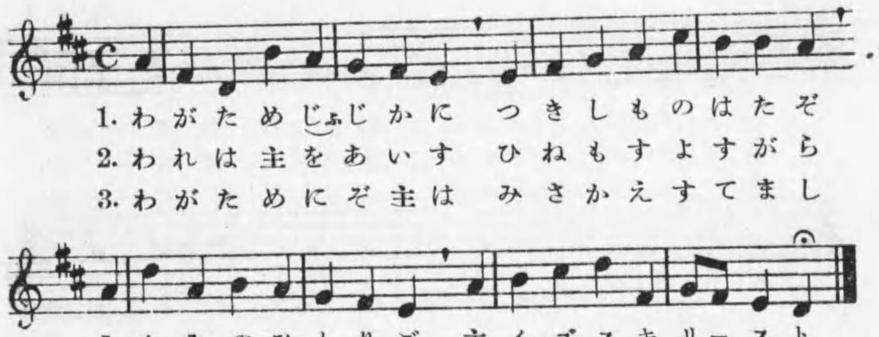
うるはしの　主のみこころ
例しへもなし　咲きいでし
みちかひの　シャロンの花よ

二

カルメルの　森の小とり
轉づるなべに　思ほゆる
いにしへの　み民らのうた

三

ヘルモンの　露とくだり
我世うるほす　みこころの
あいのみづ　さやに冴けし



一　わが爲十字架に　つきしものは誰ぞ
　　み神のひとり子　主イエズスキリスト

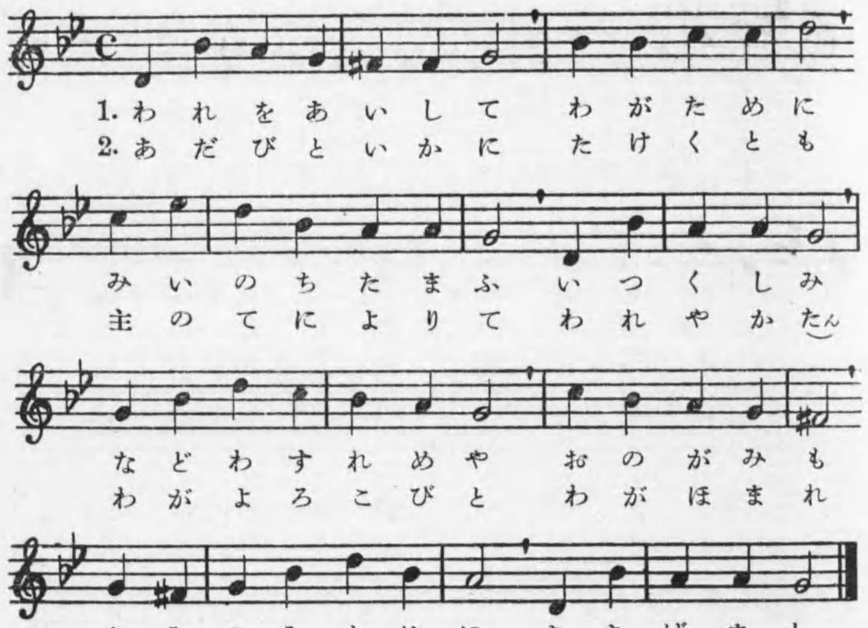
二　われは主を愛す　ひねもすよすがら
　　忘るる間もなく　われは主を愛す

三　わが爲にぞ主は　み榮え棄てまし
　　なやみ苦しみて　息絶えたまへる

四　ふかきその愛に　天をも陰府をも
　　忘れてひたぶる　きみをのみ慕ふ

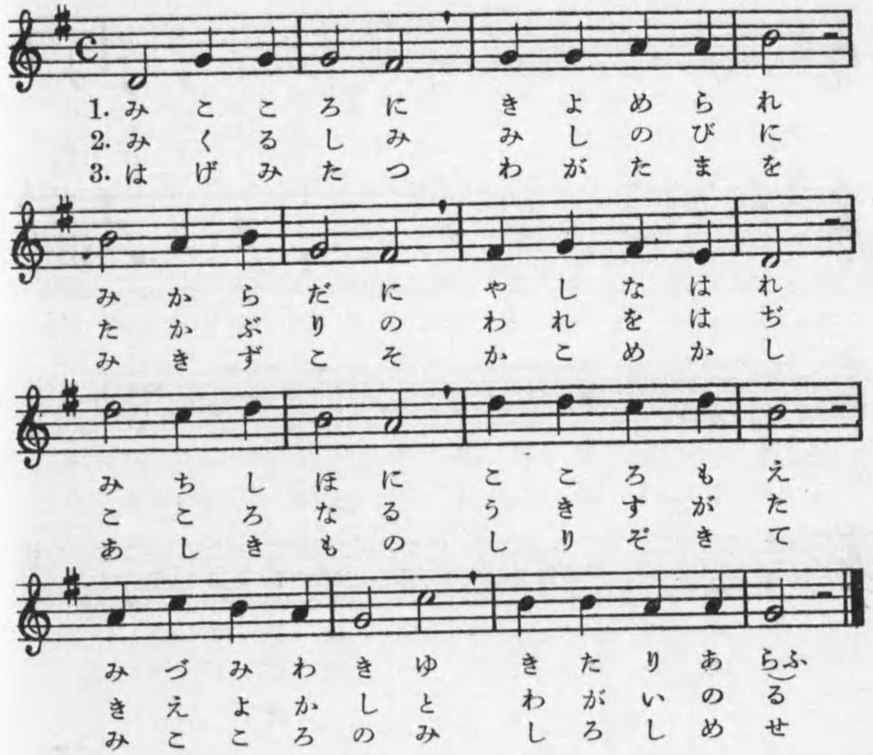
五　わが主わが神よ　我とはに愛せん
　　量り知らぬ主の　み愛にこたへて

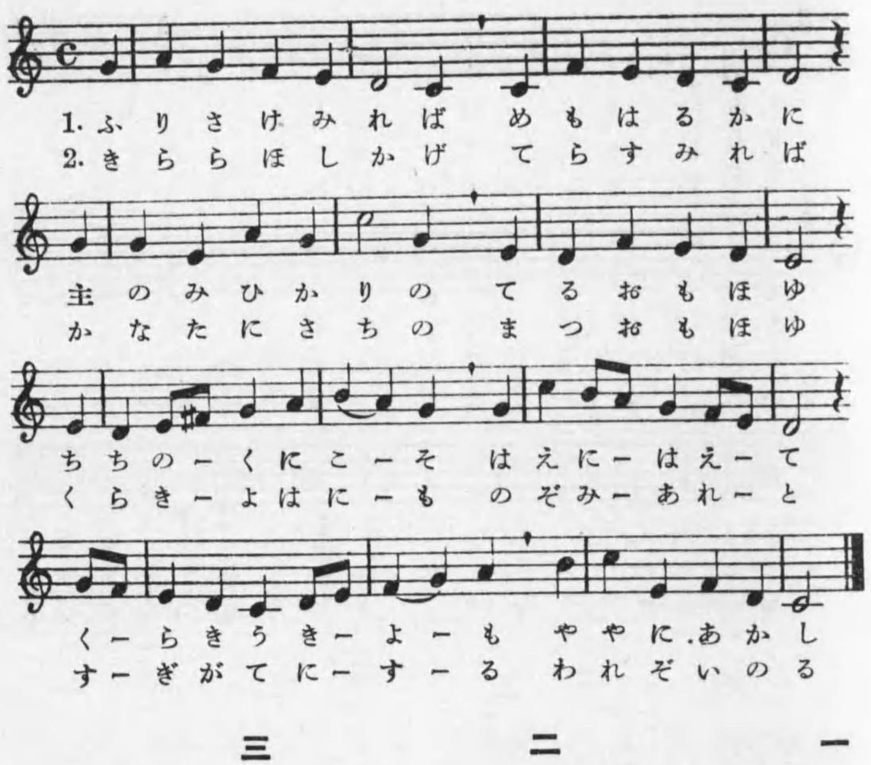
（聖フランシスコ、ザベリオの言葉より）



一　われを愛して　わがために
　　みいのちたまふ　いつくしみ
　　などわすれめや　おのが身も
　　神のみために　ささげまし

二　仇人いかに　たけくとも
　　主の手によりて　我や勝たん
　　わがよろこびと　わがほまれ
　　あめつち統らす　主にぞある





一

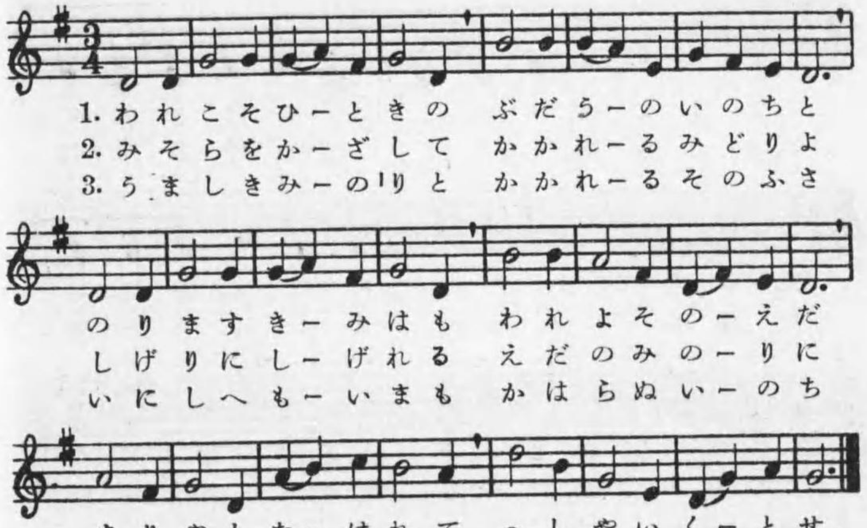
振放け見れば　眼もはるかに
主のみ光りの　照る思ほゆ
父の國こそ　映えにはえて
くらき憂世も　ややに明し

二

きらら星かげ　てらす見れば
かなたに幸の　待つ思ほゆ
暗き夜中にも　のぞみあれと
過難てにする　われぞいのる

三

うれひの狭霧　晴れてや見る
救ひの御子の　愛のみかほ
寂しむわれを　待ちたまひて
そなへし國に　君やむかへん

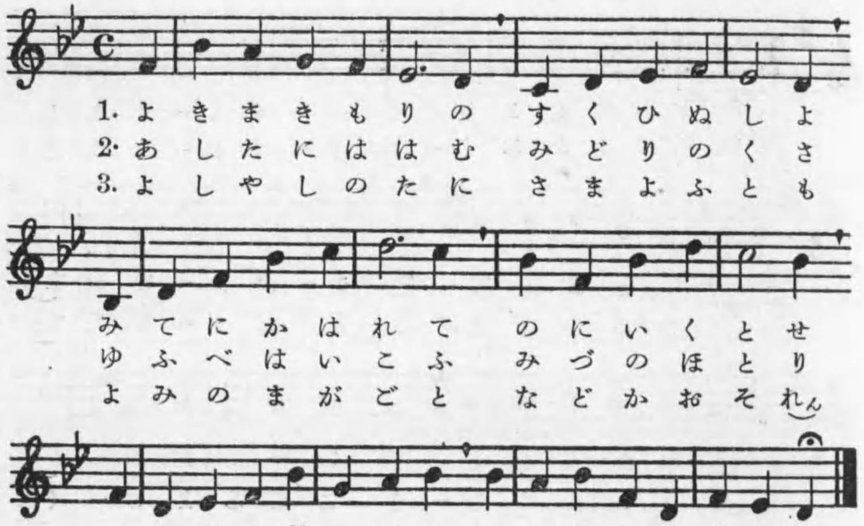


一
我こそひと樹の葡萄のいのちと
宣ります君はも われよその枝
在り養なはれて 經しやいくとせ

二
み空をかざして 懸れるみどりよ
しげりに繁れる えだのみのりに
こころゆく限り 神や愛でます

三
美しき結實と かかれるその房
いにしへも今も かはらぬいのち
み神にむすびて 世の飢いやす

四
さあれ聖心を 枝のはなれせば
生命もかれ木の 悲しくをあらん
主よわが靈をば 切りな放ちそ



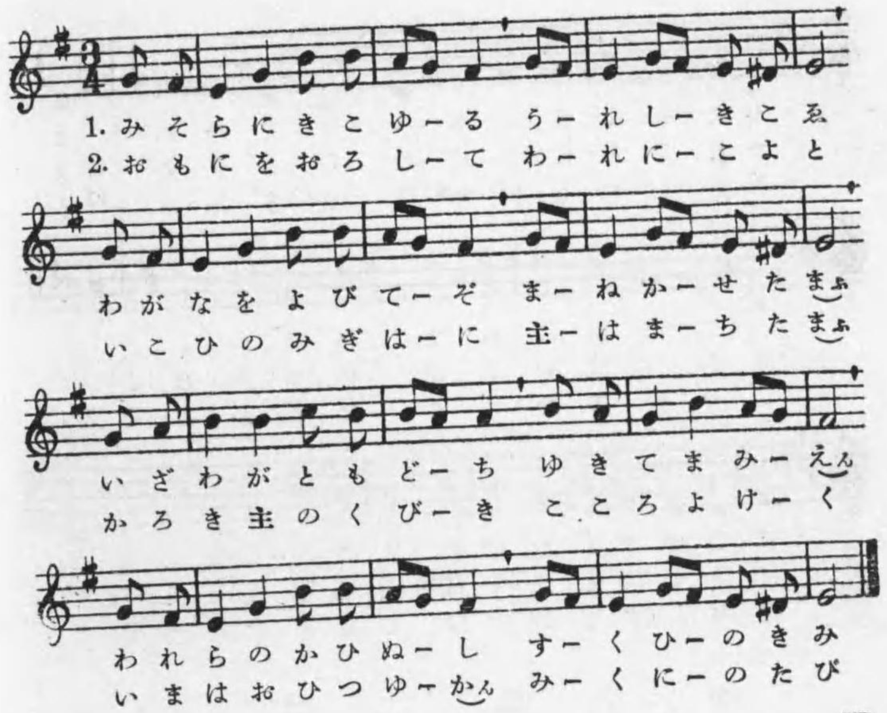
一
よき牧守の すくひぬしよ
御手に飼はれて 野にいくとせ
微風涼風に 心しなぐさむ

二
あしたには食む みどりのくさ
ゆふべは憩ふ みづのほとり
主共にし在せば 乏しきを知らず

三
よしや死の谷 さまよふとも
陰府のまがごと などかおそれん
君し守りせば 答またうれし

四
めぐみの膏油 額にながれ
わがさかづきは あふれあふる
我やとこしへに 主の宮に住はん

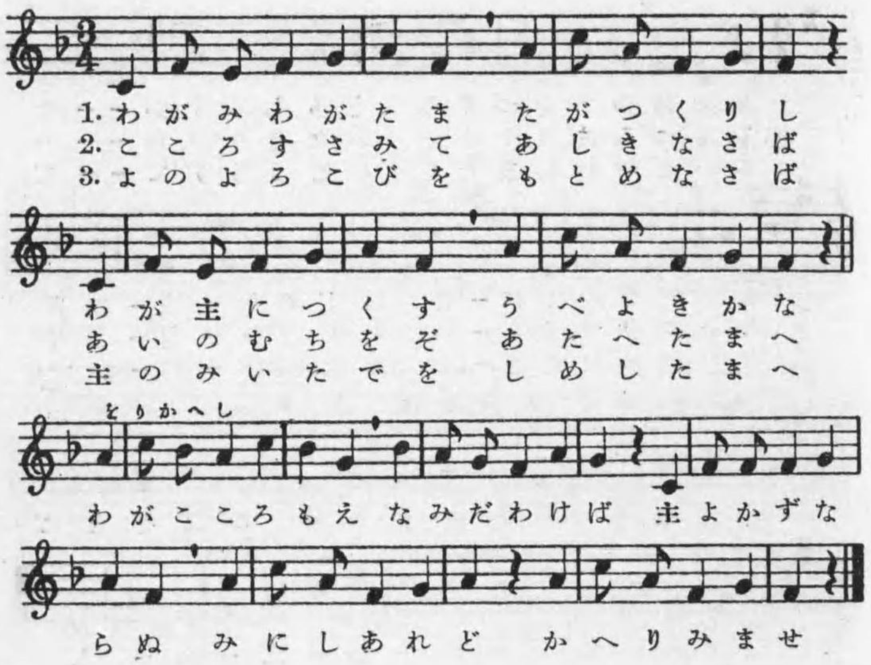
126 信　　頼



一　みそらに聞ゆる　うれしきこゑ
　　我名を呼びてぞ　招かせたまふ
　　いざわが友どち　ゆきて見えん
　　われらの牧者　すくひのきみ

二　重荷をおろして　われに來よと
　　いこひの水際に　主は待たまふ
　　かろき主の軛　こころよけく
　　今は負つ行かん　みくにのたび

127 熱　　心



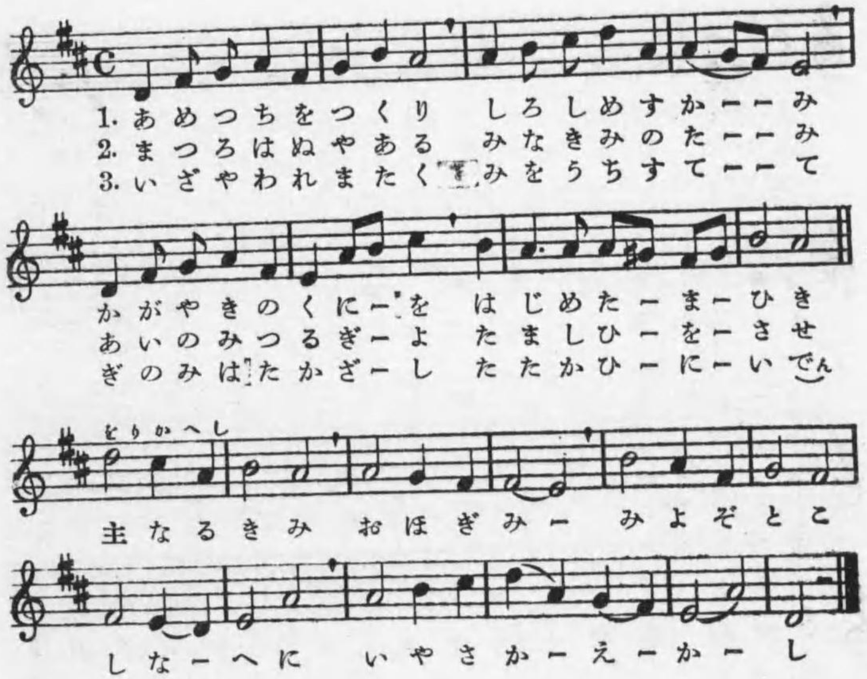
一　わが身わがたま　誰がつくりし
　　わが主につくす　うべ善きかな
　　(をりかへし)
　　我がこころ燃え　なみだ湧けば
　　主よ數ならぬ　身にしあれど
　　かへりみませ

二　こころすさみて　悪しきなさば
　　あいの鞭をぞ　あたへたまへ

三　世のよろこびを　もとめなさば
　　主の御痛手を　しめしたまへ

四　ひとのよわきを　かなしみせば
　　主よ汝が贖ひ　しめしたまへ

五　むくいもとめず　善きをなして
　　主のみさかえを　仰ぎゆかなん



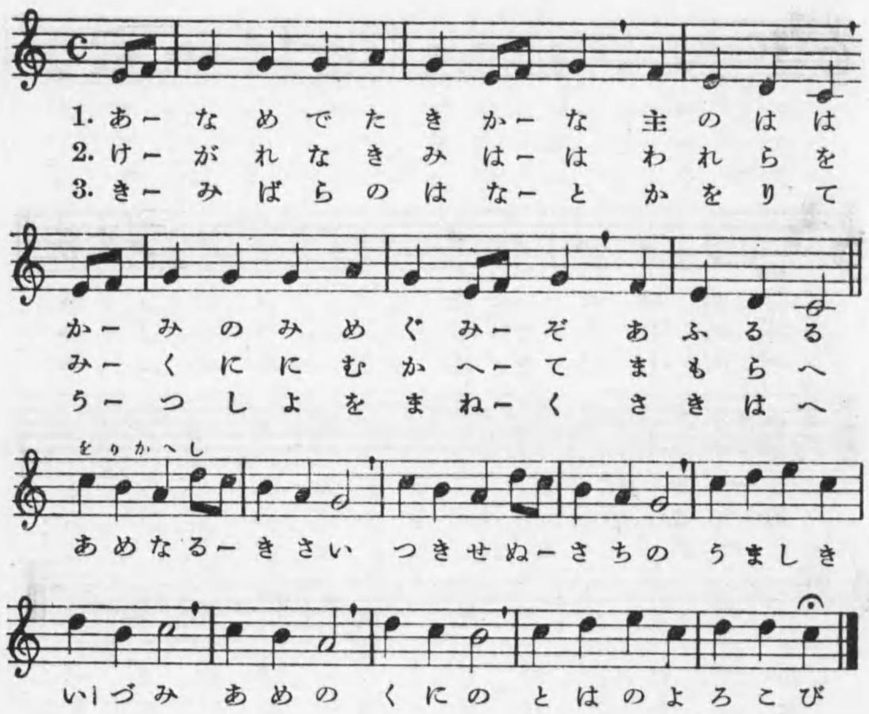
一 あめつちを造り 知ろしめす神
かがやきの國を 肇めたまひき

（をりかへし）
主なる君 大君
御代ぞ永遠に いや榮えかし

二 服はぬやある みな君の民
愛のみつるぎよ 靈魂を刺せ

三 いざやわれ全く 身を打棄てて
義の御旗かざし 戰ひに出でん

四 聖靈のみつるぎ 友よ執り持て
み手に麾かせよ 仇のことごと



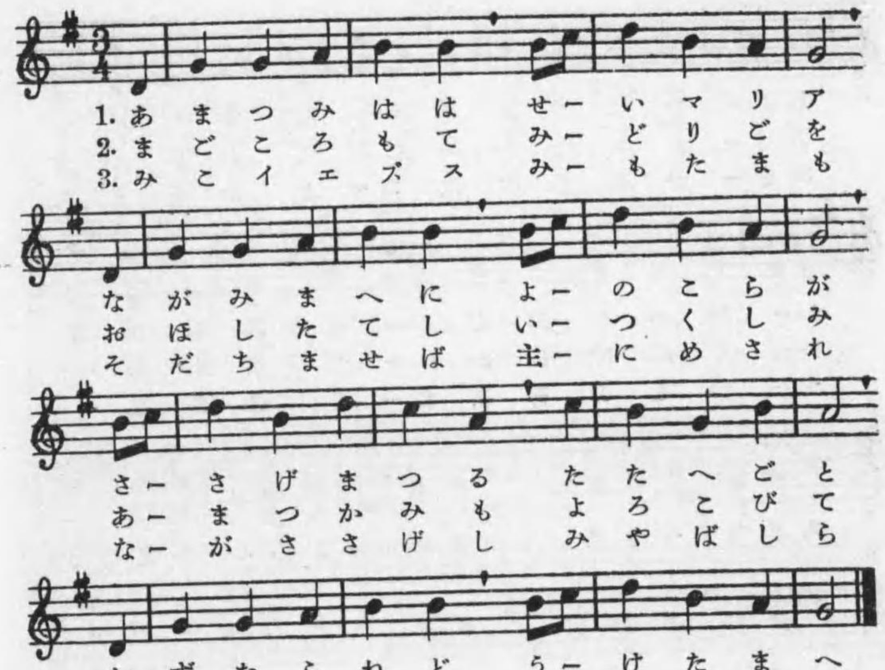
一 あな慶たきかな 主の聖母
神のみめぐみぞ あふるる

（をりかへし）
あめなる后 つきせぬ幸の
美しき泉 天の 聖國の
常の喜こび

二 けがれなき聖母 われらを
み國にむかへて まもらへ

三 きみ薔薇の花と かをりて
現し世を數多く さきはへ

四 嬉しき御名をば したひて
かがやくみ榮え 稱へなん

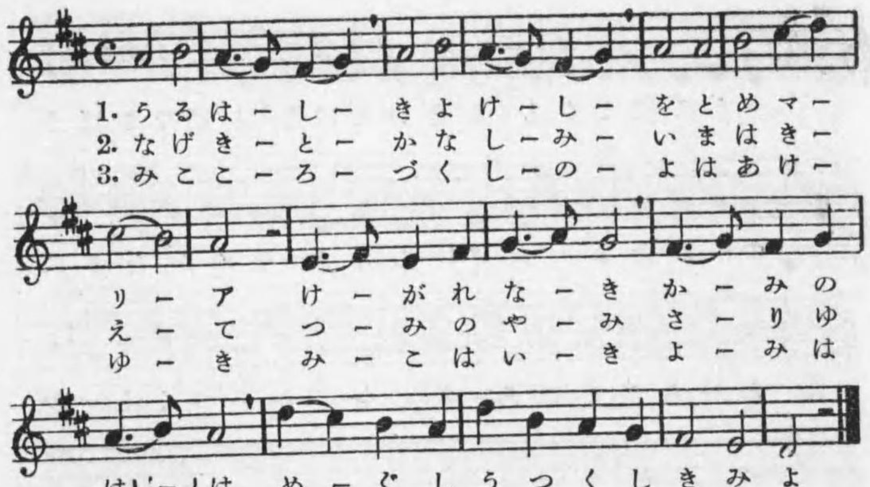


一　あまつみはは　聖マリア　世の子等が　たたへ言　うけたまへ

二　汝がみまへに　ささげまつる　かずならねど　まごころもて　養育し立てし　あまつかみも　たふとき名を　みどり兒を　いつくしみ　よろこびて　たまひけり

三　御子イエズス　そだちませば　汝がささげし　いまものちも　身も靈も　主に召され　宮柱　さかえゆく

四　わが身と靈　きみにならひ　神のみむね　あまつくにに　いまささげ　いやふかく　おこなひて　昇りゆかん

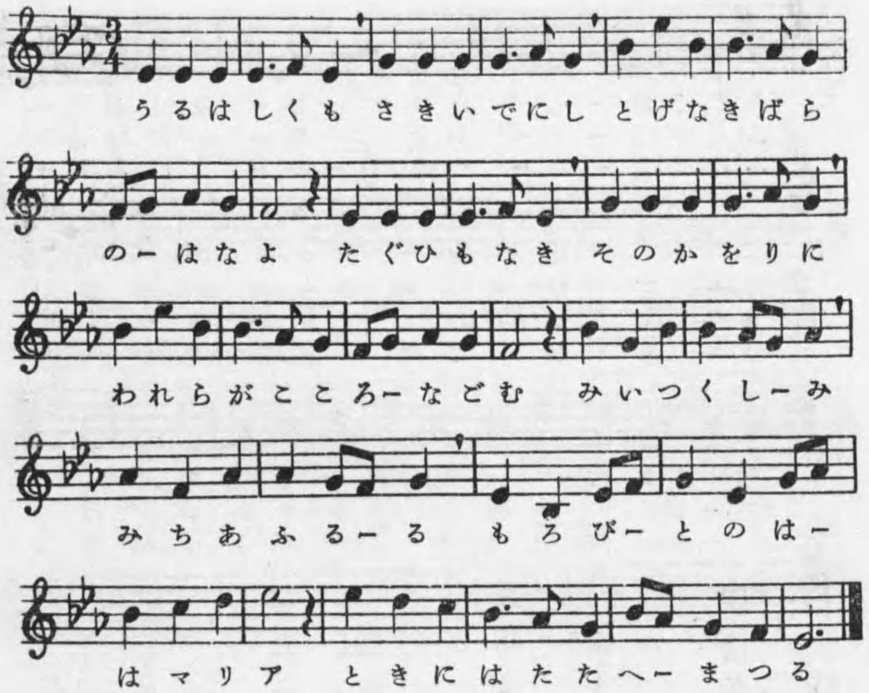


一　うるはしきよけしをとめマリア　けがれなき神のはは愛し美し君よ

二　なげきとかなしみいまは消えて　罪のやみ去りゆけば永久の光輝く

三　みこころ盡くしの夜は明けゆき　御子は活き陰府は失せ面影美し聖母

四　なぐさめたのしみ充ちあふれよ　主の聖母執り成せば神の惠み繁し

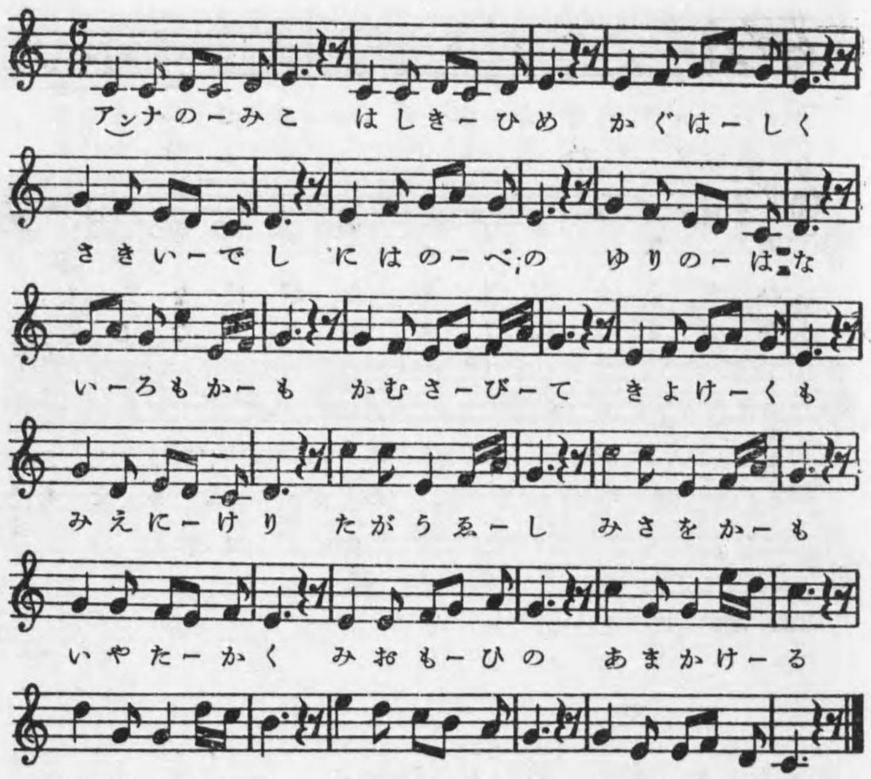


一

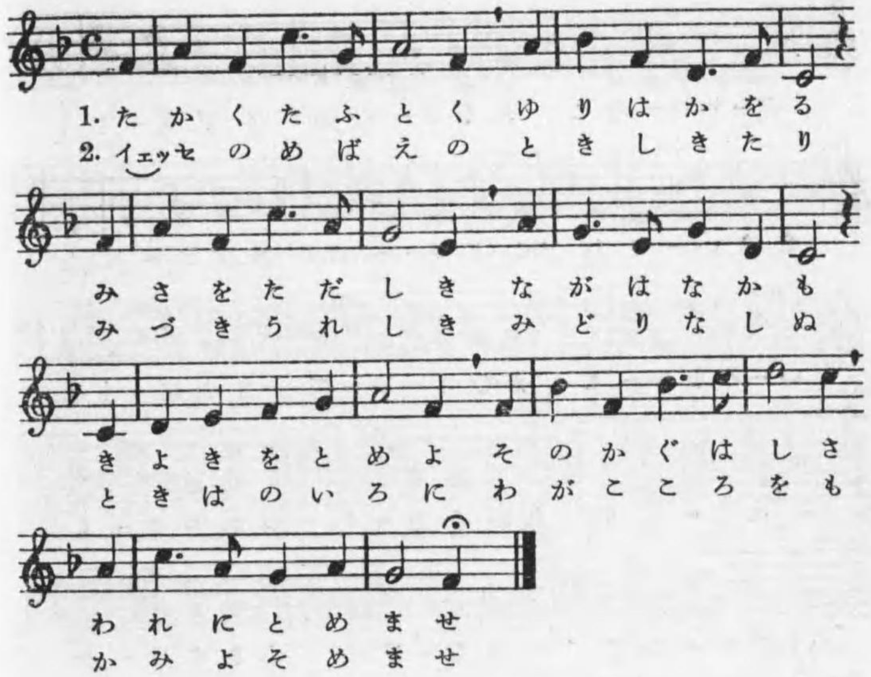
うるはしくも　咲きいでにし
とげなき薔薇のはなよ
たぐひもなき　そのかをりに
われらがこころ和む
みいつくしみ　みちあふるる
もろびとのははマリア
ときはにたたへまつる

二

みちのほとり　みどりさはに
かざせるそのときは木
あへぎあへぐ　わがたび路の
やすらひのすずかげよ
みははマリア　汝がまもりに
憂さ晴れこころいさみ
ふるさと指してぞゆく



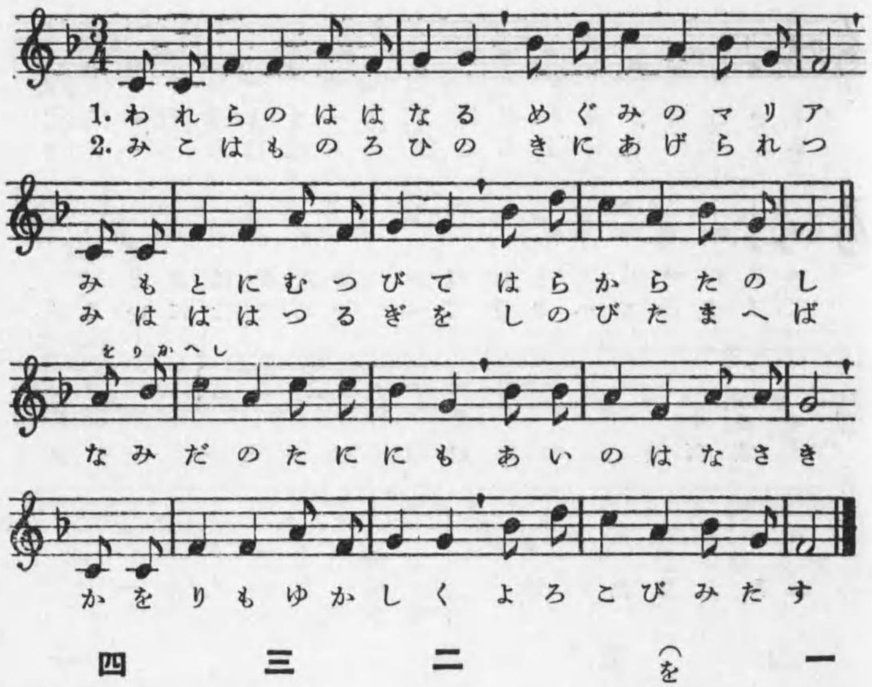
アンナの御子　はしき姫
かぐはしく　咲きいでし
庭のべの　百合のはな
色も香も　神さびて
きよけくも　見えにけり
誰が植ゑし　みさをかも
いやたかく　みおもひの
あま翔ける　あまをとめ
神の　母　たたへまし



一
たかくたふとく　百合はかをる
みさをただしき　汝が花かも
きよきをとめよ　その芳はしさ
われに留めませ

二
イエッセの芽生の　時し來たり
稚木うれしき　みどりなしぬ
ときはの色に　わが心をも
神よ染めませ

三
御子を呪ひの　木におくりつ
おのがみむねに　やいば受けし
みははのしのび　わが心にも
主よ印しませ



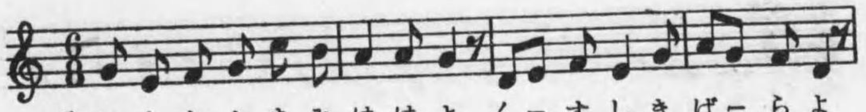
一
われらの母なる　めぐみのマリア
み許にむつびて　はらからたのし

（をりかへし）
なみだの谷にも　愛のはな咲き
香りもゆかしく　よろこび充たす

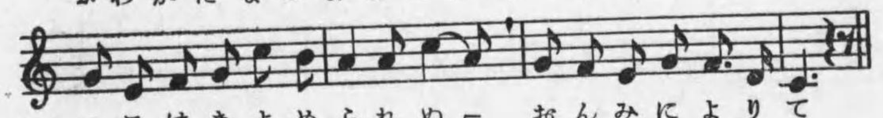
二
御子はも呪ひの　木にあげられつ
み母はつるぎを　しのびたまへば

三
かなしき憂世の　悪しきはさりて
かちうた祝ぎ歌　間なくひまなし

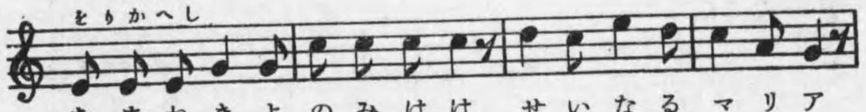
四
めでたしみ惠み　みち滿てる母
いまはの際にも　いのりぞ賜はん



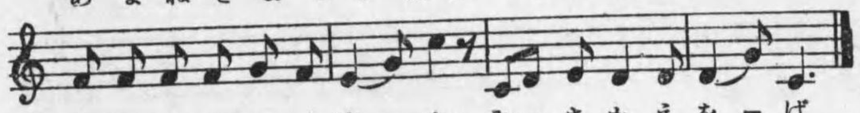
1. いとたかきみははよ　くーすしきばーらよ
2. わがたまのよろこび　みーははマリーアよ



エワはきよめられぬー　おんみによりて
よはよみがへりきてー　みこのなにいる



あまねきよのみはは　せいなるマリア



われらたたへゆーかん　みーさかえをーば

一

いとたかき聖母よ　くすしき薔薇よ
エワは淨められぬ　御身によりて

（をりかへし）

あまねき世の聖母　聖なるマリア
われら稱へゆかん　みさかえをば

二

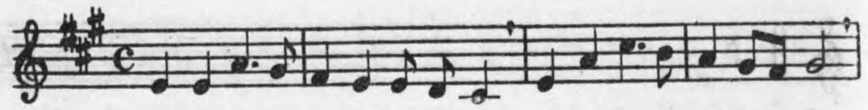
わが靈のよろこび　みははマリアよ
世は甦へり來て　御子の名に入る

三

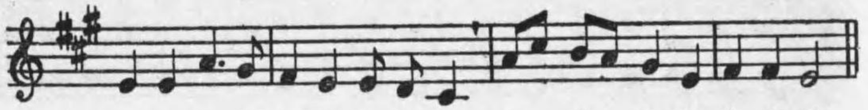
たぐひなく慶たき　神のみははよ
女の名はたかみ　きみに倚り來ぬ

四

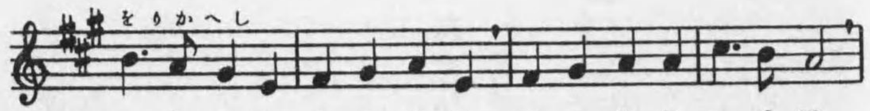
天路のわがたすけ　きよきマリアよ
われらの祈りをば　執り成したまへ



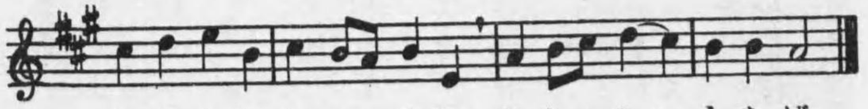
1. いとたかきみははよ　くすしきばらーよ
2. わがたまのよろこび　みははマリアーよ
3. たぐひなくめでたき　かみのみはは－よ
4. あまぢのわがたすけ　きよきマリアーよ



エワはきよめられぬ　おーんーみによりて
よはよみがへりきて　みーこーのなにいる
をみなのなはたかみ　きーみーによりきぬ
われらのいのりをば　とーりーなしたまへ



あまねきよのはは　せいなるマリア

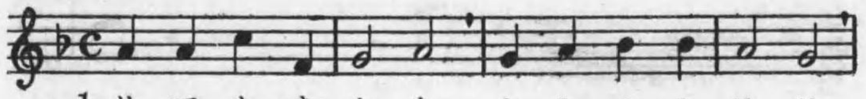


われらたたへーゆかん　みさーかーえをば

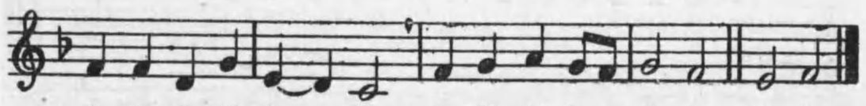
歌詞は前頁と同じ

（但しをりかへしの最初の一句のみ相違）

137 聖母（アヴェマリステラ）



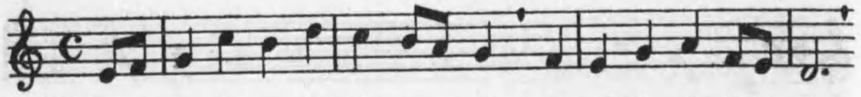
1. めでたきかな　かみのみはは
2. ガブリエルの　みつげにより
3. つみのかせは　うちくだかれ
4. たぐひもなき　へいわのみち



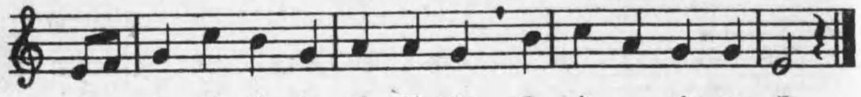
うみのほしーよ　かがやきーませ　アメン
エワはアヴェーと　さきははーれぬ
やみはきえーて　ひかりいーでぬ
かをりさかーえ　こころなーどむ

一　めでたきかな　かみのみはは
　うみのほしよ　かがやきませ
二　ガブリエルの　み告げにより
　エワはアヴェと　さきははれぬ
三　つみのかせは　うちくだかれ
　やみは消えて　ひかり出でぬ
四　たぐひもなき　平和のみち
　かをりさかえ　こころなごむ
五　きよきあゆみ　のこししきみ
　み子をいまも　しめしたまへ
六　ちち子みたま　みさかえあれ
　みははともに　われら歌はん
　アメン

138 聖母

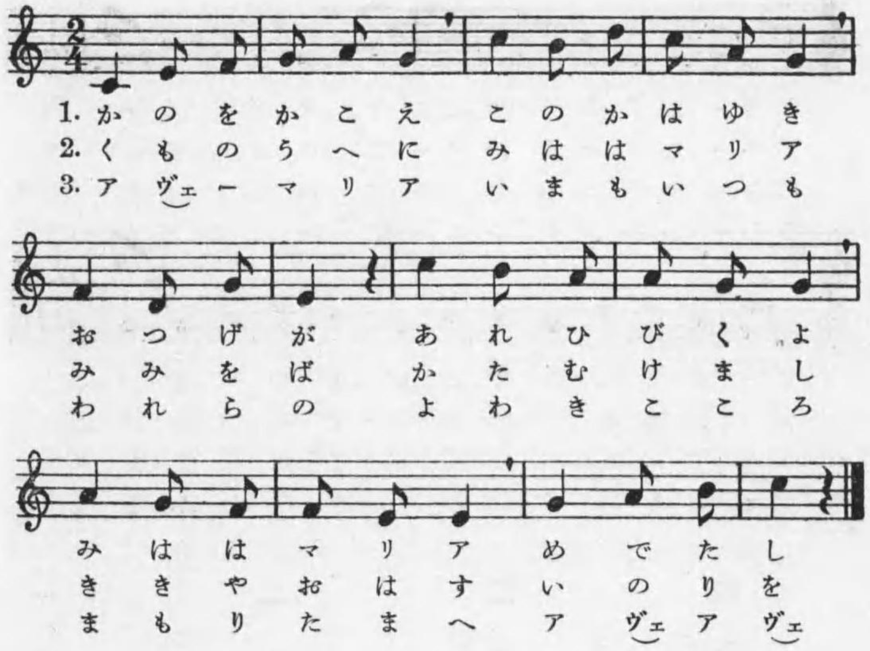


1. さーさぐるうたこーそ　まづしくあーれ
2. みーここそきたりーて　サタンをうーち
3. みーかどはひらけーて　みくにきたーり
4. みーかみのみのりーに　みははとなーり



こーころはみははにそなへまつる
かーしらをくだきてすくひとげぬ
うーせにしみめぐみまたもえたり
みーこをはぐくみしきみたふとし

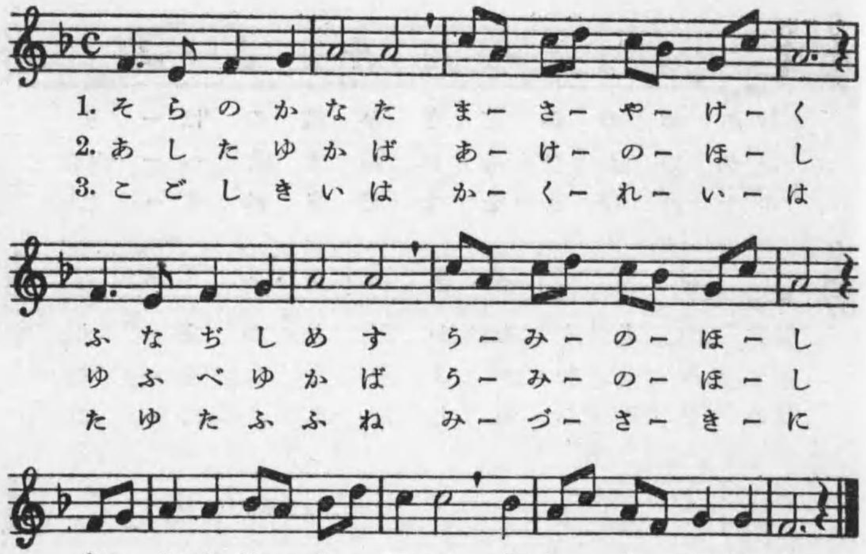
一　ささぐる歌こそ　まづしくあれ
　こころはみ母に　そなへまつる
二　み子こそ來りて　サタンを打ち
　かしらを碎きて　すくひ遂げぬ
三　み門はひらけて　みくに來たり
　失せにしみ惠み　またも得たり
四　み神の御宣に　みははとなり
　み子を育くみし　きみたふとし



一
彼の丘こえ　この川ゆき
お告げが　あれひびくよ
「聖母マリア　めでたし」

二
雲のうへに　みははマリア
耳を　ば　かたむけまし
ききやおはす　いのりを

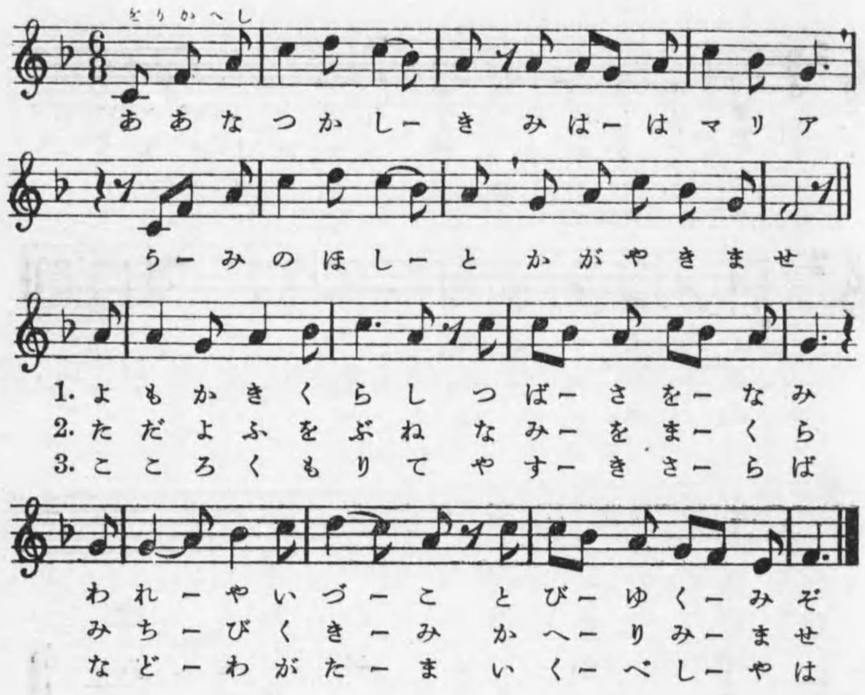
三
アヴェマリア　いまもいつも
われらの　よわきこころ
まもりたまへ　アヴェアヴェ



一
そらのかなた　まさやけく
ふな路しめす　うみのほし
波をけたてて　我等はゆく

二
あしたゆかば　あけのほし
ゆふべゆかば　うみのほし
漕ぐ濁り江の　道もなほし

三
峻しき　岩　かくれ　礁
たゆたふ舟　みづさきに
波にうつらふ　のぞみの星



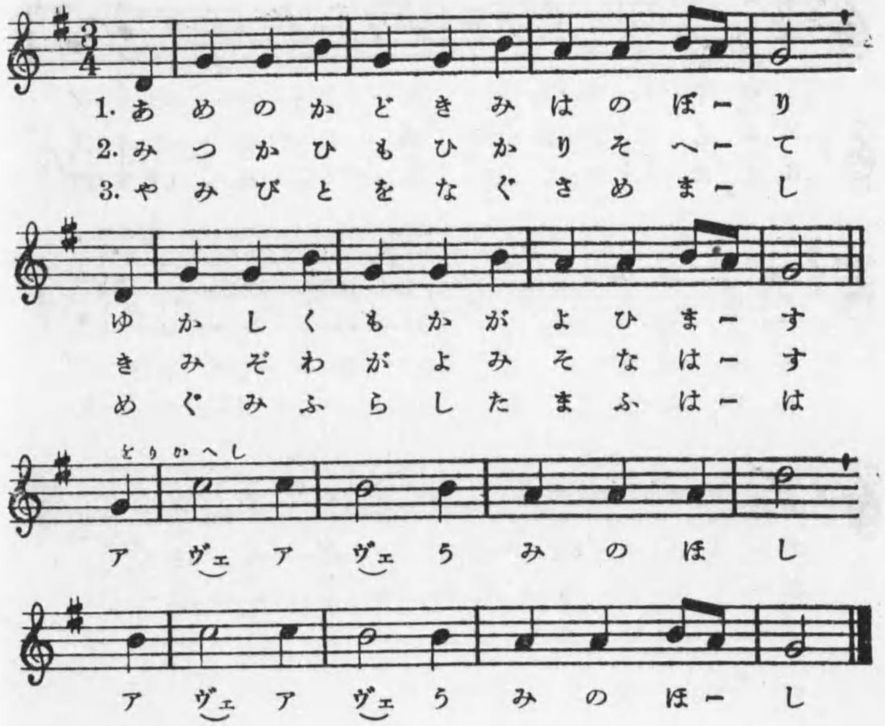
（をりかへし）
ああ懐かしき　みははマリア
うみのほしと　かがやきませ

一
四面かき暗し　つばさを無み
われやいづこ　とびゆく身ぞ

二
ただよふ小舟　なみをまくら
みちびくきみ　かへりみませ

三
こころ曇りて　やすき去らば
など我がたま　生くべしやは

四
やよ浮き雲よ　こころあらば
わがふな路に　君な隱くし



一
天の門きみはのぼり
ゆかしくも耀よひます

（をりかへし）
アヴェ）アヴェ）海の星
アヴェ）アヴェ）海のほし

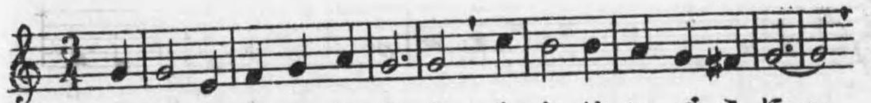
二
み使ひも光り添へて
君ぞ我が世みそなはす

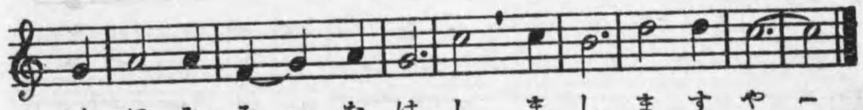
三
病人をなぐさめまし
めぐみ零らしたまふ母

四
罪人を主にかへらせ
かなしむを勞りたまふ）

五
きよき御姿したはし
早も御手に歸りゆかん）

六
波路くらく寂しきを
のぞみの星照らしませ



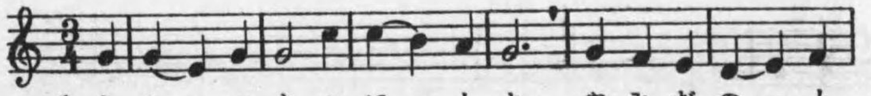


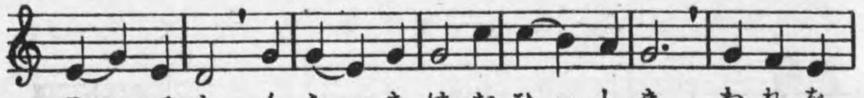
一 なつかしのははよ 汝はいづこに
國みそなはし ましますや

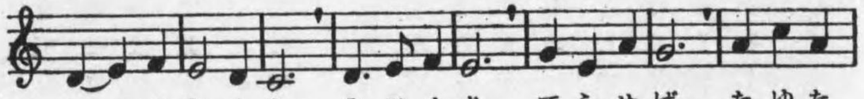
二 さみしきやまかげ 荒れにし里を
のぞみの子等は 驅けるかも

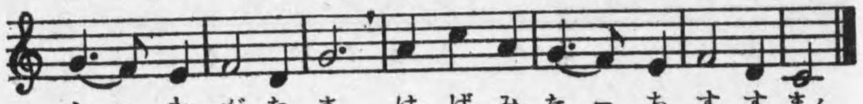
三 夜はいとどふかみ 路はるかなり
浮みいで來ぬ

四 あけぼのに富士は
あかつきのほし いでたまへ
みはは マリアよ 祝しませ





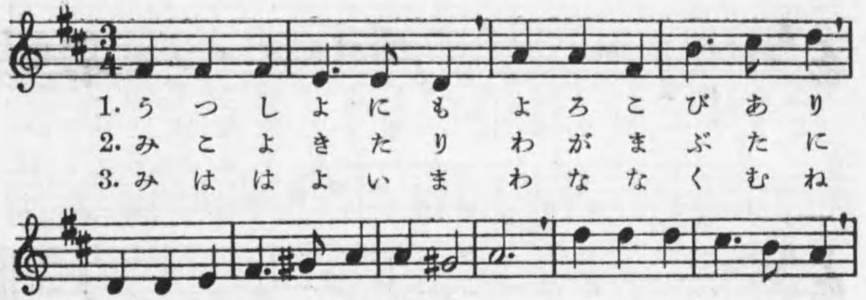




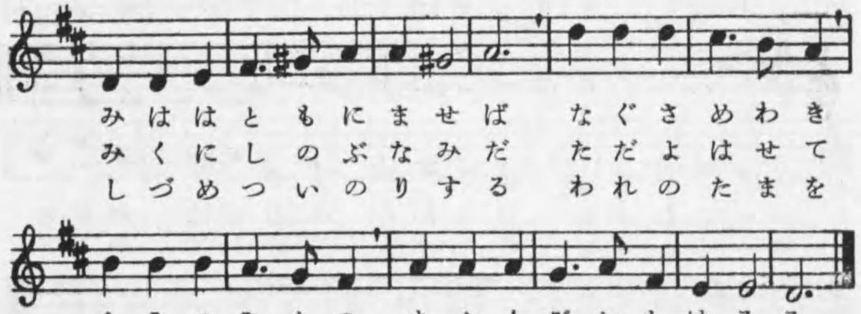
一 あかつきの星よ 闇路のしるべよ
暗きは追ひしき われを圍むとも
み光り照せば たゆたふわが靈
勵みたち進まん)

二 されば わが母よ み手に倚る我は
この世の夕影 しづみゆく時も
み助け 賴みて 御國のみすがた
偲びつつ進まん)

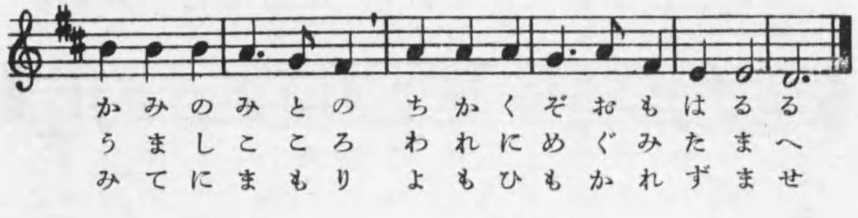
三 世の旅終らば きみの祈りにて
こころの空はれ 涙もあとなく
み國の門べに 入りて樂しけく
主に見え奉らん)



1. うつしよにも　よろこびあり
2. みこよきたり　わがまぶたに
3. みははよいま　わななくむね



みははともにませば　なぐさめわき
みくにしのぶなみだ　ただよはせて
しづめついのりする　われのたまを

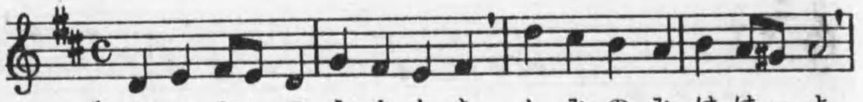


かみのみとの　ちかくぞおもはるる
うましこころ　われにめぐみたまへ
みてにまもり　よもひもかれずませ

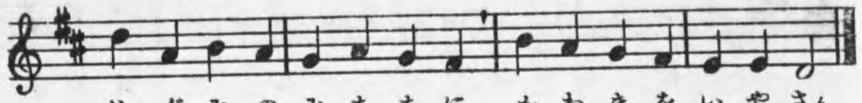
一　うつし世にも　よろこびあり
聖母共に在せば　なぐさめ湧き
神の御殿　近くぞおもはるる

二　御子よ來たり　わがまぶたに
みくにしのぶ涙　ただよはせて
うましこころ　われに惠みたまへ

三　み母よいま　わななくむね
沈めつ祈りする　われのたまを
み手にまもり　夜も日も離ずませ



1. おマリーアうましき　かみのみははーよ
2. われらーぞゆかしき　ながふところーに
3. まがさーちさだめの　いかにありとーも



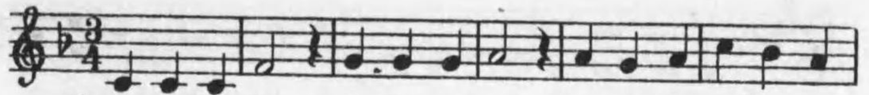
めぐみのみちちに　かわきをいやさん
いこひやすらひて　なぐさめえまし
もりますひとみに　こころたのめる

一　おマリア美しき　神のみははよ
めぐみの御乳に　渇きをいやさん

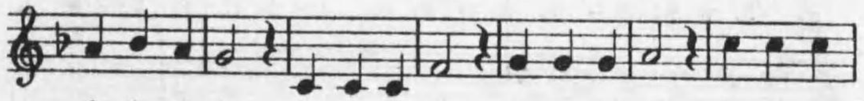
二　われらぞゆかしき　汝がふところに
いこひやすらひて　なぐさめ得まし

三　まがさちさだめの　如何にありとも
守りますひとみに　こころたのめる

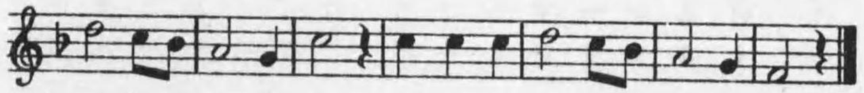
四　あめのみかどなり　御きさいなり
われらのははなり　あがめ奉らん



1. あめなる　きさいの　みは　はマリア
2. みつかひ　こぞりて　きよきみなを



したはし　ちにては　くるしみ　あめに
たたへつ　あさなに　ゆふなに　みうた



てはーさかゆ　ゆかしよそーのみな
をさーさげて　みそばよはーなれず

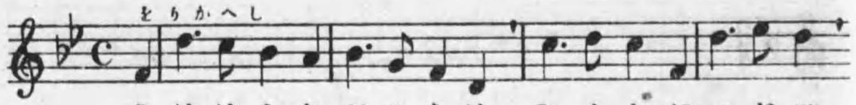
五　あめなる　きさいの　聖母マリア慕はし
地にては　くるしみ　あめにてはさかゆ
ゆかしよその御名

四　みつかひ　こぞりて　聖きみ名を稱へつ
あさなに　ゆふなに　みうたをささげて
みそばよはなれず

三　なみだも　しぬぬに　み側戀る世の子等
まみゆる　日をのみ　よろこびしのびて
いや増すのぞみや

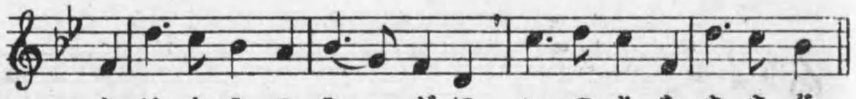
二　のぞみは　みそらの　曉の星とかがやき
日にけに　あふぎて　みははぞなつかし
みたすけ乞ひつつ

一　みははよ　汝が子は　涙の谷いぶせく
したひに　したひて　みたすけ乞ひ禱む
とりなしたまへや

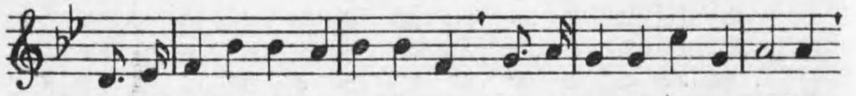


をりかへし

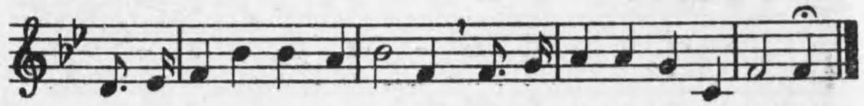
みははよながこらは　みもとにつどひ



あはれみのみーざに　いのりをささぐ



1. わがいのちたのしみ　たのみなるマリア
2. ここはなみだのたに　ながみなをよびて



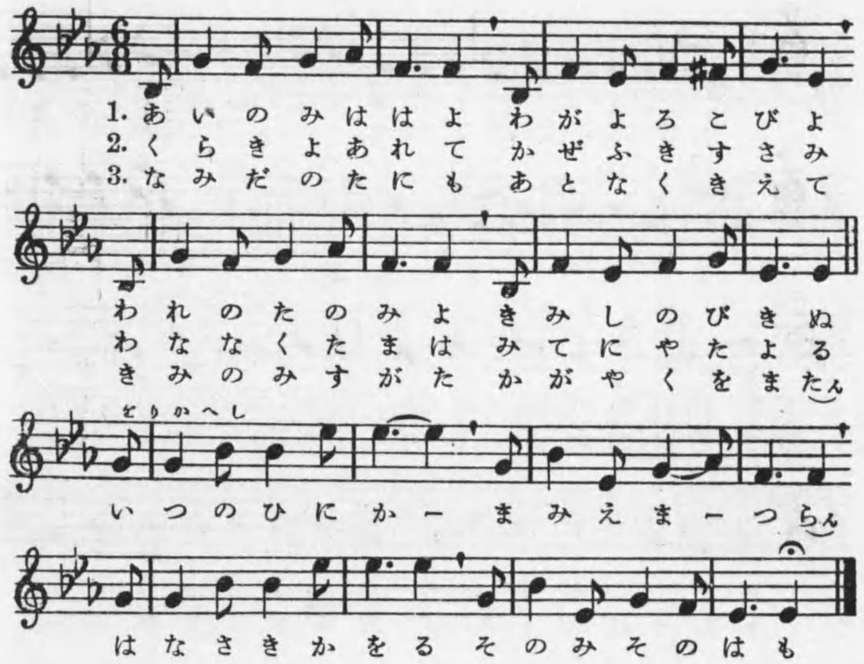
エワのこわれらのこゑをきこしめせ
みたすけのいのり　あふぎこひねがふ

（をりかへし）
聖母よ汝が子等は　みもとにつどひ
あはれみの御座に　いのりをささぐ

一　わが生命たのしみ　賴みなるマリア
エワの子われらの　聲をきこしめせ

二　ここはなみだの谷　汝が御名を呼て
みたすけのいのり　仰ぎこひねがふ

三　この流離の世を　終なんその日に
たふとき御子をば　しめさせ給へや
（サルヴエ　レヂナより）



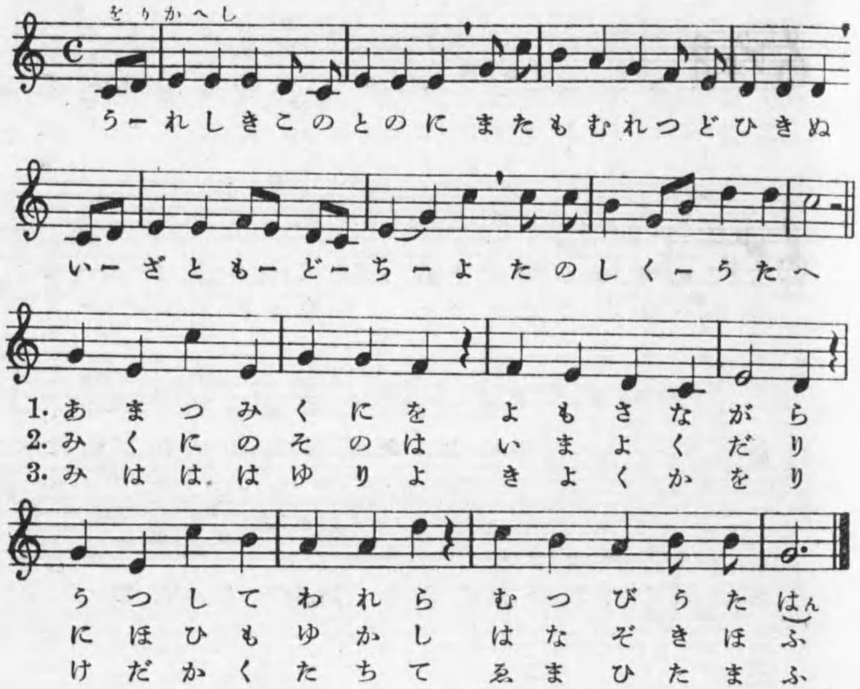
一　愛のみははよ　わが喜こびよ
　　われの賴みよ　君しのび來ぬ

（をりかへし）
　　いつの日にか　見えまつらん
　　花咲きかをる　その御苑はも

二　暗き夜あれて　風ふきすさみ
　　わななく靈は　み手にや賴る

三　なみだの谷も　跡なくきえて
　　君のみすがた　輝くを待たん

四　その日我身も　汚れとどめず
　　きみに比へむ　靈得てしがな



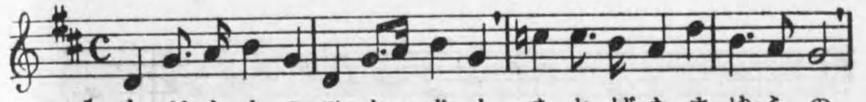
（をりかへし）
　　嬉しき此殿に　又も群集來ぬ
　　いざ友どちよ　樂しくうたへ

一　あまつ御國を　世もさながら
　　うつして我等　睦びうたはん

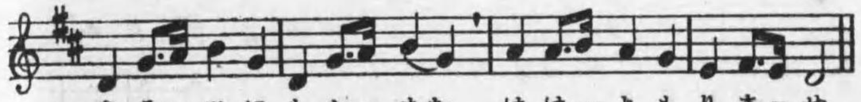
二　みくにの苑は　今よくだり
　　匂ひもゆかし　花ぞ競ふ

三　み母は白合よ　きよくかをり
　　氣高く立ちて　笑まひたまふ

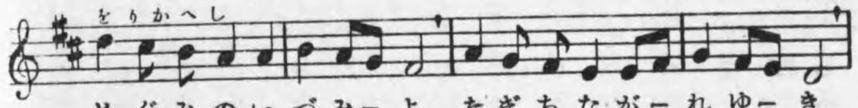
四　われらは小鳥　膝に群れて
　　樂しきうたを　捧げまつらん



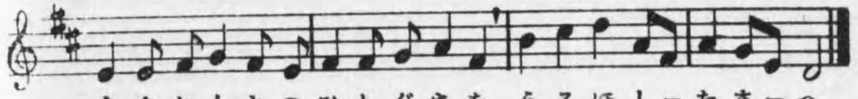
1. わがたまのひとーりし　をればたまゆらの
2. さにづらふきみーこそ　いませあまつくに



さそーひにもおーちむ　ははーよもりまーせ
わがーねぎごとーをー　ちちーにこふべーく



めぐみのいづみーよ　たぎちながーれゆーき



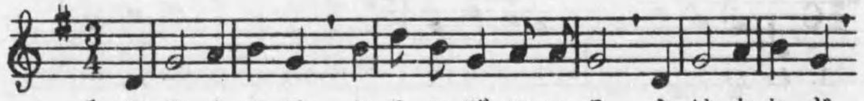
あまねくよのひとぐさを　うるほしーたまーへ

一　わが靈のひとりし　居れば玉響の
　さそひにも陷ちむ　母よ守りませ

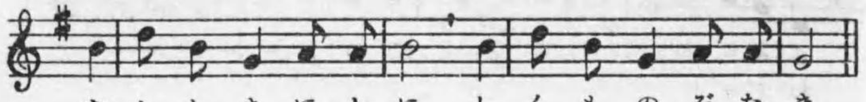
（をりかへし）
　めぐみのいづみよ　激ち流れゆき
　洽ねく世の人草を　うるほし給へ

二　さにづらふ君こそ　いませ天つ國
　わがねぎごとを　父に乞ふべく

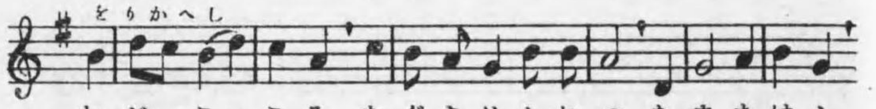
三　稚ければこころや　道に惑ひなむ
　みははよまもれ　愛のひとみに



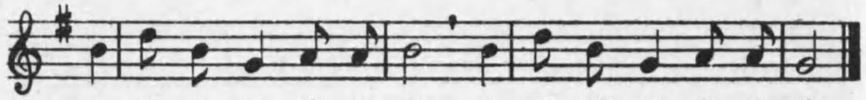
1. やまとには　よろこびのいろ　さはなれど
2. うきひとの　うきのうせまく　うきつるぎ
3. つみびとの　よりてかくらふ　そでなれや



あかときほしに　しくものぞなき
しのびいけりし　つよききみはも
やさしきみかげ　たまのきよけみ



わがーこーころ　なぐさめかねつ　たまちはふ



かみのたすけを　みははのりせま

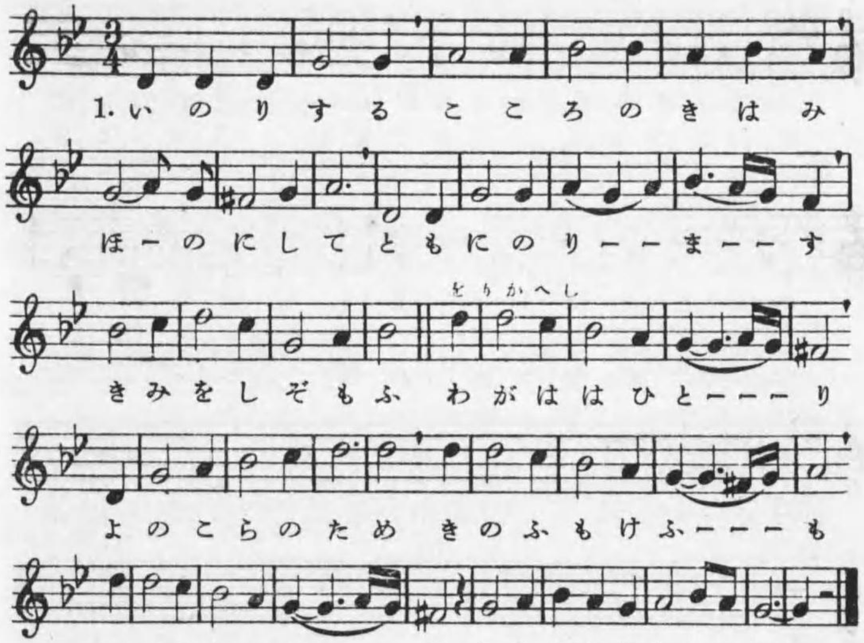
一　やまとには
　よろこびの兆　さはなれど
　あかとき星に　如ものぞなき

（をりかへし）
　わがこころ
　慰めかねつ　たま幸はふ
　神のたすけを　み母祈りませ

二　憂きひとの
　憂の失せまく　憂きつるぎ
　忍び生けりし　つよき君はも

三　つみびとの
　依りて隱らふ　袖なれや
　やさしき御蔭　靈のきよけみ

四　やみびとの
　藥師といゐる　御手なれや
　いためる傷を　仄に觸れませ

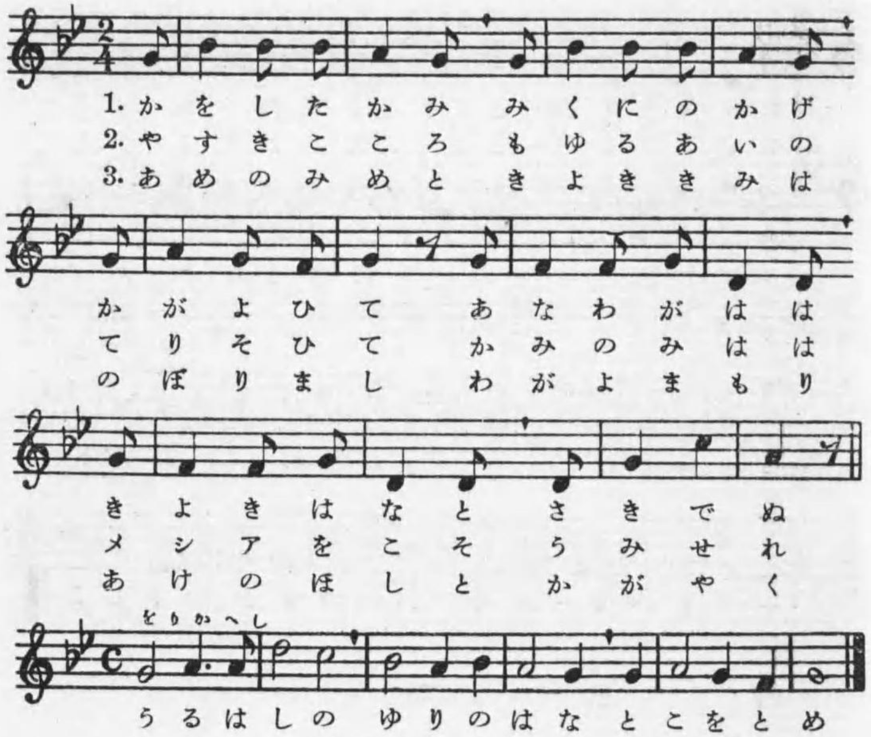


一
いのりする
こころのきはみ　仄にして
ともに禱ります　君をしぞ思ふ

（をりかへし）
わが母ひとり
世の子等のため　昨日も今日も
いのりしませり　靈幸くあれと

二
われからと
まよひ出でぬる　たまなれや
おほにしてのみ　天國おもへる

三
悔いに悔い
なげきになげく　こころはも
神にとりなせ　たらちねの母

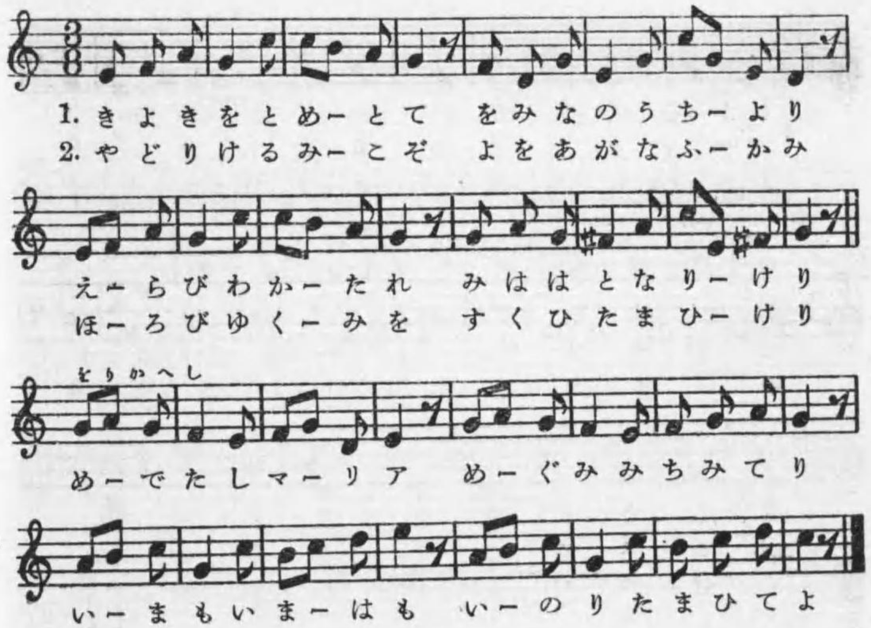


一
香をし高み　み國のかげ
かがよひて　あな我が母
きよき花と　咲き出ぬ

（をりかへし）
うるはしの　百合の花
とこをとめ

二
安きこころ　燃ゆる愛の
照りそひて　神のみはは
救主をこそ　產みせれ

三
あめの后と　きよき君は
のぼりまし　わが世守り
あけの星と　かがやく



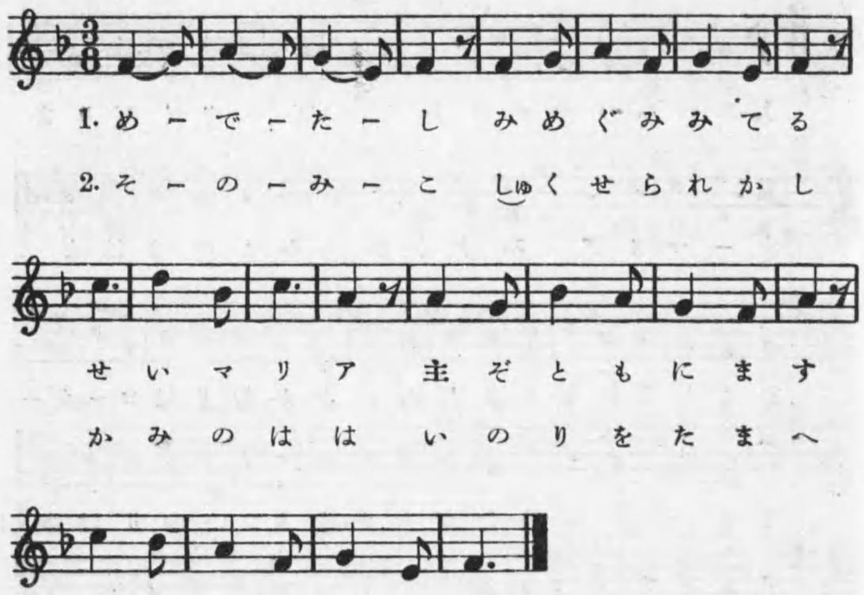
一 きよき處女とて をみなの中より
えらびわかたれ 聖母となりけり

（をりかへし）
めでたしマリア 惠み滿ちみてり
いまもいまはも いのり給ひてよ

二 孕りける御子ぞ 世をあがなふ神
ほろびゆく身を 救ひたまひけり

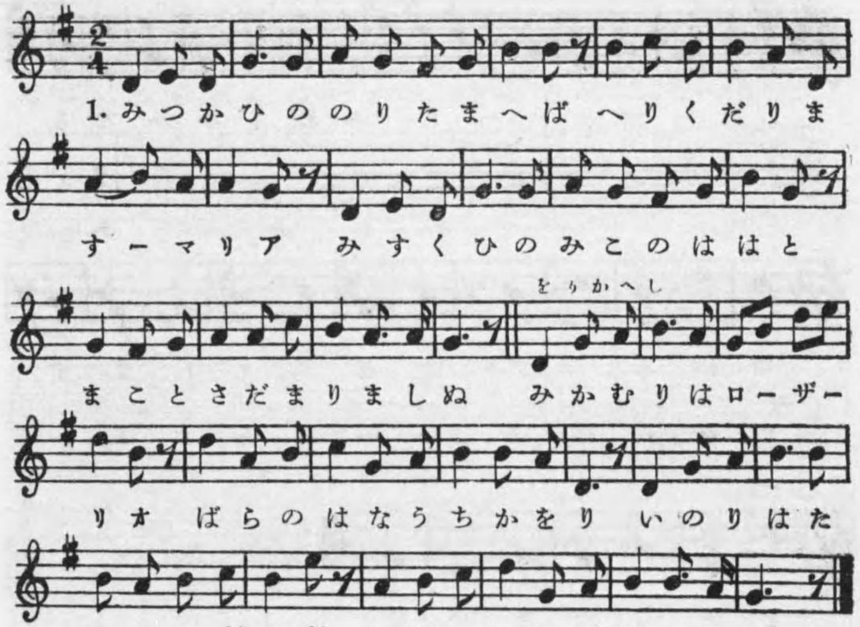
三 世の終りまでも み子とみ母こそ
神のみ名よぶ かはりなき方便

四 あかときに暮に 眞晝にうれしき
み告げのかねの いのりの一時



一 めでたし
み惠み充てる
聖マリア
主ぞ共にます
をみなの女

二 そのみ子
祝せられかし
神の母
いのりを賜へ
臨終の日まで



（をりかへし）

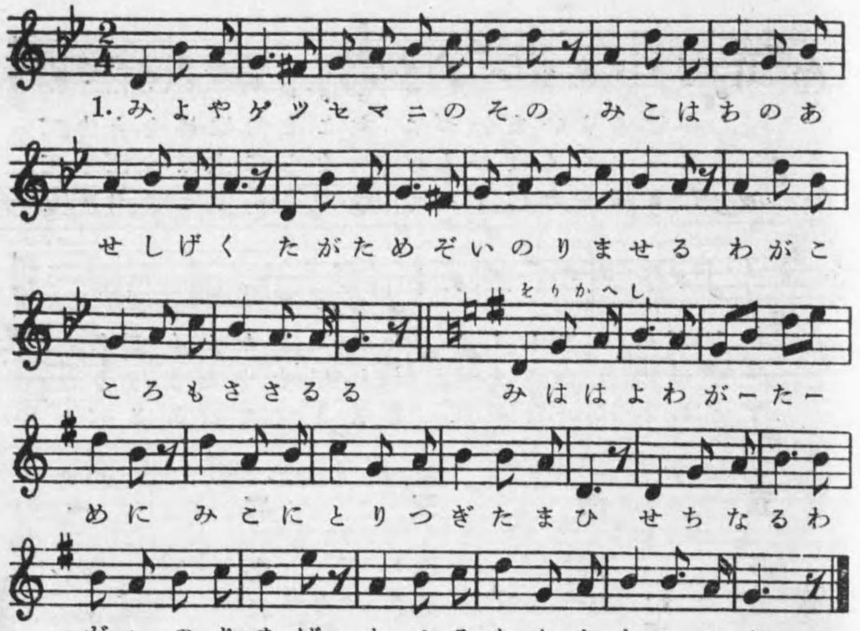
一 天使の宣りたまへば 謙下りますマリア
み救ひのみ子の母と まこと定りましぬ

二 やまざとにその友垣 惠み訪ひませば
我主のみ母來ますと 胎の兒は躍りたり

三 玉の臺をしりぞけ 賤が馬屋に來りて
救のみ子あれましぬ 聖き母のやどりに

四 掟をば無みしまさで 大宮にみどり兒を
み父のみ手に委ねて 捧げまつりし聖母

五 み父の家に來りて み子暫し御眼離り
再びみ母の御手に 歸り給ふよろこび



（をりかへし）

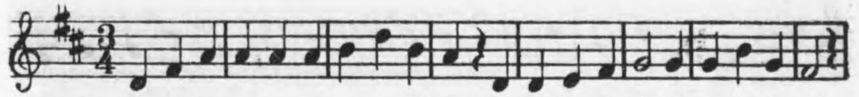
一 見よやゲツセマニの園 み子は血の汗繁く
誰が爲ぞ祈りませる わが心も刺さるる

二 罪なきさへ鞭打たれ 御肌あけに染みて
わがために償ひせす なぞ我斯あるべき

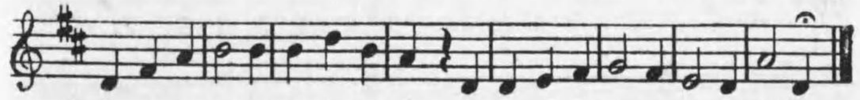
三 人のあざみ茨なる 莉なやましき冠
主の御名を誰かは恥 われぞ君に從はん

四 生木はおもし十字架 二度みたび倒れ
いたましき主の道行 その木我にも賜へ

五 われからと御壽捨て 民を生かしむる君
あやに尊ときその釘 罪の身にも打てよ



1. しのはりよいまいづこ　主こそなはめをときて
2. あれみよくもはひらけ　みそらに主はのぼりて
3. みたまはゆたにくだり　みでしにやどりせすを



よみがへりまししか　われもまたかくぞあらん
みくにのそのさかえ　われにもやたまはりなん
などわれにいなみて　きまさでやはあるべき

一

死の刺よ今いづこ　主こそ束縛を解きて
甦へりまししか　我も亦かくぞあらん

二

あれ見よ雲は開け　みそらに主は昇りて
み國のそのさかえ　我にもや賜はりなん

三

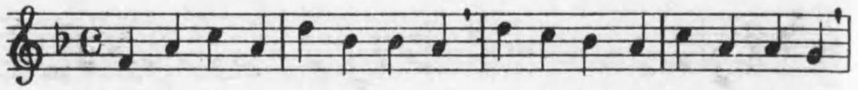
聖靈は豊にくだり　み弟子に宿りせすを
などわれに否みて　來さでやはあるべき

四

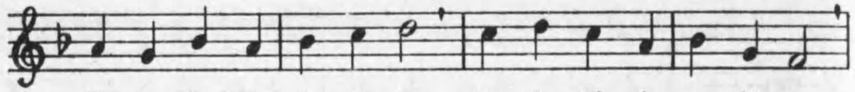
御子のみ許に昇り　よろこびます聖母に
いざ御歌ささげて　死の日の幸を祈らん

五

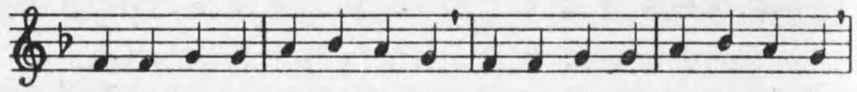
あまつ后のかむり　聖母うけましませば
我等もまた小さき　終のかむり得まほし



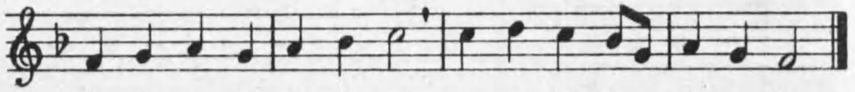
1. こころもきよけき　つみなきマリアよ
2. おもひもことばも　ひごとのしわざも



われらをあめに　みちびくかどよ
ながみてにより　きよめわかちつ



こよなくめでたき　みははときみをし
サタンのいざなひ　ををしくはらひて



たたへあがめて　ひにけにーうたはん
みあとただしく　たのしくーいきなん

一

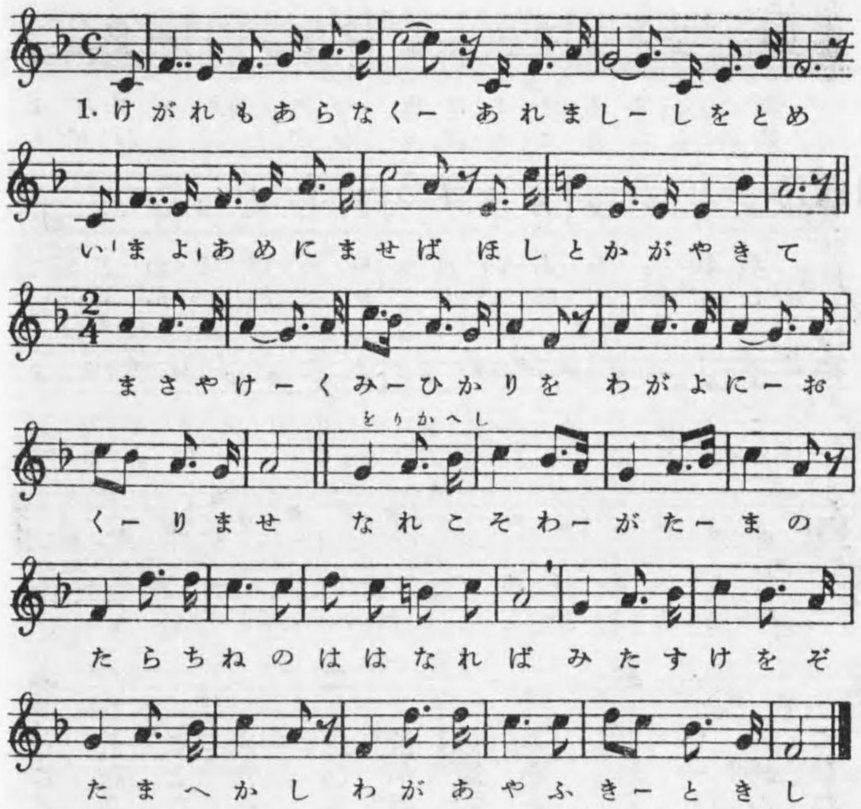
こころも清けき　罪なきマリアよ
われらをあめに　みちびくかどよ
こよなく愛たき　みははと君をし
たたへあがめて　日にけに歌はん

二

思ひもことばも　日ごとの行爲も
汝が御手により　きよめわかちつ
惡魔のいざなひ　雄々しく拂ひて
みあとただしく　樂しく生きなん

三

汚れを知らざる　聖母のまな子と
いやしきわれも　こころ足らひて
み神のみははに　祈ぎごと捧げつ
こひねがはまし　きよきみたすけ



一

けがれもあらなく
生れましをとめ
いまよ天にませば
ほしとかがやきて
分明けくみ光りを
我が世に送りませ

（をりかへし）

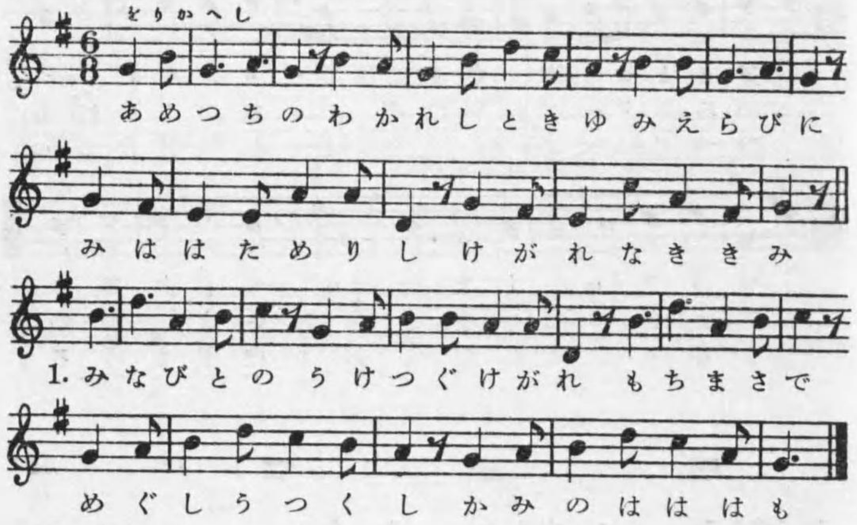
なれこそわが靈の
垂乳根の母なれば
み助をぞ賜へかし
わがあやふき時し

二

夜はなほ降ちて
あかつき未だきに
なみかぜも荒磯の
われよ捨小舟
照らせ海の星かげ
のぞみのわが光り

三

いなづまひらめき
いかづちとどろに
わが主臨み來ます
時しいたりなば
あかつきの星影よ
わが靈まもれかし



（をりかへし）

あめつちの
わかれし時ゆ みえらびに
聖母ためりし 汚れなき君

一

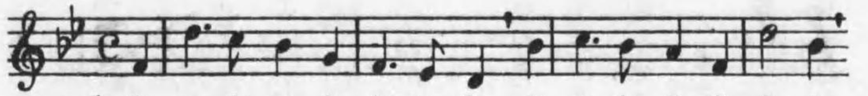
みなびとの
うけつぐ汚れ もちまさで
めぐし美し 神の母はも

二

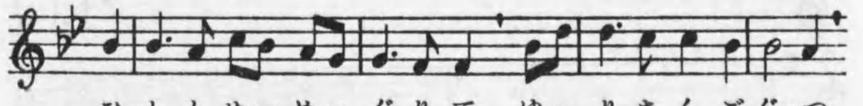
たかくあり
きよく荒磯の 百合のはな
きさいの花の 白百合の花

三

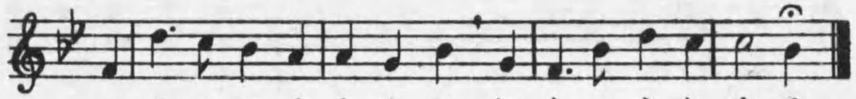
ははのあい
處女のみさを ならびもち
君はまたなき 母なる處女



1. さつきのきさいを　さつきはうたふ
2. マリアのみまへに　ちぐさみだれて
3. みどりのまきばに　みははのこらは



ひととせーめーぐりて　ゆーりさくぐわつ
いろとりーどーりにぞ　にーほふくにばら
ひつじのーどーとくぞ　むーれつどひつつ



マリアしゅくしませ　しゅくせられませ
みかざりにせまく　ちはさきいでぬ
さゆりてにかざし　ことほぎまつる

一

皐月のきさいを　さつきは歌ふ
ひと年めぐりて　百合さく五月
マリア祝しませ　祝せられませ

二

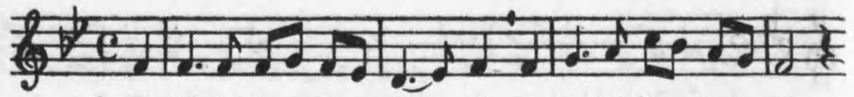
マリアの御前に　千草みだれて
色とりどりにぞ　にほふ國原
み飾りに爲まく　地は咲出でぬ

三

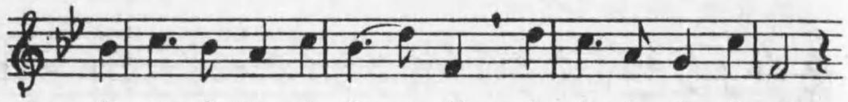
みどりの牧場に　聖母の子等は
羊のごとくぞ　群れ集ひつつ
さゆり手に翳し　ことほぎ奉る

四

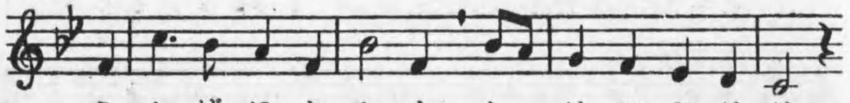
み母立ちませば　あまつ風吹き
世は宛がらなる　とこ春なして
みははの御惠み　地に滿足らふ



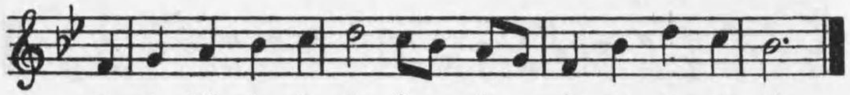
1. かぜもかーをーりーてあをばわーかーば
2. わかぐさーもーゆーるののつかーさーに



さつきせせらーぎ　くしきしらべ
ひともとさけーる　そのしらゆり



こかげにたたす　とーはのみはは
みさをかぐはし　とーはのをとめ



みかげしたひわーれーらこそゆけ
いざたたへなんひーとーのかがみと

一

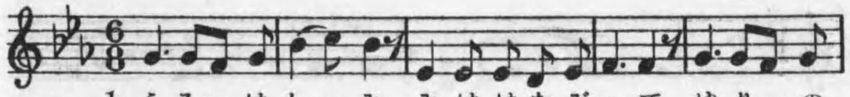
風もかをりて　あを葉わか葉
五月せせらぎ　奇しきしらべ
木蔭に立たす　とはのみはは
みかげしたひ　我等こそ行け

二

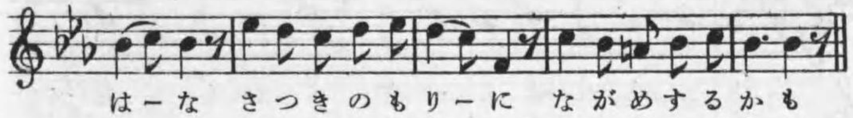
わか草萠ゆる　野の高處に
一本咲ける　そのしらゆり
操かぐはし　とはのをとめ
いざ稱へなん　人のかがみと

三

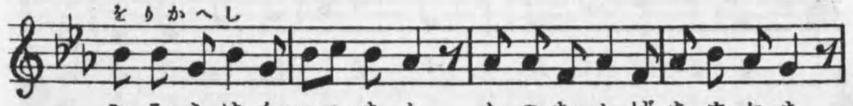
あめや慕へる　御名や呼べる
あがれる雲雀　かそけきそら
高きこころの　とはのきさい
あふぎあふぎ　御榮うたはん



1. うるーはしーみ　みははなぞへて　ゆりーの
2. かをーたかーみ　かくらふべくも　ゆりーの
3. さゆーりばーな　ゆりはまみえむ　ははーに

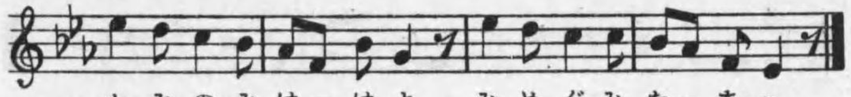


はーな　さつきのもりーに　ながめするかも
はーな　さつきやみさーへ　かくさふべしや
こーひ　みなかぐはしーみ　いのりするかな



をりかへし

みそらゆくつーきと　たのむかげあまねき



かみのみはーはよ　みめぐみたーまへ

一

うるはしみ
聖母なぞへて　ゆりのはな
さつきの森に　ながめするかも

（をりかへし）
み空ゆく月と　頼むかげ洽ねき
神のみははよ　みめぐみたまへ

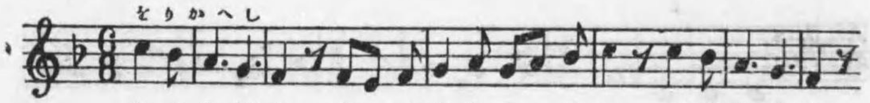
二

香をたかみ
隠らふべくも　ゆりのはな
さつき闇さへ　隠さふべしや

（をりかへし）

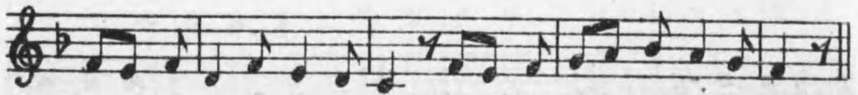
三

さゆりばな
後はまみえむ　ははに戀ひ
御名芳はしみ　いのりするかな

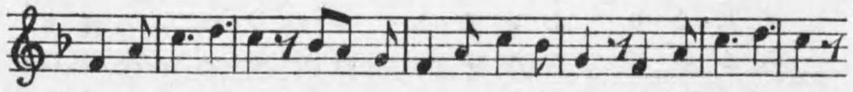


をりかへし

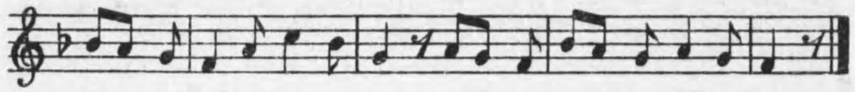
たのしけく　まーつるさつーきの　ほぎうたよ



しーらべもさやに　あーめにーひびかへ



1. みそらには　みーつかひうたひ　ゆきかひて
2. みたたしに　ちーぐさやちぐさ　みどりなし
3. きよけさよ　みーははのこころ　きぬにみて



みーたみのはを　たーたへーあへるも
みーけしなづさひ　たーむけーするかも
あーやにきほしき　そーのみーけしはも

（をりかへし）
たのしけく
まつる五月の　ほぎうたよ
調べもさやに　天にひびかへ

一

みそらには
みつかひ歌ひ　ゆき交ひて
御民のはを　稱へあへるも

二

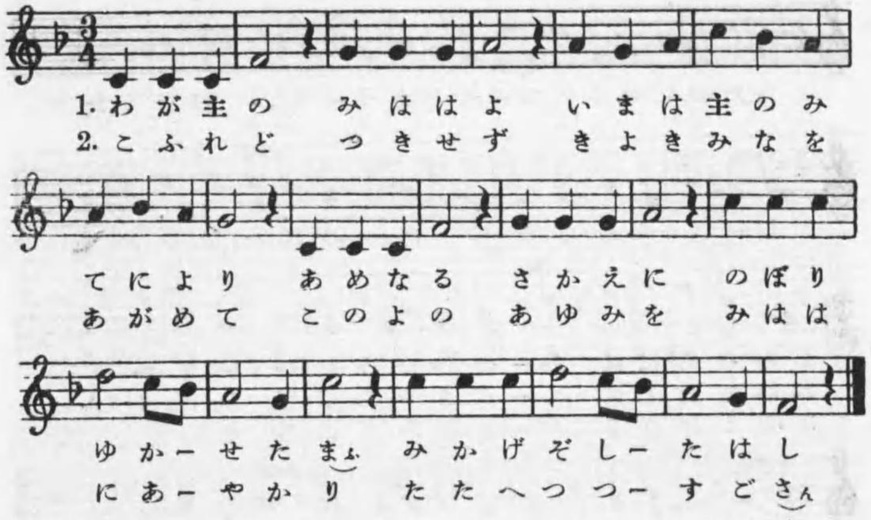
みたたしに
千草八千草　みどりなし
御衣なづさひ　手向するかも

三

きよけさよ
聖母のこころ　衣に見て
あやに着欲き　そのみ衣はも

四

みははこそ
わが垂乳根の　ははなれや
その母の子は　母に似ほしき

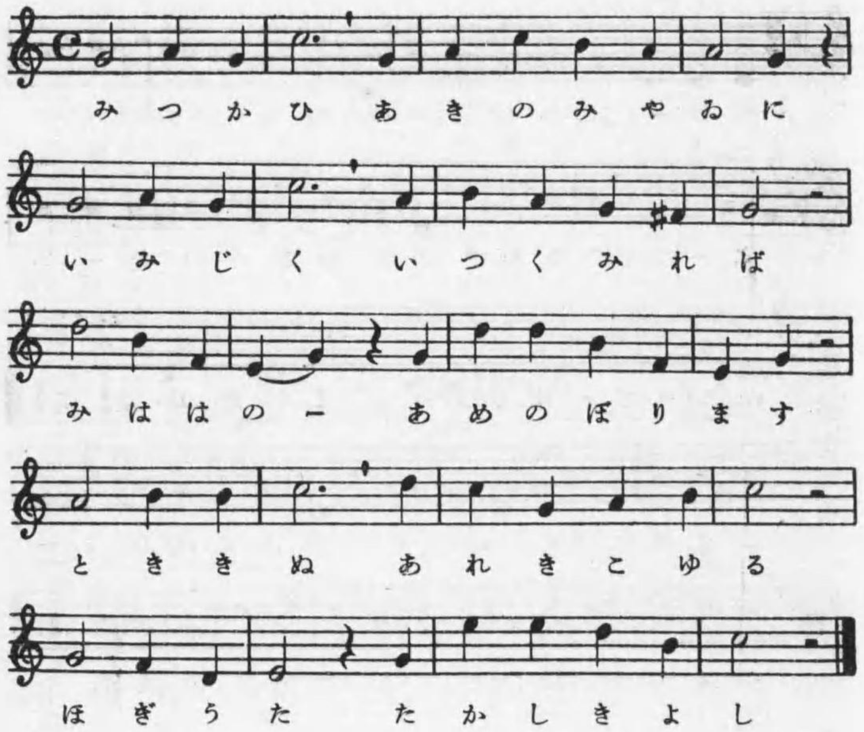


一 わが主の みははよ 今は主の御手により
あめなる さかえに 昇りゆかせたまふ
みかげぞしたはし

二 戀ふれど つきせず きよき御名を崇めて
この世の あゆみを みははにあやかり
たたへつつ過さん

三 みははよ マリアよ 汝にたよるこの身は
なみだの たにより みとりなしいのる
みくにに入るまで

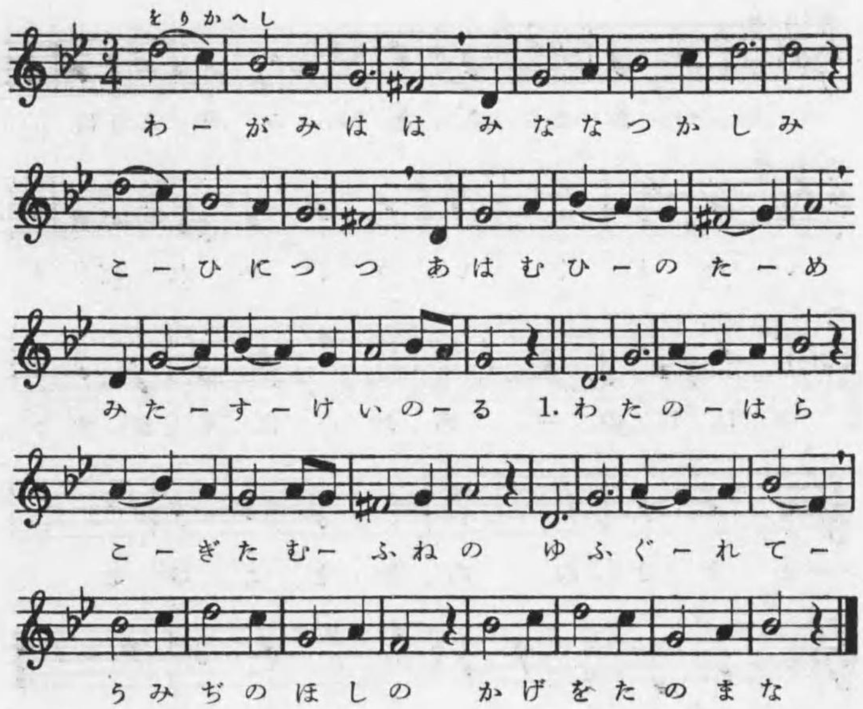
四 さかえに さかゆる 后マリア みははよ
うたへど うたへど つきせぬ我がうた
みくににひびかへ



一 みつかひ 秋の宮居に
いみじく いつくみれば
みはは の あめ昇ります
とき來ぬ あれきこゆる
ほぎうた たかしきよし

二 かみこそ 其子となりて
かしこし 生れましし
かきはに かみの母たる
さだめも 君しらゆり
ゆきます あまつそらへ

三 かのとき 君はうたひし
たかきを 神はおろし
ひくきを 高きに擧ぐと
けふこそ あまつきさい
きみはも い往せたまふ



（をりかへし）

一

わがみはは
御名懷かしみ
逢はむ日の爲

わたのはら
漕ぎたむ舟の
うみ路の星の

戀ひにつつ
み助けいのる

夕ぐれて
影をたのまな

二

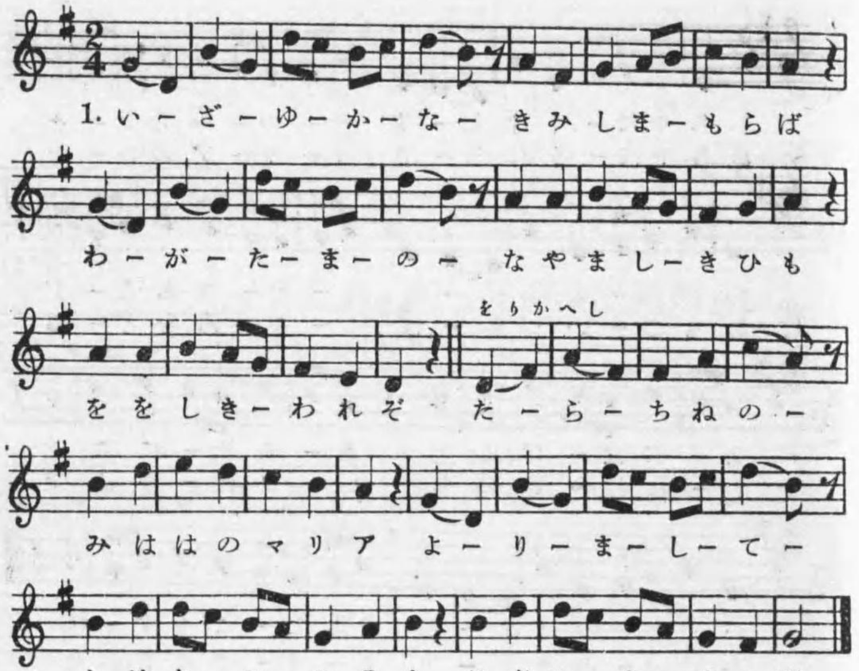
わがふねの
こぎの進みに
覆りもやせむ

岩に觸り
君しあらずば

三

いざみはは
のぞみの星と
光りな隱くし

わが依れば
舟泊つるまで



一

いざ行かな
君し護らば
惱ましき日も

わがたまの
雄々しき我ぞ

（をりかへし）

たらちねの
聖母のマリア
猛きこころし

寄りまして
めぐみ給へば

二

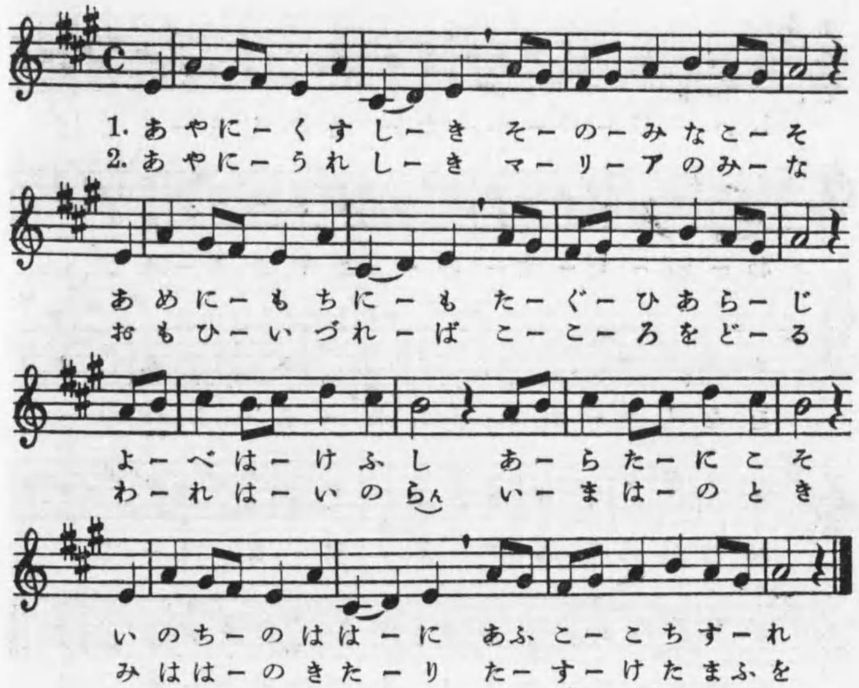
呼びまつる
御名は芳はし
この心はも

いときなき
あめにい向ふ

三

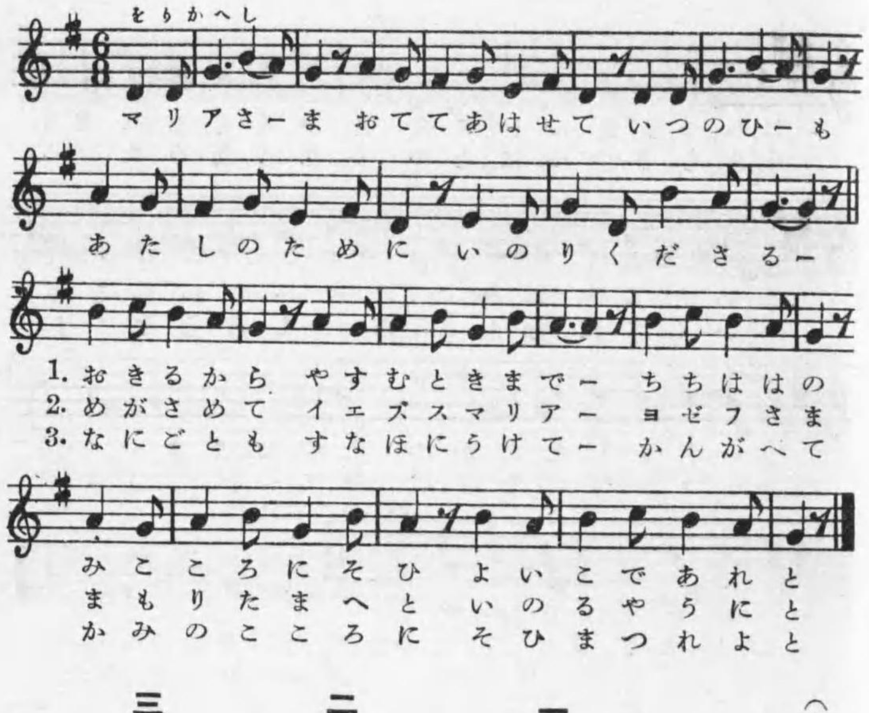
つるぎ太刀
折なば折れよ
闇のちからは

ぬばたまの
君し消ちます



一 あやに奇しき その御名こそ
天にも地にも たぐひあらじ
呼べは今日し あらたにこそ
いのちの母に あふ心地すれ

二 あやに嬉しき マリアの御名
思ひいづれば こころをどる
われは祈らん いまはのとき
聖母の來たり 助けたまふを



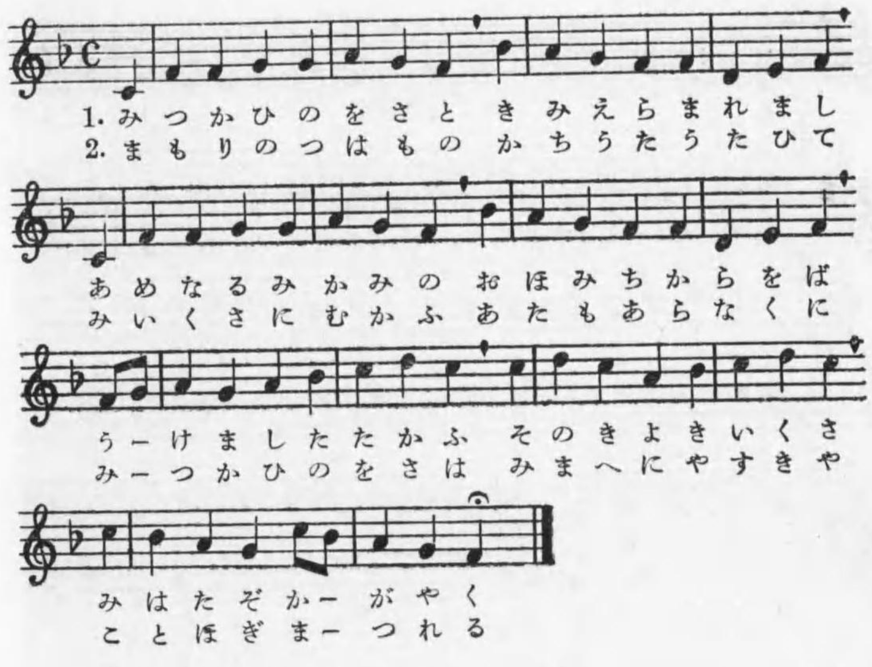
(をりかへし)
マリアさま
お手あはせて いつの日も
あたしのために いのりくださる

一 「おきるから
やすむときまで ちちははの
みこころに添ひ 良兒であれ」と

二 「めがさめて
イエズスマリア ヨゼフさま
まもりたまへと 祈るやうに」と

三 「なにごとも
すなほに受けて かんがへて
かみのこころに そひ奉れよ」と

大天使聖ミカエル　173



一

みつかひの長と　君えらまれまし
あめなる御神の　大みちからをば
受けまし戰ふ　その聖きいくさ
み旗ぞかがやく

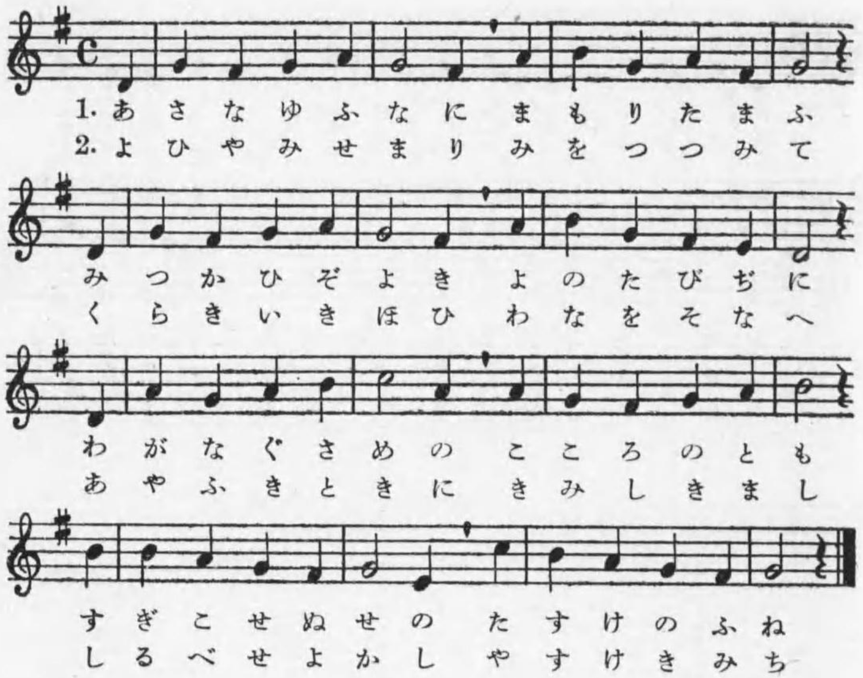
二

衛りのつはもの　勝ち歌うたひて
みいくさに向ふ　仇もあらなくに
みつかひの長は　みまへに平和や
ことほぎ奉れる

三

わが靈魂はも　けだしや疲れて
きみの守らひを　こひ願はましを
聖なるミカエル　みつかひの長よ
われを護りませ

174　天　使



一

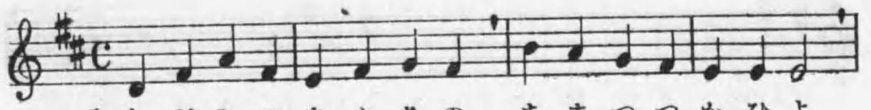
あさなゆふなに　まもりたまふ
みつかひぞ善き　世のたび路に
わがなぐさめの　こころのとも
過ぎこせぬ瀬の　たすけのふね

二

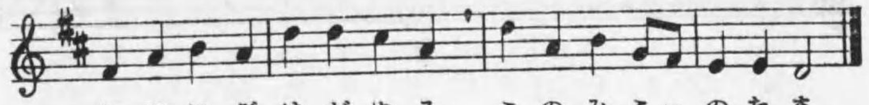
よひやみせまり　身をつつみて
くらきいきほひ　わなをそなへ
あやふきときに　君し來まし
しるべせよかし　やすけきみち

三

この世のたびの　い行き暮れて
死のあらなみの　ひと時にし
われを呑みなば　みつばさもて
あめにみちびけ　この靈はも



1. わ が み の ま も り の　あ ま つ つ か ひ よ
2. い ざ な ひ し り ぞ け　み く に に す す み
3. む ら が る あ た を ば　う ち し り ぞ け て

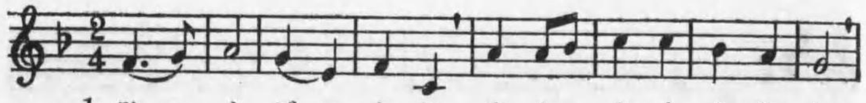


み て に ぞ ゆ だ ぬ る　こ の み こ ー の た ま
い そ し み は げ み て　つ と め を ー は た さ ん
い ま は の き は に も　き み よ み ー ま も れ

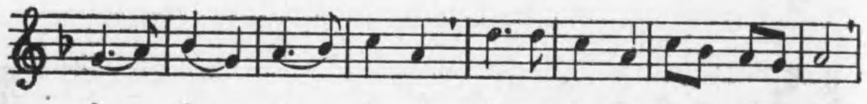
一　わが身のまもりの　あまつつかひよ
　　み手にぞゆだぬる　この身このたま

二　いざなひしりぞけ　みくににすすみ
　　いそしみはげみて　務めをはたさん

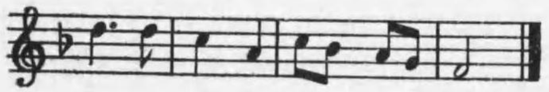
三　むらがるあたをば　うちしりぞけて
　　いまはのきはにも　きみよ見まもれ



1. ひ ー と ど ー と に　ま も ー ら く う れ し
2. み ー え ね ー ど も　み て ー あ た た か く



あ ー ま ー つ ー か ひ　そ の み あ る ー じ ー の
た ー ま ー に ー ふ り　わ が ゆ き ま ー ど ー ふ



ま け の ま に ー ま ー に
み ち に た た ー せ ー る

一　人毎に　守らく嬉し　あまつかひ
　　そのみあるじの　任のままに

二　見えね共　御手温かく　靈に觸り
　　わが行きまどふ　道に立たせる

三　幼稚く　道ゆき知らに　羽含みの
　　あめのつかひよ　負ひて通らせ

四　今なほに　天路は遠し　泊つる迄
　　つばさに乘せて　まもれみつかひ

五　折節に　魔鬼や襲ひなん　劍太刀
　　わが利きこころ　まもれみつかひ